
お嬢様と侍女の憂鬱

原坂秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嬢様と侍女の憂鬱

【Nコード】

N4946P

【作者名】

原坂秋

【あらすじ】

莫大な権力を持つメフィス伯爵家。

主人公は伯爵令嬢に仕える侍女のリドニア。主の婚約を境に、彼女の周りにはゆっくりと動きはじめた。

主であり伯爵令嬢ルーシャント、彼女の婚約者、婚約者の従者を中心に、リドニアの毎日は色づいていく……。

*逆ハー展開にはなりません。

ある日の朝のこと

私達ミュール家は、代々メフィス伯爵家に仕えている。私……リドニア・ミュールの母は侍女長を、父は執事を。弟は次期ミュール家当主として、執事の養成学校に通っている。執事学校は全寮制で、三ヶ月に一度と夏期休校の際にだけ帰ってくる。本当に執事としての礼儀を習っているのかと疑問に感じるほどにふてぶてしいけれど、まあ、ルーシャンお嬢様には愛想よい態度を貫き通していたから良いけど。

さすがに家族の前でまで礼儀正しくするのは疲れるらしいわね。もつとも、父様　ルドルフ執事は、それが性格みたいで、わざわざ「礼儀正しくしている」つもりはないみたい。ロア（弟ね）は基本的に粗雑な奴だから、けっこう気疲れするのかしら。ミュール家に生まれたのだから、しっかりしてもらわなきゃ困るわ。

ちなみに私は、メフィス伯爵令嬢のルーシャンお嬢様に侍女として仕えている。メフィス伯爵には二人のお嬢様がいらっしゃって、ルーシャンお嬢様は二番目のお嬢様。元々は長女であるローズお嬢様に仕えるはずだったのだけど、ルーシャンお嬢様の強い要望でルーシャンお嬢様に仕えることとなったのよ。

幼い頃から……主従関係について理解するよりも前から、私とルーシャンお嬢様は一緒に育ってきた。私を自分の侍女として望んだのは、それが理由だと思うわ。

それと　そうね。ミュール家はメフィス伯爵家に住み込みで働いているけど、当然実家はあるわ。滅多に戻らないからほとんどお祖母様とお祖父様の家になっているけれど、一応名義は父様。当主ですものね。

さて。では、メフィス伯爵家がどれだけすごいのかと分かっている。ただのために、もう一つ。旦那様の妹君であらせられるシンシア様は、国王陛下の第二王妃なのよ！すごいことだとは思わない？私なんて、拝謁したこともないわよ（もちろん、メフィス伯爵家の方々はあるわよ）。一度拝顔賜ったのは、お祭りの時かしら。グウィリ―王国の王都、ドルンで。ここだけの話、美しいお顔ではないわよ？威厳ならあるようだけど。仕えるにはいいけど、夫となったらちよつと……、って感じ。私風情が言えることでもないけど。

とりあえず、これで私と、それからルーシャンお嬢様を取り巻く面々の紹介はすんだかしら。え？若い女二人いるのに、若い男はいないのか、って？

いないわよ。今はね。これからがどうなるのかは、分からないけれど。

私達侍女の朝は早い。と言っても、料理人や馬丁ほどではないわよ。庭園に行つて庭師から薔薇を受け取り（毎日、毎日薔薇よ。ルーシャン様のお気に入りの花なんですって。冬には冬薔薇を栽培させているから、相当よ）、たらいにぬるま湯を入れてから……ルーシャン様のお部屋に向かう。

これは嬉しいし誇らしいことだけれど、お嬢様は自室に私と母のマリア侍女長（仕事中はそう呼ぶように決まっている）しか入れてくださらない。だから、掃除や整理など、お嬢様の自室が関係することは全て私一人でしなくてはならないから、大変よ。

ちなみに、ここでの自室とは、寝室と書斎と私室のこと。マリア侍女長は奥様の侍女をしているので、実質は私が掃除から片付けからベッドメイクまで、全てをこなしていわる。ロアが帰ってきたらあの子にもやらせてるけど。

白と桃色のお洒落な花瓶に薔薇を生けると、私はカーテンを全開

にした。するとベッドにまで太陽の光が届く。

そんなに太陽が高いのか、って？高いのよ。基本的に貴族って、遅寝遅起きだから。

「おはようございます、お嬢様」

声をかけると、お嬢様は唸り声を上げながら寝返りを打つ。そのご身分もあつて、伯爵家には毎日毎日引つ切りなしに夜会やら舞踏会、晩餐会の誘いがくるのよね。近しい方々なら日にちも被らないようにして下さるんだけど、たまに何の手違いかパーティの日にちが被ったりして。どちらに出るかとか、今後を決める重要な決断を旦那様と奥様で悩んでいるのを頻繁に目にするわ。

だからというわけじゃないけど、お嬢様も毎日のように夜な夜なパーティに出向く。一緒に行つて、使用人控室で待っている私ですら疲れるのよ？お嬢様が疲れないわけじゃないじゃない。だから本当は、起こすのが忍びないというのが本心だわ。

薔薇と一緒に持ってきたらいと、その中のぬるま湯。優しく顔をすすいで、柔らかいタオルで撫でるように水を拭いた。

「旦那様が、お嬢様をお呼びですわ」

「ん……お父様が？」

「はい。着替え終え次第、来るようにと。今日はこちらのドレスをご用意させていただきました」

薔薇色のドレスを見て、お嬢様は目を細める。今は寝ぼけていて分からないかもしれないけど、じきに気付くでしょう。まるで……陛下に拝謁賜る時に着るような豪華なドレスだと。

嫌な予感がしていた。

私ではなく、お嬢様に対して。

旦那様も、何とも言えない顔をしていたし。

「素敵なドレスね……着せてちょうだい。どこの仕立て屋？とても良い手触り。今後も贖にしたいわ」

「仕立て屋に伝えておきます」

「ええ」

二十分程かけて着替え終えてから、お嬢様に椅子に座ってもらつ。鏡台を前に運んで、美しい金髪に櫛を通した。梳るたびに、お嬢様の金髪は輝きを増す。美しい髪……そう思わずにはいられない。

細かく編み、クルリと頭を巻くようにして纏めて、鏡の中のお嬢様と目を合わせる。お嬢様はドレスを見つめて、初めてその過ぎた豪奢さに気づいたようだった。

「今日は、王城でランチパーティでもあるのかしら。ねえリドニア？ シンシア叔母様からの招待状でもきているの？」

「これは私の推測ですが……旦那様がお嬢様を呼ばれているのに関係があるのではないかと、」

言われて初めて、お嬢様は自分が父親に呼ばれていたことを思い出したようだった。勢いよく立ち上がり、私のお仕着せを引くと、早くするように示してくる。

「お父様が……なんのご用かしら。なるだけ早く済ませちゃいたいわね」

早く済めばよいのですが、とは心の中で呟いておく。

旦那様の書斎に着くと、私はその扉をノックする。

「ルーシャンお嬢様です」

少しして、旦那様付きの侍従が扉を開ける。お嬢様を先頭に入室すると、旦那様がお嬢様の姿を眺めるように見た。

「とても似合っているよ。ルーシャン」

「ありがとうございます、お父様。用件とは、何でしょう？」

旦那様は何度か口を開け閉めして、最終的に目を閉じてから言った。

「ルーシャン。お前の婚約が決まった」

ある日の朝のこと（後書き）

イメージ的に、ルーシャンは気の強い女の子です。リドニアはそうでもないかな……？

基本的に、リドニアはルーシャンの味方ですね。

驚きとお迎え

婚約……。

私とお嬢様は、きっと同じ表情をしていたのではないかしら。やつぱり、つて。

お嬢様は今年で十五歳。そろそろ婚約話もくる頃だろうと思っていたわ。いきなりではあったけど、旦那様からの呼び出しとして、婚約話であることは想像に難くないもの。

「婚約ですか……」

さすがにお嬢様も大声で嫌だと言い張るほど子供ではなかった。内心ホツとしながらも、私はお嬢様の次の台詞を待つ。

「それは……どちらの令息でしょう？」

貴族の結婚で、三十も歳の離れた老人と、という話は聞くわ。でもそれは、どちらかと落ちぶれた貴族の場合が多い。財産に困って、好色な老人に娘を……というのが多いと思うわ。伯爵家には財産はあるし、歴史もある。

引く手数多なのよ。

それに、旦那様はローズお嬢様とルーシャンお嬢様、つまりご自身の子を愛していらっしゃっているから、数ある引く手からお嬢様が傷つく場所に嫁げとは言わないでしょう。何より、お嬢様はこんなにも美しいのだから！

旦那様はしばらく視線を泳がせてから、真剣なお嬢様を見ずに、ぼそぼそと答える。

「……ヒルドマン侯爵の……リクト……殿……」

旦那様の最愛の奥様にそっくりなお嬢様。その顔が絶望と驚愕に歪む。その顔を見つめて、すぐに目を逸らし、旦那様は窓の外を見た。

お嬢様だけじゃないわ……私だって驚いた。

ヒルドマン侯爵とは、旦那様の政敵とも言える方なのに。ヒルドマン侯爵の姉君、ミーユ様は、国王陛下の正妃でいらっしゃる。

シンシア様とミーユ様の仲は知らないけど、その家族同士が不仲なのは、カラスが黒いものと同じくらいに当たり前のことだわ。

例えば晩餐会などで顔を合わせてしまっても、スツと目を逸らすのだとか。どちらも無駄に（といっては不敬かしら）権力はあるので、ほとんどの貴族はメフィス伯爵派かヒルドマン侯爵派に別れているらしい。

お嬢様の婚約者として、これまで誰かな、あの人かな？と考えたことはあるけど。まさかヒルドマン侯爵家の方だとは。考えたこともなかったわ。

けれど、私の驚きなど序の口だったらしい。

「それで、ルーシャン。本日、相手方からランチパーティの誘いがきている。対面という意味もあるだろうから、行って……って、リドニア！」

「はい？……っつ、お嬢様！？」

お嬢様は絶句したまま卒倒された。

お嬢様を抱えた侍従（当初は旦那様が運びたがったのけど、腰を痛められてしまい、侍従と交代した）と共に、お嬢様の寝室に向かう。揺らさぬようゆっくりと歩く侍従を睨みつけた。

「どうしたことよ、ヒルドマン侯爵家との婚約なんて！」

「音量を下げなさい。お嬢様が起きてしまわれます。……このことは、旦那様から拝聴したことです……、今回の婚約は、先方の意思だそうです。元々、ヒルドマン侯爵家の方々はこちらほど相手に敵意は持っていないようですからね。まあそれでも、未来の奥方をお嬢様を選ぶほどの好意も持っていなかったと思います。」

まどろっこしい言い方。

けれど、こちらほど相手を嫌っていない、と言つのに笑えた。
確かに、向こうは正妃の一族、こちらは第二王妃の一族。あえて嫌うほどの相手ではないということよね。皮肉なものだわ。

「では、何故、ルーシャンお嬢様を？」

「それは旦那様も疑問に思われていたようでした。最初はかなり渋っておられましたから。先方がずいぶん条件を呑む形になったそうですよ」

「条件？」

「ええ」

頷いてから、彼は王城に納める葡萄酒が、ヒルドマン侯爵領産が八割だったのを、メフィス伯爵領産のものを五割にして……と私の管轄外のことをペラペラと話した。

「そ、そうなの」

「本当に分かってますか？」

「分かってるわよ」

などと話していると、お嬢様の寝室に着いた。侍従が迷わず中に入ろうとするのを慌てて止める。

「ま、待ちなさい。何をしようとしているのよ！」

「何って……運ぼうとしていますわが」

「ここはお嬢様の寝室なのよ！」

「分かってますよ」

私の言いたいことが伝わっていないらしい。私は彼からお嬢様を奪おうとした。

「り、リドニア？」

「は、恥を知らないさい！この部屋は、私以外侵入を許可されていないわ！」

侍従は「ああ」と頷き、謝罪してから私にお嬢様を背負わせた。ぐらぐらとして不安そうに侍従は私を見ていたけど、私が部屋に入りお嬢様をベッドに横たえたのを確認して旦那様の書斎に戻った。

本当に美しい方ね、とお嬢様の顔を見ていると、ゆっくりとその唇が弧を描く。

「ふふ……」

どう考えても寝言でない笑い声に、私はお嬢様の顔を覗き込んだ。主人に対して礼を失する態度であつたけど、お嬢様は咎めなかった。「お嬢様？起きてらしたんですか」

「ええ。侍従が部屋に入ったら、目を開けて彼の頬を張ろうとしていたの。リドニアに止められて、あれは幸せだったわね」

ニヤニヤと笑いながら言い、お嬢様は私に抱き着いてくる。

「ねえ、大好きよ。リドニア。ヒルドマンのことが嫌いなくらい好き」

「それは……」

相当好いて下さっているのね……。

「嬉しいです」

私は使用人だからお嬢様の背に手を回すことができないけれど。その小さな手と細い腕に身をまかせて、私も同じくらい貴女のことを愛している、と伝えたのだった。

どれだけの時間、そうしていただろう。お嬢様は現実から目を背けるようにして私にしがみつき、私はそんなお嬢様の行為を何も言わず受け入れていた。

私がふと窓を見ると、屋敷の前に大きな箱馬車があつた。

お嬢様もそちらを見て、小さく「ヒルドマン侯爵家だわ」と呟く。馬車についている家紋で分かったらしい。私も習っているので、顎を引いてそれに同意した。

少しして、扉がノックされる。びっくりとお嬢様の肩が跳ねるのが分かった。

「体調が優れぬ時に、申し訳ございません。……ルーシャンお嬢様、ルドルフです」

父様　ルドルフ執事の声。お嬢様の許可をいただいて、私は部屋扉を開けた。

「何のご用でしょう」

私の声に含まれるトゲに気がついたのか、ルドルフ執事は眉をひそめた。

けれど、不出来な娘を咎めるよりも伝えるべき用件のほうが重要だったらしく、穏やかな口調で言った。

「ヒルドマン侯爵令息、リクト様が、ルーシャンお嬢様を迎えにいらつしゃいました。旦那様より、準備が整い次第、向かうようにとのことです、お嬢様」

お嬢様は、感情を消した顔で頷いた。私は思わずルドルフ執事の燕尾服を掴む。

「わ、私も一緒にしてよろしいでしょうか!？」

「何言ってるの、当然よ!」

答えたのは、父様ではなくお嬢様だった。

馬車の中より愛を込めて

迎えの馬車へ行く最中、私達はまるで葬儀でも行っているかのように思ったらしい（父様がこの後に語った）。お嬢様は顔を伏せて、こう言っては縁起が悪いけれど……処刑が執行される直前の死刑囚のようだった。私だって、負けず劣らず暗かっただろう。

庭園に咲き誇る薔薇やその他の花が、やけに白々しく見えた。お嬢様は手触りがよいとおっしゃっていた薔薇色のドレスを皺になるほど握りしめていらっしやる。

歩みは恐ろしくスローペースで、前を歩くルドルフ執事が何度か立ち止まって振り返るほどだった。ルドルフ執事だって、そんなに早足ではない。いつ立ち止まるのか。立ち止まってしまえば、次はどうあっても動き出さないだろうなと思わせた。

「ルーシャンお嬢様」

柔らかく囁くと、お嬢様はハッと私を見た。薔薇色のドレスから手を離して、私のお仕着せのスカート部分を掴む。

ええ、価値的にも、私のスカートを掴んだほうがよろしいかと思われず。

いくら牛歩で進んでも、スタートを切ったならゴールが存在するのだと、馬車が近づいてきて、私はそのことを実感してしまった。

私達は、馬車の前に着いて歩みを止めた。

「お初にお目にかかります。貴女がメフィス伯爵令嬢ルーシャン」
メフィス様でしょうか……？」

馬車の前に立っていた男（と言っても、私より少し年上くらいだわ）が優雅に礼をする。彼が侯爵令息ということはないだろう。ベストもシャツも上等なものだったが、侯爵の嫡男が着るようなものではなかったから。

お嬢様は一度私のお仕着せを強く握ってから、パツとその手を離れた。

「人に名を問う前に、貴方から名乗りなさい。自分は名乗らずに、わたくしに名を名乗らせるのですか？こんなにも恥をかいたのは、初めてです！」

あの意気消沈は嘘だったのかと思うほどに鋭く攻撃的な言葉が、お嬢様のお可愛らしい唇から発せられた。驚いたのは、男よりもむしろ私達、父娘ではないだろうか。ルドルフ執事は顔色を変えずにさも当然、という顔をしているが、私は思わずお嬢様を凝視してしまつた。とん、とルドルフ執事に背を叩かれ、弾かれたようき視線をそらす。

「これは……大変失礼致しました。リクト〓ヒルドマンの侍従と護衛を兼ねて務めさせていただいております、ティルー〓ディエラと申します。……これでよろしいでしょうか、レディ？」

スツとお嬢様の手を取り、手の甲に口づけた。

長年仕えていたから分かるわ……。今、お嬢様は有り得ないくらいに嫌がつている。事実、お嬢様は控えめに彼の手を振り払つた。

「ええ、結構。わたくしがメフィス伯爵令嬢、ルーシャン〓メフィスです。こちらはわたくしの侍女のリドニア〓ミュール。どのような場所、状況下においてもわたくしはこの者を傍から離さないわ。異を唱えることは許可しません」

私は、思わず泣きそうになつた。

通常、一人の侍女など一々紹介しない。私を先方に紹介するということは、私にもそれ相応の扱いをせよ、というお嬢様の意思だ。それが伝わつたのだらう、これまで一度も私の方など見なかったティルー殿は初めて私を見た。

「初めまして、リドニア殿」

「……初めまして」

ぐっ！手を取られた！！お嬢様は慣れていらつしやるけど、私は慣れてなどいない！！

止めて、止めてーっ！

私がうつたえているのにも気付かず、ティルー殿はスツと口づける。

頬が引き攣るのを押さえ切れない。

「では、参りましょうか」

一人にここにこと爽やかに微笑んでお嬢様に手を差し出す。

ヒルドマンに縁のある人物に触れられたことで怒りと嫌悪で震えていらっしやったお嬢様。差し出された手を、キョトンと見つめてしまう。

「ルーシヤン様？お手を」

「あ……えっ、ええ」

エスコートされ、お嬢様は馬車の中に消えていく。私は振り返り、ルドルフ執事と目を合わせた。

「行ってまいりますね、ルドルフ執事」

「ええ。……手は、かならず拭くようにして下さい」

小声で呟かれた言葉に、私は思わず笑ってしまった。

ええ、父様。

心の声は、父様に聞こえたかしら。

「……リドニア殿？貴女もエスコートが必要ですか？」

中に入ろうとしない私に痺れを切らしたのか、ティルー殿が出てきた。

まあ！エスコートを待つて入らない高飛車女とも思われたのかしら。

だとしたら、とんでもない誤解だわ。

「必要ありません！」

どうぞ、と差し出された手を払って、私は自力で馬車に乗り込んだ。

「どうしたの？リドニア」

あからさまに手の甲を拭うお嬢様にティルー殿は肩を竦め、御者に発車するよう告げた。

ゆっくりと馬車は発進し、お嬢様にとっては地獄とも等しいヒルドマン侯爵邸に近づいていく。

「リクト様は、ルーシヤン様が来られるのをとても楽しみにしていましたよ。私がこちらに迎えとして参る際も、自分も来たいと騒い

でましたから」

馬車の中で話すのはティルー殿だけだったけれど、その話の中でティルー殿とリクト様の関係性が見えた気がした。

私とお嬢様とは少し違うのね……。友達みたい。だって、私はお嬢様を表す時に「騒ぐ」なんて言葉使わないもの。

「まあ。来て下さらなくて良かったわ。この狭い馬車が、もっと狭くなっていたでしょうから」

私の気のせいかもしれないが……。お嬢様は意識的に嫌味を言っている気がする。だって、本当はとてもお優しい方だもの。

それに、別にお嬢様の言葉を否定するつもりはないけれど、この馬車は狭くない。向かい合って座るタイプなのだが、私とお嬢様が向かって手前、ティルー殿が進行方向に背を向けるようにして座っている。「あ、申し訳ございません。ルーシャン様がおっしゃられる前に気付くべきでした。リドニア殿」

「はい？」

手招きされ、屈むようにして身体を近づけると、腕を捕まれてティルー殿の横に座らされた。な、な、何を……。！？

「これでいかがでしょう、ルーシャン様？確かに広いと誇るには心許ない馬車ですが、少しは快適になりましたか？」

快適どころか、お嬢様は「不愉快極まりない」という表情をしていた。

「お黙りなさい。リドニアを返して」

前に行ったり後ろに行ったり……。

お嬢様が私の服を掴もうと身を乗り出したところで、馬車が強く揺れた。

「お嬢様……！」

お嬢様を抱きしめるようにして庇った私は、気付かなかった。

ティルー殿が私を庇おうとして手を伸ばして下さったこと、私がお嬢様に抱き着いたせいでティルー殿の気持ちが無駄になったこと（出しかけた手を、気まずそうに戻したこと）、そんな様子をお嬢様

が見て、初めて緊張がほぐれたように笑い顔になったこと。

私がお嬢様から離れたら、お嬢様は笑顔になっていて、ティル―殿を思い切り笑い飛ばしていらっしやった。

「……？どうなさいました？」

「いいえ。何でもないわ。揺れると危ないから、リドニアは私の横に座りなさい」

はい、と頷いてからティル―殿に目を向けると、サッと逸らされた。本当に、何かしら。お嬢様ではないけれど、ヒルドマン侯爵家の方々がティル―殿みたいだったら嫌だわ。

そんなこんなでしばらく経って　私達の乗る馬車は、ヒルドマン侯爵邸に到着した。

ランチパーティと小人薔薇

馬車からエスコートされて降りたお嬢様は、ヒルドマン侯爵邸の庭園を見て息を呑んだ。

自力で降りた私だつて驚いたわよ。

薔薇、薔薇、薔薇！

童話の女王の庭園のような　赤、白、黄の、色鮮やかな薔薇達が庭園を埋めつくしている。蔓薔薇の絡まったアーチ、野薔薇の群生……薫る薔薇の匂いは、薔薇好きのお嬢様には堪らないものだろう。こちらの奥様も、お嬢様と同じように薔薇がお好きなのかしら……？ ティルー殿がエスコートし、お嬢様は薔薇園（といっても差し支えないだろう）の中を歩く。ドレスと相まって、まるでお嬢様はこの庭園の女主人のよう。もしくは、美しく、可憐な薔薇の精霊……。薔薇のアーチをくぐると、そこには噴水が。ここにも薔薇が飾られていて、水面には大輪の薔薇が浮かんでいる。これ、毎日交換しているのかしら。

キョロキョロと庭園を観察する私を見て、ティルー殿はくすりと笑った。

今、笑われた……！？

頬が熱く発熱するのを感じながら、私は気付かなかつたふりをし続けた。

噴水から少し逸れた所に、純白のテーブルクロスがかかった長テーブルがおいてある。もちろん、テーブルだけがポンと置いてあるわけではなく、その上にはローストビーフや鴨のパイ包み、春野菜のサラダ、サンドウィッチ……と料理が並び、果てには何人分よ、と呆れるほどの新鮮な果実。お嬢様のお好きな苺が大量にあるのは

気のせいね、きっと。

テーブルには椅子が二つ設置されていて、男性が一人座っていた。「リクト様。ルーシャン様をお連れしましたよ」

ガタツと音を立てて彼　侯爵令息は立ち上がった。

「ようこそ伯爵令嬢殿。お出で下さって真に　」

「わたくしに触れないで、無礼者！」

すくうようにして取られた手で、お嬢様はリクト様の手を強く叩いた。真っ青になったのは私よ！

確かに、私も心の中ではお嬢様に触らないで、と思った。でも、実際の身分からしたらお嬢様の方が下なわけで。格上の相手の挨拶を拒むなど、そちらの方が無礼にあたる。

……ああ、どうかリクト様が海よりも深く広い心の持ち主でありますように！

なにがあってもお嬢様を助けられる体勢を作ると、私はリクト様の反応を待った。

「ひいっ！」

お嬢様が悲鳴を上げた！見ると、払った手を再び取られたらしい。すばやく固まっているお嬢様の手の甲にキスすると、リクト様はティール殿を追い払う仕草をした。

「ティール。いつまでルーシャン殿に触れているつもりだ？」

「ふふ、思っていたよりもずいぶん可愛らしい方でしたから……。ルーシャン様、リクト様との婚約は止めて、私と婚約致しませんか？」

「ティール！」

非難の込められたリクト様の声に、ティール殿はサツとお嬢様から離れる。冗談じゃないわ。もし万が一、お嬢様が頷いたらどうしてくれるのよ！

ティール殿が私の横に立ったので、私は三步ほど移動した。

「……………」

「な、何か？」

無言で見られた。嫌っていることがばれたかしら。

「いいえ、別に」

私とティール殿が話している間に、リクト様はお嬢様を椅子までエ

スコートしていた。

そういえば、ここに使用人は私とティル殿しかない。紅茶を注いだりは、誰がするのかしら。

「ルーシャン殿、紅茶はダージリンでいいかな？」

そう言つて、ティーポットに手をかけたのはリクト様だった。え？ご本人が注ぐの！？そんなこと、させられないわよ。

「わたくし、ダージリンは好みませんの。止めていただけるかしら」紅茶全般を好むお嬢様は、そう言つてリクト様から顔を背けた。可愛らしい。けど、私としてはいつリクト様がお怒りになるのか、それが不安です。

「リクト次期侯爵様。私が紅茶を注ぎます……！」

「ルーシャン殿の侍女か？侍女の分際で口を挟むなど無礼な」

おつしやる通り。けれど、私にとって何より大事なのはお嬢様だもの。

「あら、リドニアが入れるの？ならば飲むわ」

「……」

いかにも渋々といった風にリクト様はティーポットを私に差し出す。かなりいたたまれない雰囲気の中、私は紅茶を入れたのだった。

「……ルーシャン殿、自己紹介がまだだったな。私はヒルドマン侯爵令息」

「リクト＝ヒルドマン様。存じております。わたくしも名乗らなければいけないかしら。もうご存知かと思われませんが」

横に立っていたティル殿が小さく、「感じ悪っ」と呟いた。後で覚えておきなさい。

「名前を覚えてもらっていたとは。嬉しい限りだ」

実はいい人なのかしら。リクト様つて。もしくは鈍感？お嬢様の言葉のトゲをまるで無いものみたいに扱つて。

「ところで、ルーシャン殿。貴女は薔薇が好きだという情報が……」「情報？」

「いや、噂があるらしいな。どうだろう、庭師に、庭園の花全てを

薔薇に替えさせたのだが」

全てを！！噂一つで？

あのアーチとか紅薔薇とか、二日三日じゃできないわよ！？

そんなリクト様の（庭師の？）苦勞を、お嬢様は鼻で笑った。

「薔薇は世界で二番目に嫌いです。この甘ったるい匂いも、何もかもが大嫌い」

リクト様は貼付けたような笑顔のままテイル殿を呼び付けた。

「はい？何でしょう」

「庭師はクビだ」

「伝えておきます」

「ちょ、ちよつと待って！」

自分の嘘の影響が庭師の人生にまで及んでいることに気付き、お嬢様は慌ててリクト様を止める。

ヒルドマンの庭師にまで同情するなんて、なんて慈悲深いお方かしら。

「薔薇は世界で二番目に嫌いですが この栽培技術は素晴らしいと思いますわ。ええ、あの小人薔薇など、他人の庭園で拝見したのは初めてです。そんな才能のある人物を解雇するなど、愚か以外の何物でもありませんわ」

小さな、野薔薇よりも小さな薔薇を指差してお嬢様は興奮したように言い募る。そんなマニアックな品種まで知っているのに薔薇が嫌だって……とリクト様が思われないといいのだけれど。

「ルーシャン殿はお優しい方だな……。ちなみに、薔薇は世界で二番目に嫌いだとおっしゃっていたが 一番嫌いなものを教えていただいても構わないだろうか？」

何かしら、お嬢様が世界で一番嫌いなものって。

お嬢様は花も恥じらう、とてつもなく可憐で優雅な笑みを浮かべ、おっしゃられた。

「ヒルドマン侯爵家ですわ」

しーん、と、何とも表現しづらい沈黙が辺りを包み込んだ。

それから当たり前障りのない話題が続き、お嬢様は一定の笑みを保ったまま相槌を打たれていた。料理は不敬にならないギリギリの量しか口を付けなかった。

「リクト様、お聞きしてもよろしいでしょうか」

「何です？ 出来るかぎり答えましょう」

「何故　わたくしを婚約者に？ 正直なところ、賢しい選択とは思えませんわ」

私も、一番聞きたかったことだわ。むしろこれを聞くためにここに来て来たと言っても過言ではない。

リクト様は真面目な表情になって、お嬢様の方に手を伸ばした。長い指はお嬢様の顔のサイドに垂らされている髪をとる。お嬢様は嫌そうにしながらも黙認されていた。しかし、リクト様がその髪に口づけるとサツと身を引かれた。

「貴女に恋をしたからだ。　レディ・ルーシャン」

「こ………！？」

お嬢様、絶句。これまでの人生の中で、一番驚かれていますしやるんじゃないかしら。私だって驚いたわよ。

真っ青になった顔はじよじよに赤くなっていく。あ、言うておくけど、照れてるのは違うわよ。怒りで赤くなってるの。

「馬鹿にしないで！ 失礼するわ！！」

「もう？ 来たばかりじゃないか」

帰るには早い時間だけど、来たばかりと言うほどじゃないと思う。

私とリクト様の間には時差でもあるのかしら。「楽しくて時間を忘れていました」を素でやっているのかもしれないわね。

「……仕方ない。ティルー、ルーシャン殿をお送りして」

「かしこまりました」

ティルー殿は白々しく頭を下げて、お嬢様に手を差し出す。お嬢様はそれに見向きもせず私の手を取った。

「リドニアがエスコートして！」

「……はい。お嬢様」

私はお嬢様の楯にでもなったつもりでリクト様とティルー殿を睨みつけると、ヒルドマン侯爵家の馬車に乗り込んだ。今回はティルー殿が御者役をしてくれるらしい。最悪、私が御者をしようと思っていたから安堵した。今、お嬢様を一人にするのは不安だったから。

「リドニア、リドニア……」

「お嬢様……」

「あたし、ヒルドマン家に嫁ぐなんて嫌……」

それは、お嬢様の初めての本音だった。飾り気のない、ダイレクトな言葉。

それを聞いたところで何ができるということはないけれど。

それでも、本心を包み隠さずに吐露することでお嬢様の心が少しでも軽くなるのなら。

しばらく抱き合っていると、馬車は止まりティルー殿が箱馬車の扉を開ける。

「到着しました……ルーシアン様……リドニア殿？」

すー、と寝息を立てている私達を見て、ティルー殿は目を丸くした。十五分程度しか走ってないのに、と。

「どうしよう？」

そこにリクト様がいたのなら、滅多に困った顔をしないティルー殿の途方に暮れた顔をみて驚いただろうけど　生憎、彼のその顔を見た人はいなかった。

「ルーシアンお嬢様のお帰りですか？」

「ああ、執事さん」

窓からヒルドマン侯爵家の馬車を見て迎えにきたルドルフ執事は、眠っている私達を……特に私を見て眉をひそめる。

「仕事中に眠るなんて　」

「ああ、構いませんよ。執事さんはルーシアン様をお願いします」

「はい？」

どうぞ、と渡されたお嬢様を抱え、その後にティル殿が私を抱えて お姫様抱っこよ。ありえない。まだ俵担ぎの方がマシだった

出てきたのを見てルドルフ執事は表情を変えたらしい。

その五分くらいの間に身近な人の珍しい表情が見れたのに、私は見逃してしまったのだ。

「てい、ティル殿。それは起こして下さい。今は仕事中のだから」

「いえいえ、構いませんよ。一度、リドニア殿をこうして抱き抱えてみたかったです」

「は……」

「ずっとこちらを睨んでいましたから、多分嫌われているのでしょ
うね」

女性を抱える男性二人。

屋敷では、さぞ浮いていたことだろう。

「使用人として、主に忠実であることは、美德だと思いませんか？」

「……そのことでしょうか」

「限定はしません」

「……」

「私 僕もメフィスのことは好いていません。ルーシアン様のよ
うに。ですが、リドニア殿のルーシアン様への愛には感心している
のですよ」

ルーシヤンの部屋の前に着くと、ルドルフ執事は私を起こすようテ
ィル殿に言った。

「ルーシヤンお嬢様の部屋に入れるのは、それだけなのです」

「すごい決まりですね。不便でしょうに」

「誰も反対はしておりませんから」

何度か揺らされて私は目を覚まし 目の前にティル殿の顔があ
って驚いた。

「わ、うわ！」

「嫌な驚き方……」

な、なんで私が……お姫様抱……いや、抱えられてんのよ！父様もいるし！！

「リドニア。お嬢様を部屋にお運びして下さい」

「は、はい……」

もしかして、馬車の中で寝ちゃった？二人そろって。こんなこと、マリア侍女長にばれたら説教モノだ。

意識のないお嬢様を運ぶのは、本日二回目。

運び終え、私はティル―殿に頭を下げた。一応、私をあそこまで運んでくれたみたいだもの。起こしてくれて全然構わなかったけど。

「不注意で眠ってしまい……迷惑をおかけしました」

「いいえ迷惑だなんてとんでもない。とても可愛らしかったですよ。役得でした」

「そう言っただけでしたら幸いです」

「では、馬車まで見送って下さいよ」

今、迷惑だなんてとんでもないって言ったじゃない。やっぱり迷惑だったんだわ。

とはいえ、言われなくとも客人（？）の見送りはしなければならな
いことだったので、私は頷いた。

「ええ。もちろんです」

ルドルフ執事に頭を下げ、私はティル―殿と共に屋敷から出る。

「では、また来ます」

「……お待ちしております」

……社交辞令かしら。実際にまた来られたら、迷惑なんだけど。

「それと、リクト様のあれは、冗談ではないですよ。あの方は本気
です」

「恋をした」発言のことだろうか。冗談だろうが本気だろうが、ど
ちらにしても笑えない。

「あ、それとですね」

「ティル―殿、私も貴方に用件があります。こちらに来ていただけ
ますか？」

テイルー殿は怪訝そうな顔をしながらも私に近づいてきた。

「あのですね。……お嬢様は、感じ悪くありません！」

勢いよくかかとで足を踏んでやった。

「感じ悪っ」と言った仕返しよ！これでもまだ足りないくらいだわ！

「いつ　！？」

苦痛に顔を歪めたテイルー殿に頭を下げて言ってやる。

「道中、気をつけてお帰り下さい」

「これを庭師に渡しておいてください」

何かの種うしきのを私に渡してから、テイルー殿は御者台に座って馬に鞭を振るった。

……なんの種かしら？

屋敷内に戻る前に庭師に渡すと、彼は、

「これ、小人薔薇の種ですよ！咲く花の大きさと違い、種は薔薇の中でも最大なんです！うわあ、初めて見ました！」

私は庭師と興奮を分かち合えなかった。

小人薔薇は、時期になればきっと伯爵邸でも咲くだろう。庭師は自分の命よりも大事にしそうだし、お嬢様は薔薇の栽培のためなら資金援助を惜しまないから。ヒルドマン侯爵邸とメフィス伯爵邸にだけ咲く、稀少な稀少な小人薔薇。

もちろん世界に二つしかないわけではないだれうから、そう言い切れるわけではないけれど。

私には、小さな薔薇がヒルドマンとメフィスを結び付ける証のようなものを感じられた。

ランチパーティと小人薔薇（後書き）

小人薔薇というのは、完全に私の創作です。あつたら可愛いなー、と思いますが。

長い一日の終わり

ランチパーティー後、お嬢様のヒルドマン嫌いは悪化した。

馬車の中で眠られて、私が部屋に運んでから一時間くらい経ってから目を覚まされたのだけど。

「り、リドニア！」

「はい、お嬢様。こちらに」

「湯浴みをするわ。準備して。洗髪は特に念入りにしてちょうだい！」

髪に口づけられたことを、かなり気にしていらっしゃった。当然よね。私だって、ティル殿と別れてから何度も何度も手を洗った。アルコールで消毒までしたのだから（そしてそれをルドルフ執事は止めなかった）。

「かしこまりました。ただいま湯を張りますので、三十分ほど入浴できるかと」

そして、私は水で薄めたアルコールを含ませたハンカチーフを取り出す。

「お嬢様、手を消毒致します」

「ええ、ええ。そうだわ、リドニア。鋏はさみを貸して。髪を切るから」

「いけません！その美しい髪を切られるだなんて……」

一度訪問しただけでこんなのでは、結婚した後はどうなるのかしら……。向こうに住むのよね。お二人は、夫婦になられるのよね……。駄目だわ。私の乏しい想像力では、その様子が浮かばない。お嬢様（結婚したら、奥様って呼ぶのよね）がリクト様を毎日拒絶しているところしか浮かばないわ。

そして、私も毎日ティル殿と顔を合わせるの嫌。考えただけでもゾッとするわ。ストレスで重い病にかかりそう。

「ここにおいても気が滅入るだけね。リドニア、庭園へ行きましょう。風を浴びたら、少しはこの嫌な気分が払拭されるかもしれないわ」

お嬢様……なんとけなげな方かしら。私まで氣遣って下さるなんてたとえ重い病にかかろうがストレスが溜まろうが、私はお嬢様についていきます……！

ドレスを着替えて、お嬢様と私は庭園へ出た。ヒルドマン侯爵邸の庭園は、悔しいが素晴らしかった（あそこまで薔薇に固執しなくてもいいと思うけれど）。

「……殺風景なものね。この庭も」

お嬢様も、ヒルドマン侯爵邸の庭園を思い出していたらしい。肯定も否定も出来ず、私は黙っていた。

「ねえ、あたし、ヒルドマンに嫌われようと思うのよ」

「ヒルドマン……リクト様にですか？」

「ええ。向こうから申し込んできたのだから、向こうから断らせればいいのよ」

お父様は、断る気なさそうですもの、とお嬢様は皮肉げに付け足した。お嬢様にこんな表情をさせて。私は旦那様を恨むわ。

「でもきつと、無駄よね。たとえヒルドマンが私を嫌ったとしても、じゃあ止めます、ってなるはずないもの」

お嬢様の言葉は正しかった。いくらヒルドマン侯爵がメフィス伯爵よりも格上だったとしても、一方的にとりつけた約束をおいそれと簡単に破棄などできないのだ。それに、旦那様付きの侍従によれば、色々な条件や契約まで絡まっている。伯爵の権力と地位を考えても、破棄されることはまずない。

破棄されるとしたら、重婚、遺伝する病持ち、妊娠発覚……。

お嬢様には言わないでおこう。

「お姉様が、羨ましいわ」

ぼつりとお嬢様がおっしゃる。

お姉様とは、お嬢様の姉君であらせられるローズ様のこと。ローズ様はすでに婚約なされていて、今はご婚約者様のお屋敷に住んでおられる。

最終的にはご婚約者様が次期メフィス伯爵になられるのだけれど……

…、私が言うことでもないけれど、ローズ様のご婚約者様はいい方なの。

たしか ウォルツ伯爵の次男の、リジン様、だったかしら。そして、珍しいことにローズ様とリジン様は恋愛結婚なの！

この時代、ローズ様ほどの身分で恋愛結婚なんてすごいことなのよ。

「……お嬢様、そろそろ湯浴みの準備が整っていることでしょう」
「そうね」

ローズ様が幸せならば幸せなだけ、それに比べて自分は……. と思っ
てしまう。そんなお嬢様の心情は、私のような者でも簡単に察せら
れた。

浴室で、お嬢様の長い金髪を湯で流す。湯がかかると少しだけ色が
濃くなったように見えて、そんなお嬢様の髪が私は大好きだ。

「……リドニア」

「どうかいたしましたか？お嬢様」

「明日……あたしの予定って無かったわよね？」

私は頭の中でお嬢様の予定を思い出した。ええ、次の予定は、四日
後の舞踏会だ。

「はい。明日は何の予定も入っておりません」

「では、あたしの湯浴みが終わり次第お姉様に手紙を書いてちょう
だい。明日訪問しても構わないか」

「明日……ですか？」

ずいぶんと急な話だ。大体の確率で断られるでしょうに。

今は、ちょうど空が茜色になってきた頃。お嬢様の湯浴みを終わら
せて手紙を書き（そのインクが乾くのを待って）、それを届けさせ
たらもう夜だ。

でも、今は、何よりもお嬢様の意思を尊重したい。ええ、もう、土
下座でもなんでもしてやるわ……. !

湯浴みを済ませ、柔らかく軽い生地ドレスをお嬢様に着せたら既
に外は暗かった。お嬢様と旦那様、奥様が夕食を召し上がっていら

つしやる間に、私はウォルツ伯爵家に訪問願いの手紙を書く。

下男にそれを渡し、届けさせた。

どうか、ローズ様が良い返事を下さりますように。

お嬢様が眠ってからしばらくして　下男が帰ってきた。

「リドニアさん。これ、お返事です」

「ご苦労様。貴方、もう休んでいいわ。皿洗いは私がしておくから。本当に、悪いわね、こんな夜遅くに」

「いえ。リドニアさんの頼みは、そんなに辛い方じゃないですよ」

「ふふ、ありがとう」

ローズ様からのお返事の封筒からは、ふわりと薔薇の香りがした。それを自室に置いて（ミュール家は、一人部屋がもらえるのだ）、厨房に向かった。下男の分の皿洗いを終えると、月が高く昇っていた。

ランプに火を点すと、ローズ様からの手紙を読む。

……内容を一言で言うと、「他のお客様もいらつしやるけれど、それでもよかったらいらつしやい」という事だった。むしろこちらがそれを聞いているのに！

でも、いくらローズ様でも、本当に駄目なときは断るわよね。これは来ても構わない、ということよ。

ローズ様からの手紙を抱きしめて薔薇の芳香を吸い込み、私は簡素なベッドに倒れ込んだ。

今日は、長い一日だったわね。

なんて思いながら。

翌日。私は寝坊してしまった。二十分くらい。誰かに揺すられて起きてたらツールがいたから、驚いたわよ。ツールっていうのは、旦那様付きの侍従よ。昨日お嬢様を運んだ恥知らず（なんで今まで名前を出さなかったのか、って？私、あの人嫌いなもの！）。

昨日は色々なことがあったから、きつと疲れていたのね。なんて言い訳したいけど、マリア侍女長に「自覚を持ちなさい！」と怒られ

た。

「落ち込むことないわよ。リドニア。むしろ助かったわ。今でもこんなに眠いの、これより二十分も早く起こされていたら、きっとウォルツ伯爵の屋敷で昼寝することになっていたもの」

朝から落ち込んでいる私のことを、お嬢様は慰めて下さっている。主に気を遣わせるなんて、私使用人失格よ。

いつもより細かく髪を結うと、私とお嬢様は部屋を出た。屋敷の前に馬車を待たせているのだ（旦那様にウォルツ伯爵邸に行くことを言つと、快く馬車を貸して下さった。少しはお嬢様に申し訳なく思っているのかしら）。

「お姉様に会うの、久しぶりだね。私が記憶よりも成長していて、驚くかしら」

「ええ、きつと驚きますわ」

私が太鼓判を押します、と言つと、お嬢様は花のような笑みを零した。

お嬢様の純粋な笑顔を見たのは久しぶりな気がして、私まで嬉しくなる。

懐かしい思い出話に花を咲かせて、私とお嬢様はウォルツ伯爵邸に向かった。

レディ・ローズ（１）

ローズ様は、私が本来仕えるはずだった方だ。お嬢様よりも三つ年上の十八歳で、今年の秋、ご結婚なさる。使用人の欲目がなくても、とっても美しい方。お嬢様もお美しいけれど、お二人とも奥様に似たのね（べつに、旦那様が醜いというわけではなく！）。

けれど、よくある通り、お二方の性格は全然似てらっしゃらないの！ルーシャンお嬢様が、強気なハツキリ型だとしたら（もちろん、性格など一言で言えるわけがないので、タイプ、という意味で言うてるのよ）、ローズ様はおっとりした方。いくら怒った人がいても、ローズ様を見ていたらその怒りも収まってしまふのではないかしら。

そう言えば、私、ローズ様が怒ったところ見たことないわ。リジン様もそうだけど。あの方々の夫婦喧嘩、一度でいいから見てみたいわ……。

それに対して、お嬢様とリクト様の夫婦は（お嬢様からの一方的な）喧嘩が絶えなさそうね。常に冷戦状態な気がする。婚前に縁起が悪い想像だけど、きつとルドルフ執事やマリア侍女長だって領いてくれるはずよ。

頻繁に、「屋敷の庭園は、屋敷に住む人の人柄を示す」と言われている。ま、ヒルドマン侯爵邸は考えないとして（あれが彼らの人柄だったら、恐い）メフィス伯爵邸やウォルツ伯爵邸においては、その言葉も当たっていると思うわ。だって、どちらの屋敷にしても、とても上品に花が咲いているんですもの。それって、庭師の腕もそうだけど、それだけじゃないと思うの。

やっぱり、主の性格とかが出てしまうのよ。庭師に指示を出しているのはその家の主人だし。

ウォルツ伯爵邸の庭園は、見ていてとても優しい気持ちになるの！お嬢様がローズ様に会いたいとおっしゃられたのも、この庭園の存在が大きかったんじゃないかしら。華々しいというわけではないけ

れど、ふと目を止めて見つめていたいと思わせる。

私達はウォルツ伯爵邸の庭園に目を向けて、ほうつと感嘆のため息を漏らした。

「相変わらず、優しい庭園ですね」

「そうね……」

優しい庭園、というのは、文章としてはおかしいかもしれないわ。でも、ウォルツ伯爵邸の庭園は正しく、「優しい」と形容するのがぴったりの庭園なのよ。

庭園を眺めながらウォルツ伯爵邸の敷地内に入ると、一人の女性が声をかけてきた。服装を見る限り、メイドらしい。

「お待ちしておりました。ルーシヤン様でございますね？ローズ様がお待ちですわ」

「お姉様は？」

「ローズ様は庭園の方で、お茶会をなさっております。ご案内いたします」

「いいえ、結構よ。勝手に探すから。一応、伯爵に私達が来たことを伝えてちょうだい」

「かしこまりました」

メイドは頭を下げてから、動こうとしない。私達客人よりも先にその場から退出してはいけないと教育されているのだろう。

お嬢様は屋敷に入らず、庭園に足を踏み入れた。さく、と青い芝生を踏んで。お嬢様は庭園がよくお似合いになる。まるでお姫様だわ。そんな方にお仕えしている自分がとても誇らしく感じる。

「あ、ルーちゃん、ここよ、ここー」

庭園の奥から声がする。お嬢様をルーちゃんなどと呼ぶのは、ローズ様ただ一人だ。お嬢様も嫌がっているそぶりを見せるけど、まんざらでもないらしい。

進むと、淡いピンクブロンドの髪を品よく結った女性が椅子に座っていた。ローズ様だ。その横にはかつての同僚でもあり従姉妹でもあるエリザがいた。

「あらあら、リドまで。相変わらずねえ、貴女はリドしか側におかないのだから」

「あら。いけない？リドニアしか信用できないのよ」

「いいえ。一人でも信頼できる人がいることは、とても幸せなことなのよ」

エリザがお嬢様の紅茶を注いだ。香りを楽しむように紅茶に鼻を近づけて、お嬢様は微笑んだ。

「やっぱり、この庭園で飲む紅茶は最高ね」

リラックスしたお嬢様を見て、なんだか私もリラックスしてしまう。お嬢様が私を信頼して下さっているように、私もお嬢様を信頼しているのだ。

「ねえ、エリザ、リド。貴女達も椅子に座って？」

「え、ですがローズ様……」

戸惑う私の肩を抱いて、エリザが笑った。

「リドニア、座りましょう。懐かしいでしょう？無礼講・ティーパーティー」

無礼講・ティーパーティーとは。

ローズ様が屋敷にいらした頃、ご自身主催で開いていらしたお茶会だ。大抵の場合、客は私やお嬢様や、エリザやトール（トールはこのお茶会が苦手だったらしい。後日談だけど）。皆が椅子に座り、紅茶はセルフサービス。そのまま爵位や使用人であることを忘れて楽しむパーティーをローズ様はそう呼んでいた。

実際は紅茶を注ぐのもお菓子を足すのも私やエリザやトールがやっていたけれど。それは言わぬが花、ってやつね。

エリザは椅子に座るやいなや、私のタイに手を伸ばしてきた。

「ほら、リドニア。タイが曲がってるわよ。服には花びらが付いているし」

主の前で私語をする。無礼講・パーティーだからこそその芸当だ。実際に無礼講と言っても、まさか主に「いっつも起きるのが遅いのよ」などと言えるわけがないのだ。許されるのはこの程度。

「分かってるわよ。いつまでも子供扱いしないで」

中途半端な無礼講。そんな、逆に気を遣うお茶会でも、楽しいのはローズ様の人柄だろう。

「ふふ。いつもあたしの保護者みたいなリドニアも、エリザにかかったら子供みたいね」

「お嬢様まで……」

「でも、エリザも今朝なんて」

「ろ、ローズお嬢様、それは言わないで下さいと何度も」

数年前と同じ笑い声は、この庭園に合っていた。

お嬢様とローズ様はさすが姉妹というべきか、久しく会っていないことなど感じさせない。私とエリザだってそうだ。

けれど、別の場所で人生を歩んでいた期間は確かに存在するわけで、相手がその時何をしていたのかわからない、分かるはずがないのだ。会っていない期間の相手を知ることにより、相手を近く、そして遠く感じるのだ。

私達はそれを、この日に体感するのだった。

レディ・ローズ(1) (後書き)

シリアスになるっぽく終わりましたが、そうでもありません。

レディ・ローズ（２）

ウォルツ伯爵邸に来て正解だった　お嬢様を見ていると、そう思えた。

気を許せる姉君に会えたこと、美しく優しい庭園で美味しい紅茶を飲めたこと。ウォルツ伯爵邸に着いてから起こったことは、一つ一つ全てがお嬢様にとってプラスになったのだらう。私の幸せはお嬢様が幸せになること（ベタだけど、本当に）だから、私にとってもこの訪問は有意義になるはずだった。

「あら、お菓子がなくなっていますね。……紅茶も冷めてる」
無礼講・ティーパーティーの途中、エリザがテーブル上を見て、それからティーポットに手を当てて言った。

「新しいものを持って参りますね。ローズお嬢様、ルーシャンお嬢様はそのまま続けていらして下さい」

「ええ。分かったわ」

「悪いわね」

お嬢様方も心得たもので、「無礼講なのだから私が……」なんておっしゃられない。そんなことを言い出したらどうなるのか、以前に身をもって体験されたからだ（三倍の時間がかかった、とだけ言うておくわ）。

エリザがプレートとティーポットを運んでからも、無礼講・ティーパーティーは続いている。

「お姉様、今日いらっしゃるお客様って、どなたなの？リジン様のお客様？」

「いいえ。多分、もうすぐいらっしゃると思うわよ。きっと驚くわ。その方は、明日開かれる、夜会にも参加されるから、一晚宿泊されるのよ」

私の考えすぎかもしれないが　ローズ様は、相手方の名をわざと

伏せているようだった。

「夜会？ウォルツ伯爵邸で行うの？」

お嬢様は興奮したように、頬を赤らめてローズ様の方に身を乗り出した。

夜会かあ、と私も夜の庭園を心の中に思い描く。噴水の周りに並べられる色付きのキャンドル、花を神秘的に見せるランプ……素晴らしいわ。

「そうよ。ルーちゃんも参加するのでしょうか？」

「え？いいの？嬉しいわ！」

予定は空いているものの、お嬢様はドレスを用意していない。ローズ様のものでは合わないだろうし……サイズの合わないドレスを主に着せるだなんて、私が耐えられない。本当なら一ヶ月前から仕立て屋に通いつめて最高の一着を準備したかったけど。時間がないわね。一週間後の晩餐会のために詭えたドレスを屋敷から持ってきてみよう。アクセサリーは……そうね。あの紅珊瑚の耳飾りと……首にはピンクサファイアのものがかいかしり。それともお嬢様の白い肌を強調させるためにあえて濃いアメジストをおくべき？いえ待つて。お嬢様はローズ様の妹として参加するのよ！？明日、ローズピンクのルージュを買いにいかなくては……。主をどう輝かせるか 私達侍女にとって、夜会とは戦いの場になるのだ。

キキー、と馬車が止まる音がして、私は顔を上げた。

「お客様かしら」

「ローズ様、私が見て参ります」

ローズ様が立ち上がるのを止めると、私は庭園から屋敷の正門に向かった。

「ローズ様のお客様ですか あ」

御者台から降り、ベストの汚れを払っている男。彼の顔を見て、私は一切の行動を止めた。瞬きすらできない。

「……おや、リドニア殿。一日ぶりですね」

彼 テイルー殿は私の半分も驚いていなかった。愛想の良い表情を浮かべている。

「リクト様。ルーシャン様がいらっしゃっているようですよ」

「何！？ルーシャンが？」

馬車から勢いよく出てきたのはリクト様。リクト様の驚き方は、この方がお嬢様がこの屋敷にいることを少しも知らなかったことを如実に表していて、私は安心した。なんか、テイルー殿みたいに何を考えているのか分からない人って苦手なのよね。

……というか、今リクト様、お嬢様を呼び捨てにしなかった？

テイルー殿と二人のときは呼び捨てにしているのね、と容易に察せられる。

嫌味の一つでも言ってやりたいけれど、リクト様がお嬢様の名を呼び捨てにしたとき、私は嫌悪感を全く感じなかったから だから、一度だけ私は目をつぶることにした。

「お前は ルーシャン殿の侍女か」

何で？何で？何でこんなところにいらっしゃるの！？

そんな思いをおくびにも出さず、私は頷いた。

「はい。リクト様は、ローズ様のお客様でございますか？」

「ルーシャン殿もこちらに？」

……話が噛み合っていない！

どうしたものかと迷っていると、援軍がきた。

「ヒルドマン侯爵様！お待たせして申し訳ございません」

エリザだ。ティーポットもプレートも持っていないから、きつとローズ様が寄越して下さったのだわ。

「いや、私はまだ侯爵位は継いでないから伯爵だが……」

貴族の次期様って、爵位を継ぐ前は父君の爵位の一つ下を名乗るの。だから、侯爵位の下は伯爵位。だからリクト様はヒルドマン侯爵位以外にも別名の伯爵位をお持ちのはずだ。

でも、大抵の人はそんな作法無視してるわよ。父親の名を名乗りま

くつてる。たしかに、守らなくたって罰を受けるわけでもないし、実際に将来はその名を名乗るのだからその気持ちは分からないでもない。

「失礼致しました、リクト様。ローズ様は庭園でお茶会を開かれております」

「ルーシャン殿と？」

「ええ。ローズ様の妹君、メフィス伯爵令嬢ルーシャン様も一緒にございます」

につこりとエリザは微笑み、「ご案内いたします」と告げた。

ティルー殿は控えていた下男に馬車を預け、明日の夜（夜会が終わった後ね）に迎えにくるよう申し付けていた。

そして、私の顔を見て目を丸くする。

「あれ？リドニア殿。待っていて下さったのですか」

「はい？」

横を見るとエリザとリクト様が　いない！なんて迅速な行動。いつ動いたのかも分からなかった。

「ローズ様方は庭園ですね。僕達も参りましょう」

「はい。……僕？」

この人、一人称「僕」だったかしら？ジッと見ると、ティルー殿は居心地悪そうな顔になった。

「普段から私、なんて呼んでいるわけではありません。もちろんリクト様も。同じ使用人ですし、堅苦しいことは止めようと思ひまして。駄目ですか」

「いえ別に」

本当を言うと、ティルー殿の一人称など、どうでもいい。私には何の関係もないもの。

素っ気ない私に、ティルー殿は苦笑される。

「ところでリドニア殿。一つ聞いてもいいですか？」

「どうぞ。答えるかは内容によりますけれど」

「リドニア殿は、ヒルドマンを嫌っていますよね？ああ、これは質

問とは違います。つまり聞きたいのは――

もしも。もしもですよ？と、ティルー殿は前置きした。

「ルーション様が、ヒルドマンを嫌いではなくなった、とおっしゃられた時。なおもリドニア殿はヒルドマンのことを嫌いますか？」

「いいえ」

即答できる質問だった。

だって　お嬢様が嫌っておられない者をどうして私が嫌うのか。

お嬢様がヒルドマンを愛すると言えば、私もヒルドマンを愛すだろう。

「では、リドニア殿はそこまでヒルドマンを嫌ってはおられないのですね」

そんな私の忠誠を知ってか知らずか、ティルー殿はあっけらかんと言いつつ切った。

「ど、どうしてそういう結論に達するのです！？」

「だって、そうでしょう？人の意見で変わるような意思ならば、それは大したものではありません」

「そ、それは……っ！」

私の反論から逃げるようにティルー殿は早足になって庭園の奥に進んでいく。広い広い庭園の中を迷いなく進む様子から、彼ら（ティルー殿とリクト様）がウォルツ伯爵邸に頻繁に通っていることが見てとれた。

ガシャンツというガラスと金属がぶつかる音がしたのは、その直後だった。

それが洋菓子の乗っていたガラスのプレートと、ティースプーンであることはすぐに分かった。分かったというか……音に驚いてお茶会を見に行つて、理解した。

お嬢様が顔を真っ赤にしてリクト様を睨んでいる。

「ルーション殿。落ち着いてくれ。余計なことをして悪かった」

ご自分に向かつて手を伸ばすリクト様に向かつて、お嬢様は予備のティースプーンを投げつける。

「ヒルドマンは触らないでちょうだい！」

「あらあら、ルーちゃん？危ないわよ。ティースプーンなんて投げちゃ駄目じゃない」

「お姉様だつて同罪よ！あたしがどれだけヒルドマンを嫌っているかご存知でしょう！！」

ど、どういう状況なの……？

お嬢様がリクト様を嫌がられるのは理解できるけれど、ローズ様まで責められる理由が分からない。ティール殿が小声で、

「……リクト様はこれまでに、何度かローズ様からルーシャン様の情報を得ていたのです」

とカミングアウトする。そんな重大な秘密をついでみたいに言わないで。

お嬢様がお怒りになるのも当然よ！

ローズ様はお優しい、それこそ聖母のような笑みを浮かべた。

「……ねえ、ルーちゃん。ルーちゃんのそれは、根拠のある「嫌」なの？」

「根拠なんてないわ。ヒルドマンは嫌い。それだけよ」

「これは私の推測だけど……ルーちゃんのヒルドマン侯爵嫌いは、刷り込みのようなものだと思うの。生まれた時から、お父様はヒルドマン侯爵の……その、あまり良くないことをおっしゃられていたから。だからルーちゃんもヒルドマン侯爵と聞くと、悪くしか思わないのではないかしら。リクト様とヒルドマン侯爵位を離して考えてみたら　ね、どう思う？」

優しい顔に似合う、少し高めのお美しい声。その言葉は、一概に間違えているとは言えないのでないだろうか。

ローズ様は、変わったわ。

今まで、ローズ様がお嬢様にそのようなことをおっしゃったことはなかった。けれど今言うのは、きっと、婚約した妹の幸せを願った

から。

怒っていらつしゃったお嬢様は顔を歪めてそれを聞いていた。
ヒルドマン侯爵嫌いが有名なお嬢様。言わば、ヒルドマン嫌いはお嬢様のアイデンティティだったのだ。

これまでの自分が否定されたように感じてても無理はない。

リクト様を見て（リクト様は不器用な笑みを浮かべた）、お嬢様は逃げ出した。

「きゃっ」

逃亡は十メートルも続かなかった。

ダッシュしたお嬢様は、こちらに向かっていた男性に捕まったのだ。

「……ルーシャンじゃないか」

「リジン様……」

ウォルツ伯爵令息、リジン様。リジン様は、もう二十歳は越えていらつしやる。

美形ではないけれど、温厚そうな顔立ちは、ローズ様の隣がよくお似合いになる。性格がお美しい方なのよ。

「どうかした？ 小さな私の天使」

「うっ……リジン様……！」

わっと泣き出したお嬢様を、リジン様は優しく抱きしめた。

感動の場面ね……。

私は、そんなお嬢様達を見ていることしかできない。そして、そんな自分が齒痒くて仕方がなかった。

リジン様はお嬢様が泣き出した経由をご存知ないけれど、だからこそ慰める人としてはピッタリなのね。

「ちょっと、リジン殿！ ルーシャン殿は俺の婚約者ですよ！？」

「ヒルドマンは触らないでと言っているでしょうー！」

……リクト様、台無しです。

当日の朝（前書き）

ローズ様とリジン様は出てきません。
リクト様とリドニアの絡みが多いかな？
お嬢様の登場シーンは少なめです。

当日の朝

あれからお嬢様は、ウォルツ伯爵邸の客室に引きこもられた。入る前に、「リドニア以外入らないで！」と宣言して（それを嬉しい、なんて考えるのは、悪いことかしら）。

デイナーの時間になっても部屋から出ようとされないの、私がお食事を客室に運んだ。

お嬢様は、天蓋のついた広いベッドの上で、毛布をかぶっていらっしやった。お可愛らしいけれど……その表情が暗くて、私の胸は痛んだ。

テーブルに食事を置いて、お嬢様はソファに座って。私はお嬢様の傍らに立っていた。

「……ねえ。リドニア」

「はい、お嬢様。何でしょう？」

「ヒルドマンは……リクト様は、どうしてらっしゃる？」

リクト様か……。

今この瞬間、その名で眉をひそめるのはお嬢様でなく私だった。

「お嬢様を心配なさっておいででした」

五分に一度私のもとに来て、「ルーシャン殿はどうだ？」と尋ねてくるほどに。

五分に一度よ？

顔にも声にも出さないけれど、うんざりしたわ。

「そうなの」

「あ、お嬢様。明日の夜会は、どうなさいますか？参加されるようでしたら、色々と前準備が必要になりますか……」

前準備が必要なものもあるけれど、これはリクト様に聞いてこいと頼まれていた内容だ。

リクト様はお嬢様のパートナーとして参加されるつもりらしく（婚約者なので、当然といえば当然なのだが）、お嬢様が夜会に参加さ

れるのか、とても気にしていらっしゃった。

聞きましょうか、と申し上げたところ、過剰なまでに喜んで下さった。

「ええ……参加するわ」

「そうですね。お嬢様を着飾らせるのは、私の楽しみでもありますからね。腕がなります」

「ふふ……そうね。いつもあたしよりリドニアのほうが楽しそうよね」

お嬢様が笑われた。たったそれだけのことなのに、私の心は一気にかかるくなった。

お嬢様が食べ終えた食事の皿を運んでいると、待つてましたとばかりにティルー殿が寄ってきた。

「リドニア殿！」

「何です？」

「どうでしたか？リクト様がしつこいので、一秒でも早く結果を教えてくださいただきたいんです」

確かに、どこことなくティルー殿は疲弊しているようだった。こは意地悪く無視するよりも素直に教えたほうがいいかもしれない。「お嬢様は、明日の夜会に参加されるようです。もちろん、今後のご気分によってはどうなるかわかりませんけれど」

というのは、お嬢様が「やっぱり嫌！」となった時の予防線だ。貴族の令嬢として良い態度とは言えないが、私はそんなお嬢様を責めるつもりは全くない。

「そうですね。良かったです！」

ティルー殿は分かりやすいくらいに喜んだ。ここに私がいなければ、一人で万歳でもしそうな勢いである。

「ずいぶん嬉しそうですね。貴方が。主思いなのは結構なことですけど」

「違います。これでルーシャン様が参加されない、なんてことにな

れば、八つ当たりは全て僕にくるんです。同じことを何時間も愚痴られて……さすがに疲れますからね。情報をありがとうございました。早速リクト様に知らせてきます」

言葉通り、非常に迅速な行動でティル―殿はその場から立ち去った。「私も……屋敷の方に手紙を書かなきゃいけないわね……」

ドレスを調達しなければ。お嬢様に似合う、最高のドレスを。

翌朝、屋敷にいるときと同じようにお嬢様のいる客室に行つて、私はたじろいだ。

「リクト様……？」

と、ティル―殿もだけど。

小声でしかも少ない距離があるにも関わらず、私の声は彼らに聞こえたらしい。パツと顔を上げて私を見る。

何でいるの……！？

彼らがいるのは、お嬢様の部屋の扉の前だ。そして時間は朝（といっても、私達使用人からしたら昼前だけだ）。

これが夜中ではなくて良かったわ。絶対に怪しく見えたでしょうから。

「リドニア殿……！ やつと来て下さいましたか……！」

「ティル―、もっと声を落とせ。ルーシャンが起きてしまったらどうする」

リクト様方、いつから待っていたのかしら……。考えたくないわ。

「リドニア。ルーシャンは俺について何か言っていたか？ 嫌いとか、好きとか」

昨日から、私はリクト様の中で人としてのランクが上がったらしい名前でお呼びいただいている。お嬢様を呼ぶときのような愛情はないが、そんなものを入れられても困る。

「い、いえ特には……あ、昨夜、リクト様はどうしてらっしゃると気にしておられました」

「そ、そうか。嫌われたわけではないのかな」

昨日のことをおっしゃられているのかしら。だとしたら杞憂だ。あ

の時は、これ以上なくくらいに嫌われていらつしゃった。

「リクト様、用があつて何時間も前から待っていたのでしょうか。早く済ませて下さい。いい加減……眠いです」

欠伸をして、ティルー殿は目を閉じた。立っているから、寝るわけではないでしょうけど。

「ああ……そうだ。リドニア、これなんだが」リクト様を取り出されたのは、小さな箱。通常、指輪や首飾りなどの装飾品を入れるものだ。

「……指輪ですか？お嬢様に？」

「ま、まあ、そうだな」

「婚約指輪ですよ。リクト様からの。本当は、先日渡そうとしていたんですよ。ねえ、リクト様？」

その眠さからか、ティルー殿は必要以上にリクト様に絡んでいた。

「……つまり、お嬢様を呼び出せということですか？」

「出てきてくれるだろうか」

こればかりは何とも言えない。

お嬢様の魅力がそうさせるのか、リクト様は弱気だ。あの、権力と財力に物を言わせて婚約した時の強引さはどこへ行ったのかしら。

そんな時、ティルー殿が寄り掛かっていた扉がゆっくりと開かれた。

完全に気を抜いていたティルー殿は、不意打ちの出来事にバランスを崩した。慌てて壁に手について倒れるのを防ぐ。

「うるさいわよ」

私達が騒いでいたのもあるだろうけれど、お嬢様の眠りが浅かったことも原因ではないかしら（言い逃れじゃないわよ）。

不機嫌そうなお嬢様は私達の顔を見て、その不機嫌を驚きに変えた。「ルーシャン殿。騒がしくしてしまい、申し訳ない。調子はどうか？悪くない？」

お嬢様に声をかけようとしたのに、リクト様に先を越された。

仕方なく諦めてお二人を見ると、お嬢様がご自分の装いを気にしているのに気が付いた。

「お嬢様の格好って……！」

「ちょ……リクト様。お嬢様は今、ネグリジエなんですよ！？近づかないで下さいませ！」

「え？」

リクト様はたと気付いて まじまじとお嬢様を見る。

何をなさっているのですか！

「お嬢様、お部屋へ入って下さい！お二人はどこかここ以外に行って下さい！！レディの部屋の前で何をなさっているのです！」

止まった時間が動き出すように。三人は私の指示に従って下さった。

昔のローズ様のドレスを召されたお嬢様は、とても美しい。

けれど、古着であるということが私を満足させなかった。お嬢様は気にしておられないけれど、駄目よ！

お嬢様には、常にお嬢様のためだけにつくられたドレスを着てほしい。

環境に悪かろうが（再使用を真っ向から否定してるものね）、身勝手だろーうが、それが私の願いだ。

「お嬢様。本日、夜会のためのドレスを屋敷から持って参りますね」その旨を書いた手紙を、昨日の内に届けておいた。

「あたしの傍にはいないの？」

「申し訳ございません」

この屋敷の下男に頼んでもいいけれど、今日頼むのはさすがに迷惑だろう。夜会のために、エリザを含めて屋敷の使用人は朝から大忙しなのだ。

「それと、リクト様がお嬢様に渡したいものがあるそうですよ」婚約指輪……何色かしら。ドレスに合わなかった場合は外してもらうしかない。

いえ、事前に聞けばいいわね。貰う本人より先に詳細を知ってしま

うのは、心苦しいけれど。

「渡したいもの？」

「ええ。箱を見れば何となく分かると思いますけれど」

「箱？なにかしら。まさか、婚約指輪とか言わないでしょうね」

……。リクト様が、サプライズで指輪を渡そうとしていたらどうしよう。

お嬢様の本日の支度を終え（お嬢様は再びお部屋にこもられた）、私はウォルツ伯爵に直面することにした。メフィス伯爵邸に行くために、馬車を借りることにしたの。

「あ、リドニア。メフィス伯爵からお手紙が来てたわよ」

エリザとすれ違う時。邪魔にならないように声をかけなかったら怒ったように近づいてきた。

「え。旦那様から？」

「いえ、書いた人が誰かは分からなかったけれど。向こうでメイドが持つてるから、貰ってきなさいよ」

「分かった」

旦那様から？お返事かしら。でも、出した手紙には私がドレスを借りて屋敷へ行くことしか書いていないのに。

「リドニアさん。良かった、探していたんです。伯爵邸からの手紙ですよ。今朝、下男が届けに来たんです」

「そうなの……。何かしら。急ぎの用ってことよね」

メイドから手紙を受け取り、私は自室に戻った。

手紙の内容は、要約すると、「ドレスは屋敷の者に届けさせるので、来なくてもいいですよ」とのことだった。

でも、ドレスがあるのはお嬢様のお部屋だ。ちゃんとそこを考慮したのかしら。かなりの不安を感じるけれど、時すでに遅し。今から手紙を書くわけにはいかない。

「父様を信じることにしよう……」

ツールみたいに、デリカシーのない人がお嬢様の部屋に入らないと
いいのだけれど！

コンコン、コンコン、コンコン……

リズムを刻んで、扉が叩かれた。

「はあい？エリザ？」

「俺だ」

「……………え？」

若い男性の声。

リクト様だ。

「な、何をしていたらっしゃるんですか」

扉を開くと、別れた時と同じ格好をしたリクト様が。

「いくら呼んでも、ルーシャンが出てきてくれないんだ」

「そうですか」

「指輪を渡せない……………」ガックリと肩を落とす姿は、とてもお可哀
相だけれど。

「わ、私、少し行くとところが……………！」

「やはり、嫌われたのか？何が悪かったんだろ。リドニア？ルー
シャンが何か言っていたか？」

この方、お嬢様のことになるとしつこいのよね……………。同じことを何
度も何度も。

「先程も申し上げましたが、特に何も言ってません」

「本当に？ああ、どうしたら俺のことを気に入ってくれるんだ？お
前は長年仕えてきたんだろ？ルーシャンはどんなタイプが好きなん
だ」

「さ、さあ……………」

別に、お嬢様は怒って引きこもられたわけではないのだから。

リクト様とヒルドマンを離してお考えになっているのよ！黙って待
つことはできないのかしら。

「り、リクト様。私、行かなくてはならない所があるのですが……………」

「ルーシヤンの所か？」

「い、いいえ」

ローズピンクのルージュを買いに。お嬢様を完璧に輝かせるために。
「お前はルーシヤンの侍女だろう。ルーシヤンの傍を離れるなんて

……」

「ティルー殿もリクト様のお傍を離れていますけど」

「ルーシヤンは今、悩んでいるんだぞ」

私だって、お嬢様の傍にいてあげたいわよ。

でも、侍女としての矜持がそれを許さない。

私はリクト様を睨むように見つめると、失礼にならない程度の大声で言い返した。

「今日の夜会につけるルージュを買いに行くのです！ああそうだ、リクト様、婚約指輪の色を教えてくださいませんか？」

リクト様は私の勢いに怯んだような顔になり、

「……ピンクダイヤモンドだから、ピンク」

と答えたのだった。

さすが。稀少な宝石だわ。

当日の朝（後書き）

ルージュ……口紅ですね。

あんまり日常的に口紅のことルージュって言わないよな、とか思いながら書いていました。

次は、リドニアが街に行きます！ルージュを買いに！

街へ（前書き）

いつもより長文になってしまいました。矛盾点等、なければいいのですが。

今回は、リドニアとテイルーだけです。ね。
では、楽しんでいただければ幸いです！

街へ

そういえば、私どうしてリクト様と普通に話してるのかしら。

なんて私が思ったのは、リクト様にお帰りいただき、部屋で着替えている時だった。お嬢様と同じく私も服を持ってきていなかったの
で、他の使用人に借りたの。

……私も、ヒルドマン侯爵家は嫌いだっただはずなのに。ティルー殿
の言う通り、そこまで嫌いでもなかったのかしら。

胸元の釦を留め終えて鞆を取り、私は部屋を出た。

久しぶりに、寝間着とお仕着せ以外の服を着た。

街娘が着るような普通の服だけれど、地味なお仕着せに慣れた私の
目には特別可愛らしく見える。街は、ウォルツ伯爵邸からそう遠く
ない。だから馬車は借りずに、徒歩で行くことにしたの。

「リドニア殿！」

正門へ向かう途中に、庭園の方から名を呼ばれた。私をこう呼ぶ人
は、かなり限られているけれど。

「……何でしょう、ティルー殿」

リクト様のお傍にいないと思ったら、こんなところに。何やってる
のかしら、こんなところで。

「どちらに行かれるんですか」

どこか切迫した雰囲気。何なの？

「本日開催される夜会に必要なものを買うに行くのです」

「それは」

困った、と顔に現れている。

なんでティルー殿が、私がいらないことで困るのかしら。そう考えて、
少しして分かった。

「リクト様、ですか」

「う」

「貴方の主でしょう。多少愚痴がしつこいからといって、逃げるな

んでどうかと思います」

私にリクト様の相手をさせて。ティルー殿は逃げ回っていたのだから最低よ。

私がジロリと睨むと、ティルー殿は引きつった笑みを浮かべる。

「リドニア殿は、まだ数時間しか味わっていないじゃないですか。僕はもう十年くらいあれをさせているんですよ」

「そんなこと言われても」

「それに、ルーシャン様とリクト様をご結婚された後はリドニア殿もリクト様の愚痴を聞く羽目になるのです。予習のようなものだと思います、聞いて差し上げて下さいよ」

「知りませんでした。私は今から街に行くのです。さよなら」

「あ、ちよつと」

もつともらしいこと言っつて、私にリクト様を押し付けようとしてるんじゃない。リクト様には悪いけれど……あれは時間の無駄だわ。

「ぼ、僕もお供しましょうか。そうですね、それがいい」

「……はあ？」

何の計画性もない提案に、呆れてしまう。ティルー殿がいなかったら、リクト様やお嬢様の世話は誰がするのか。

「仕事に対して無責任で不真面目な人は嫌いです」

「貴女のように、主を猫可愛がりするのもいかなものかと」

「何ですって？」

猫可愛がり？

そんなことはないわよ。私は、お嬢様を大切に思っているだけ。

「ですが、今回においてはリドニア殿が正しいですね。お詫びに、護衛をさせていただきますよう」

どう言い返しても、結局はついて来る流れに行き着いてしまう。もしかして、この人本気で言ってるのかしら。

ティルー殿は振り返り、慌てたように私を急かした。

「あつ、リクト様ですよ。行きましよう早く！」

リクト様の扱われ方が、少し気の毒ね……。

肩を後ろから押されて、私はティル―殿と屋敷を出た。

普通の服を着た私と、スーツ（のような服。侍従のお仕着せみたいなものよ）を着たティル―殿。せっかく私が着替えたのに、意味ないじゃない。

屋敷を出てからは、ティル―殿はいつものペースに戻って悠々と道を歩いていった。

整備されてレンガが敷き詰められた道。ツール以外の男性とこうして歩いたのは初めてだわ……。

「そういえば、リドニア殿。その服、よくお似合いですよ」

感慨にふけっていると、ティル―殿が私をチラリと見て言った。

「いまさらありがとうございます」

「先程はリドニア殿を見る余裕がなかったのです。不機嫌を直して下さいよ」

「別に不機嫌ではありません」

上機嫌でもないけれど。

……いえ、不機嫌だわ。認める。

でもそれは、ティル―殿がいまさら私の服を褒めたから、とかではなくて。もつと真面目なことで。

「ティル―殿。貴方、度々このようなことを繰り返しているのですか？」

「このような？」

「仕事中に抜け出すことです。私はきちんとお嬢様に断りをいれました」

でも、ティル―殿は許可をいただいてないはずだわ。いきあたりばったりな決断だったもの。

「だから護衛だと言ったでしょう？」

「私に護衛など必要ありません！誰が私などを狙うのですか、馬鹿らしい」

「勘違いしておられるようですが、本当にこれは僕の仕事で

すよ」

ティルー殿は意味の分からないことを言う。これが仕事？
そんなわけないじゃない。

「お忘れですか？ルーシャン様は僕に、貴女の紹介をしました。重要なのは、僕とリドニア殿が個人的に自己紹介をしたのではなく、ルーシャン様が伯爵令嬢として貴女を僕に紹介したということです」
なるほどね。

やっと私にも理解できた。

お嬢様は私をティルー殿に紹介した。伯爵令嬢として。
その意味すること。

彼女にもそれ相応の扱いをしなければ許さない。
そんな風に言われた相手を一人で屋敷外に出し、万が一にでも何かあつたら。

「しかしここは、ヒルドマン侯爵邸ではないですよ」

「けれど、ルーシャン様は僕や……リクト様に言い掛かりをつけてきそうじゃないですか」

「言い掛かりだなんて。そんな言い方」

「まあ、今は後付けの理由ですよ。リクト様やルーシャン様に責められたらそう答えようと思います」

私は、やっぱりこの人が苦手だわ。よく分からないもの。嫌いではないけれど、苦手。まだ、お嬢様の態度で一喜一憂されるリクト様の方が分かりやすい。

そんな私の気持ちを知らずに、ティルー殿は優雅に振り返った。

「で、何を買うに行くのです？」

「ローズピンクのルージュです」

いつもルーシャン様が鼻屑になさっている化粧品店に行くことにした。そこは高級店が立ち並ぶところにあるお店で、街の最奥にある。普段は私以外の侍女やメイドが買いに行っているから、私は今回が二度目になる。一度目は信用できる店かどうか確認しに行ったの。

歩いていく内に、ティル―殿について来て貰ってよかったかもしれない、と思い始めてきた。一応どこに何があるかは覚えているけれど、実際に歩くとなると結構迷うものよ。人も多いし。

「きよ……今日は祭でもあるのですか？」

声を張り上げて前を歩くティル―殿に尋ねると、彼はケロッとした顔で私を見る。

「そのような予定は存じませんが、何故ですか？」

「人が多すぎます！　あ、すいません」

もう！ぶつかったり足を踏んだり踏まれたり！

前来た時は、もっと空いてたわ！

ティル―殿は辺りを見渡して（背が高いつて、いいわよね。私なんて人しか見えないわよ）、私の腕を引いた。

「ああ、きつとあれですね」

ティル―殿が人込みの向こうを指差して言うけれど、私には何も見えない。

「今日は街中の店が二割引らしいですよ。全てではないみたいですが」

「は？セール？」

「ええ。二割引きだそうです。何か買っていきますか？」

興奮したように言うティル―殿に、私は首を捻った。

「……どうして？」

「別に……今日でなくてもいいのでは？」

「でも、安いんですよ」

「二割程度なら、大して変わりません」

屋敷では、いくら安かろうが需要のないものは買わなかった。それに、お嬢様が落ち込んでいらっしゃる時に買い物なんて

「……………」

「そう思いませんか？」

ティル―殿は何か言いたげに私を見て

「思いません」

と断言した。

「そうですか。気が合いませんね」

「気と言うよりも、金銭感覚の違いです」

金銭感覚。私は普通だと思うのだけど。爵位もない、むしろ使用人一家に生まれたのだから。

「それよりティルー殿、手を離して下さい」

掴まれた腕を振ると、ティルー殿は今気付いたかのような顔をした。素早く謝り、手を離す。

「しかし、はぐれませんか？」

「はぐれても構いません」

再び腕を掴まれた。

だって、お金は持ってきたし、はぐれても問題ないじゃない！

「スリとか気をつけて下さい」

「余計なお世話です！」

私達はスリに遭うこともなく、無事に化粧品店に到着した。店員にメフィス伯爵の名を告げると、一気に接客の際の声が高くなる。

「メフィス伯爵家の方でございますか。いつも贔屓にしていたいで、有り難いことですね。本日はどのような物をお探しでしょう？」

「ルージュを」

「かしこまりました。王領で採れた、最高級の紅花で作られたルージュを用意致します。お色などは、いかがなさいますしょう？」

「ローズピンクよ。あまりけばけばしい色は除いてね」

しばらくして、店員はガラスのショウケースを運んできた。中には僅かに色味の違うローズピンクのルージュが並んでいる。

「……凄いですね」

「凄いですよ。レディのお化粧なんですから」

ティルー殿は立てかけてあった値札を見て、完全に口を閉ざした。

……さて。

いきなりだからあまりお金を持ってきていない。買えるとしたら、

この内のどれか一つだわ。

「んー……うー……ん」

お嬢様に一番似合う色はどれかしら。赤みの強いもの？それとも薄め？

お嬢様を想像して、唇にルージュを塗ってみる。

そういえば。どのドレスを運んでくるのかしら。私が送った手紙には、ただ取りに行くとしか書いていなかった。変なドレス（なんて無いけれど！）を持ってきたらどうしよう。

「ずいぶんとあるんですね。これなんて……真珠の粉を配合？入れたらなにか変わるんですか」

シヨウケースを除くティル殿は、化粧品などの知識は全くないらしい。

女性に慣れている人は結構知っていると聞くので、私は少し笑ってしまふ。

「真珠が入っていると、光に映えてより唇が美しくなるんです」

「ふーん」

そのままティル殿は興味なさそうにルージュを眺めて、ふいと視線を逸らした。

「で、どれにするんですか？」

「今迷ってます」

これがいいかしら……ううん、似たような色が屋敷にあったわ。じゃあこれ？んー、なんか違うわ。これは ケバい。あの店員、けばけかしいのはやめろって言ったのに！

その後私はたつぷり一時間ほど迷って、やっと買い終えたらティル殿が消えていた。

「あら？」

「あ、お客様。お連れの方は、外で待っているそうですよ」

「外？帰っていてもよかったのに」

店を出ると、確かにティル殿はベンチに座っていた。私を見ると片手を上げる。

「女性の買い物に付き合う時は寛大な心を持って、と聞いたことがあります。あれは真理ですね」

「早くなくて申し訳ありませんでした。ずっと待っていたのですか？」

「ええ、まあ。それともここは、そんなことないですよ、と答えるべきですか？」

茶化すようにティールー殿は苦笑するけれど、こんなベンチに座って一時間近くも待っているのは楽しくもなんともないだろう。

まあ、この人が勝手についてきたのだけだ。

「喫茶店にでも行きますか？私が奢ります」

「お供しますよ。ですけど、代金は僕が払います」

笑顔で立ち上がり、ティールー殿は私の腕を掴んだ。

なんで、こんな連行されるような格好をしなくてはいけないのかしら。

化粧品店周辺は、他にも仕立て屋や貴金属専門店、装飾品店などが立ち並び、二割引セール対象外の場所だった。だから人も少ないのね。

少し歩くと一気に人が増えて、そのことを認識させられた。

「酔いましたか？」

ぼーっとしていたところに声をかけられ、驚いた。気付かなかったけれど、腕を掴んでいるティールー殿に体重を預けていたみたい。

「……え？」

「いえ、人混みに酔ったのかと」

「そうなのでしょうか。確かに、少し気分が優れません」

しっかりと自分で立ち、頭を軽く振ったら少しだけマシになった。

寄り掛かっていたことを謝ろうとティールー殿を見たら、後ろから突き飛ばされた。

「きゃ……！？」

「こ、これは……！」

先程の余裕はどこへやら、少年は真っ青になってティルー殿の腰を見た。腰に下げられている、剣を。

装飾の一切付けられていない剣は、逆に真剣味を増して少年の目には映っているのじゃないか。私も思わず唾を飲み込んで二人を見てしまった。

「ほら、もう行け」

しかし、少年へと、もしかしたら私）の予想に反して、ティルー殿は剣を抜かなかった。

帽子を返すと興味を失ったように手を払う仕草をする。

「……」

これ幸いと逃げ出した少年を見送って、私は隣に立つ人を見る。彼が何かをしたわけではないのに、私はティルー殿を怖く感じた。スリの少年よりもずっと。

「あ、あの……」

「助かりました」

「え、……？」

ティルー殿は私に財布を渡すと、もう一つ、見慣れない財布を私に見せる。ティルー殿のものかしら、と思ったけれど、その割には小汚い。

「それは？」

「さっきの少年の財布です。リドニア殿は、本日二人目以降の標的だったようです。たくさん入ってる。リドニア殿に僕が奢るなんて言いましたが、正直懐が寂しかったので」

なんて言いながら財布の中からいくつもの銀貨や金貨をとりだすと、ティルー殿は自分の財布（だと思っわ。懐から取り出していたもの）に移し替える。

「な、何をしているのです！」

「何とは？」

「先程の少年から盗んだのですか！？」

「ええ」

罪悪感など微塵も感じていない顔。私が間違えているのかと錯覚してしまう。

「　？リドニア殿。怒ってらっしゃる？」

「当然です！犯罪ですよ！？」

怒っているというか　驚いている。感情が怒りに変わるほど、私は今の状況を飲み込めていない。

「リドニア殿について来てよかったです。貴女はすられてからも気付かなさそうですからね」

「犯罪を犯すくらいなら、被害者でいたほうがまだましです」

私も……共犯？

あの少年からしたらそうでしょうね。

女の財布を盗んだら、「二人」に盗み返された、と。そう思うわ。きつと。

「リドニア殿？彼が最初に盗んだんですよ？」

「だから何ですか。貴方が財布を取り替えてくれたのには感謝します。けれど、あの子の財布まで盗むことはありませんでした！」

「ちょ、ちよつと。あまり大声で叫ばないで下さい」

どこかへ場所を移しましょう、というティルー殿の言葉を無視して、動く意思はないと視線で伝える。ティルー殿は肩を竦めて、私の前に立った。

「少年も、深く考えてませんよ。仕事中にはよくあることです。例えばこの場合　少年は財布を盗られたことよりも、切られなかったことに感謝すべきです」

カン、と金属が擦れる音がする。

「そんなこと」

「あります。分かりますよ。僕も昔はしていましたから」

していた？何を？

「……スリを……？」

ええ。と、ティルー殿は軽く頷いた。

「こんなところで話していても時間の無駄ですし、喫茶店に行きますか？」

喫茶店。

そつえば、行こうとしていたのだったかしら。

「……ええ」

昔の私がこの場にいれば、頷いた私を怒鳴り付けていたことでしよう。

ヒルドマンに仕える使用人なんかと喫茶店ですって？それに、軽いとはいえ犯罪を犯した人と。信じられないわ　なんて。

何故だか、ティルー殿に付いていくことは、この先リクト様を旦那様と呼んで仕えることを認めることのように思えた。

でも、私の選択はお嬢様のように二十四時間も待つてもらえない。一瞬で選択し、その場で答えなければいけなかった。ティルー殿を拒絶してヒルドマン侯爵家を受け入れないか、ティルー殿の手を取ってヒルドマン侯爵家を受け入れるか。

私は、彼の手を取った。

私の腕を掴まないティルー殿の後ろを、自分の意思でついていくのだから。

たとえ私をつき動かしているのが、ただの好奇心だったとしても。

街へ（後書き）

次回か、その次くらいに夜会がくるかと思っています。

潔癖な人（前書き）

喫茶店はあんまり重要ではなかったです。

もう少し喫茶店が全面的に出ていたらサブタイトルに付けようかと思っていたのですが……。

潔癖な人

貴女は潔癖ですね。

そう、ツールに言われたことがある。

二人で買い出しに出ていた時だったか、もしくは休憩時間の時だった。どうしてそんな話になったかも覚えてない。

ただ、潔癖ですネと言われて、悲しくもなかったが嬉しくもなかった。

だって、そうでしょ？

不正や 悪事を好く人がいる？

それに、私は別に潔癖なんかじゃない。私が嫌なのは、不正や悪事ではなく、それらをお嬢様が見てしまうこと。知ってしまうこと。

お嬢様は旦那様からも愛されて（もちろん、奥様からも）、貴族の汚い部分も見えないように目をふさがれていた。

お嬢様には、常に純白でいてほしい。それが、私と旦那様の願いだった。

マリア侍女長や奥様は、それに対して非常にドライな反応だったけれど。

『いつかは知るのだから、わざわざ隠さなくてもいいんじゃない？』
だなんて！御自分の娘なのに！

お嬢様には、犯罪やドロドロとした貴族の恋愛なんて知ってほしくない。

例えば知っても、新聞や噂だけにとどめておいてほしい。

それを幼い頃からずっと願っていた。それが転じて、私は潔癖になったのかな、なんて。思っているけれど。

だから、正直に言つてスリなんていう小さいけど代表的な犯罪をしている人を、お嬢様の傍に置きたくない！！
だって、スリって言つてしまえば窃盗よ！？

なのに。私はどうして犯罪者の後ろを歩いているのかしら。あ、もうお嬢様の前に立てないわよ！どうしてくれるの！

ティル―殿について行くのは、酔った時のような、沈鬱な気分だった。今から走り出してウォルツ伯爵邸に戻りたい。

……スリをするのは、大抵が労働者階級の人。

私は父や母の職と、家族単位でメフィス伯爵家に仕えていることから中流階級となる。ちなみに、お嬢様のような貴族は、上流階級と呼ばれているの。

人混みにもまれて、私はティル―殿を見失ってしまった。一度「あれ？」と思えば迷子になるのは簡単で、思わず立ち止まってしまえば、私は一人になっていた。

は……はぐれた。

はぐれても構わないけれど、万が一にもティル―殿が私を探してくれたら厄介だ。遭難したら動かない方がいいというけれど、迷子の場合にも当て嵌まるのかしら。

それとも、このまま私も喫茶店に行くべき？

……迷いに迷ったすえ、私は喫茶店を探すことにした。あまり詳しくないから何とも言えないけれど、進行方向に進めばあるのよね？人に流されながら歩く。先程までは腕を掴まれていたから歩きづらかったけれど、今はそれほど歩きづらくない。

……あら？

歩いていると、慣れていない私と違う、いかにも慣れている様子で歩く少年が目についた。

私の財布を盗った少年だ。

進行方向とは真逆の方向だったけれど、つい気になってしまって私は彼を追った。少年はスイスイと人の中を進んで行き、比較的身なりの良い人にぶつかっていった。まさに、神業としか思えなかった。彼がスリを行っている意識しても、私には少年の手の動きが見えなかった。

少年はぶつかつた相手に謝りながら路地裏に向かって行く。

私も、彼を追った。

少年の入った路地裏に行くと、彼はごみ箱に寄り掛かつて座っていた。

「……ねえ」

声をかけると、少年は振り返って驚いたように私を指差した。

「あ　　！！」

「こ、こんにちは。さっきぶりね」

猫みたいな少年。

実際、私をフーツと威嚇してる。

「何の用だよっ！？」

「あ、いや、その……」

「また盗む気！？」

ごもつともな返答。でも、ティルー殿じゃないけど、最初に貴方から盗んだのよね？

「滅相もない」

私は両手を上げて敵意がないことをアピールすると、ジリジリと彼に近寄った。

「あの、ティ……いえ、連れが盗んだぶんのお金、払うわ」

言つと、少年は完全に疑う目で私を見る。確かに、盗んでから返すなんて言つても信じないでしょうね。

「　　ほんと？」

「ええ。いくら？」

あの財布はかなり膨らんでいた。持ち合わせも少ないし、足りなければ何回かに分けて払ってしまおう。

なーんで、私がティルー殿の尻拭いをしなければならないのかしら。

とは思うけれど、ティルー殿に言ったところで、笑って済まされる

だけでしよう。でも！絶対このままだったら引きずるわ。ツールに言わせれば、潔癖なのだもの、私。

少年はニヤリと笑って金額を言った。

「は？」

「だから……」

もう一度。少年の口からありえない額が。

……え。そんなに入ったの！？

私の月収と変わらないじゃない！

余計なことを言わなければよかった。そんなことを思ってしまう。

「……あー、えつと、来月くらいに……」

それとも十回払いくらいが……と考えていると、ポンと頭が叩かれた。痛くはないけれど 叩かれたとしか表現できない。

「そんなに高いわけないでしょう」

面白いくらいに、少年の顔から笑みが消えた。

「テイ……ルー殿？」

振り返ると、そこには怖い顔をしたティルー殿。睨むような、どこか冷たい表情をしている。

「リドニア殿。貴女は顔に似合わず世間知らずですね」
顔に似合わず？ですって？

褒めてないわよね……。きつと。

「な……にが……」

「そんなに高額のお金が入っていたわけないでしょう」

「でも、この子は……！」

必死に言い返すと、ティルー殿は嘆息した。

「嘘です。分かりやすい嘘」

嘘、って。……嘘？

思わぬ言葉に、一瞬私は放心した。

嘘なんて。吐かれたことなかった。

こんな悪質な。笑ってすまされることじゃない。

「うーん 正確ではないでしょうけど、これくらいですか」

そう言つてティルー殿が口にした金額は、安くはないけれどもありえないものではなかった。最初に私が覚悟していたくらいの額でもあった。

「満足ですか？行きますよ」

「ちよつと！お姉さん、払ってくれるんじゃないの？……噓つくの？」

強調された「噓」。

この子は、私がその言葉に怯んだことを敏感に察していた。私がそれに嫌悪感を抱いていることも。

持ち合わせているぶんだけでも払おうと足を止めたのに、今度こそティルー殿に手を引かれて止まることができなかった。

睨まれていない私ですらぞつとする温度の視線で少年を睨むと、そのまま振り返らずに歩いていく。先程街を歩いていた時は、ティルー殿は私に合わせてくれていたらしい。今は男女の足の長さの違いを思い知らされながら歩いているもの。

それに。

なんで腕じゃなくて手を引くのよ。掴むなら腕にして！

なんて言えなくて、なるべく喫茶店が遠いことを祈っているわ。手を繋いでいたいとかではなく、何となく怖いから。

無情にも、喫茶店は近かった。

いえ、私がそう感じたただけかもしれないけれど。

「お二人様ですかー？」

「ええ」

「こちらにどうぞ」

ティルー殿と店員の会話を、どこかぼうつとして聞いていた。

「リドニア殿。何を飲みますか？」

「……」

「リドニア殿？」

「え！？あ、紅茶を……」

ティルー殿が、メニューを片手に何かを言っている。私にもその声は聞こえるんだけど、その声は言葉と認識されるよりも早く私の脳から滑り落ちていく。

「もうランチタイムですから、ここで食べてしまいましょう」

「……そうですね」

ああ、私の記憶に住み着いて、グルグルと何度も思い出してしまふ。少年の悪意ある笑み。

決して気分の良いものではない。

「何にしますか？」

「……ええ」

ティルー殿が呆れて溜め息を吐きたのにも気づかず、私は少年の笑みを思い出す。

「リドニア」

「……何でしょう……」

思い出しては気分を悪くして、気分を悪くしては思い出す。嫌なループだった。

「リドニア殿」

ティルー殿が身を乗り出して、手を伸ばしてくる。何をされるのかと身を引くと、再び頭を叩かれた。痛くない、路地裏のときと同じものを。

「な、何をするんですか」

「忘れましたか？」

「え？」

「あのガキ……いえ、少年のことです」
忘れるわけない。

私は、自分が思っていたよりも引きずる性格らしかった。

「忘れませんよ。きつと、長い間忘れない」

「……でしょうね。貴女、騙され慣れてなさそうですし。あんなに分かりやすい時にもすぐに信じ込む」

馬鹿にするような内容だったけれど、口調には私を揶揄するような色はなかった。

「さ。ランチは何にしますか？」

「え？ここでいただくのですか？」

「先程言いましたけど」

壁にかかる時計を見ると、私の予定ではウォルツ伯爵邸に着いている頃だった。

お嬢様の食事、どうしよう……！？

今すぐに戻りたい衝動に駆られていると、そんな私に気付いてティール殿は悠長なことを言った。

「ルーシャン様のことでしたら、リクト様が……ローズ様がどうかしてくれますよ」

「無責任なことを言わないでください」

「それに……たしか今日はウォルツ伯爵主催のランチパーティがあったはずですよ。大丈夫ですよ」

ランチパーティ？そう言えば、昨夜エリザがそんなことを言っていた。ような気がする。

ティール殿が昔スリをしていた、ということを知ったはずなのに、雰囲気でも気分でも、そんな気にはなれなかった。

「……意外と、潔癖なんですね」

「え？」

軽食を摂りながら、ティール殿がぼつりと言った。人から潔癖であるとの評価をもらったのは二回目だ。

「あまりそうは見えませんが、犯罪や　嘘に対して嫌悪感を抱いている」

「そうは見えませんか」

「ええ。あまりそうは見えません」

あまりにハッキリキツパリと断言されたので、私もそうですかと納得してしまった。どう見えるのかしら、私。

「お嬢様に、汚いものを知ってほしくないのです。綺麗なものだけ

に囲まれていただきたい」

「……」

「ですから、騙されたのが私で良かったです。お嬢様でなくて良かった」

ティールー殿は、「そうですか」とだけ言った。

喫茶店を出て、屋敷に戻ったのは昼過ぎだった。腕を掴まれて歩くのにも慣れ、特に振り払おうとも思わなくなった頃。

「あ、メフィス伯爵家の馬車」

ウォルツ伯爵邸の前に、メフィス伯爵家の馬車が停まっていた。

私が駆け寄ると（手は離してもらった）、馬車は無人だった。御者台にも誰もいない。

「ねえ、御者は？」

その場にいたメイドに聞くと、「伯爵に挨拶に行かれました」とのこと。

下男が持ってきたのではないのかしら。

「伯爵も来られたのですか？」

「いえ、今日の夜会のためのドレスを運んでいただいたのです」

その場で待っていると、メイドがいきなり頭を下げた。待ち人がきたのだろう。

私も振り返った。

「リドニア。何をしているのです？」

「あ、あなた……」

トールだった。トール＝ルミナス。ミュール家以外の、唯一の旦那様の侍従。

「あなた？」

「い、いえ。……トール、貴方が来たんですか」

私の表情がよほど苦々しげだったのか、トールも苦笑した。

「ええ。旦那様より、今日の夜会を手伝うように、と。それより、そちらの方は？」

トールが示したのは、ティルー殿だった。ティルー殿は何とも言えない表情をして、私とトールを見ていた。

「こちら、ヒルドマン侯爵家の嫡男、リクト＝ヒルドマン様の侍従兼護衛のティルー＝ディエラ殿」

一息で言うのは無理だった。正式に紹介すると、かなり長い。

「どうも。ご紹介に与りました、ティルー＝ディエラです」

「で、こちら、メフィス伯爵の侍従、トール＝ルミナスです」

「トール＝ルミナスです。よろしく」

触れるだけの握手を交わすと、二人は笑顔のままお互いの手を離れた。

「リドニア。今は、ランチパーティをしているようですよ」

「お嬢様も？」

「ええ」

トールの返答に、私は驚いた。

お嬢様が、お部屋から出られたのね！良かった。良かった……！

「で、では戻りましょうか」

ティルー殿がそう言って私達を誘導しようとするけれど、私は立ち止まってトールを見た。

「トール、ドレスは？」

「伯爵夫人にことわって、衣装部屋に置かせていただきました」

「ならいいわ。行きましょう」

屋敷に戻ると、お嬢様にどうしてティルー殿がいるのかとしつこく聞かれるけれど　それはまた後の話。

潔癖な人（後書き）

次は、「街へ」の時のお嬢様の様子になります。

番外編ではないのですが、主役をリドニアとしたら番外編色が強くなりますね。

昼頃に投稿する予定です。

お嬢様の見る風景（前書き）

お嬢様視点……ではありませんね。
たまにお嬢様のほうも書きたいなー、と思います。

お嬢様の見る風景

「では、失礼します。お嬢様」

「……ええ」

リドニアが頭を下げて退出すると、ルーシャンはベッドに倒れ込んだ。

ルーシャンの身体を包むドレスはローズの着れなくなったものだ。リドニアはあまり良く思っていないようだったが、ルーシャンは姉の温かさに包まれているような気分を心地好く感じていた。

（……………）

リクトとヒルドマン侯爵家を離して考えてみる、との理由で客室に引きこもったルーシャンだったが、まさか一日中同じことを考えていられるはずもなく。ぼんやりと時間を潰していた。

まだ朝であるし、どうせ誰も咎めないだろうと思い、眠ろうとしたのだが。

（…………リクト様に、寝間着姿を見られたわ！絶対！）

先程の事が頭から離れず、眠れなかった。

屋敷内ではリドニアが、舞踏会などの夜会では伯爵が目を光らせていたので、ルーシャンは寝間着を男性に見られたことなど一度もなかった。

リドニアの手前気にしていない風を装っていたが、内心恥ずかしくて仕方がないのだ。

顔を手で覆い隠し、バタバタとベッドの上を転げ回る。

（は、恥ずかしい……………！忘れてくれないかしら！？）

「ああ、もう！！」

枕を弱く叩いていると、扉が控えめにノックされた。

「…………リドニア？」

「ルーシャン殿」

ルーシャンの名を呼んだのは、リドニアではなかった。

（リ、リクト様……？）

婚約者の声に、ルーシャンは羞恥を忘れてぱかんとしてしまう。

（先程別れたばかりなのに　もしかして、リドニアの言っていた指輪のこと？）

ベッドから起き上がり、扉へ向かうとしてルーシャンは足を止めた。中にネグリジェが吊されているクロゼットが目に入る。一気に羞恥心が沸き上がって、ルーシャンはリクトの訪問を無視することにした。

「ルーシャン殿？」

怪訝そうな声。

（そうよ。あたしがリクト様の訪問に応えることないわ）

リクト様はヒルドマンなのだから。

そう考えてから、ルーシャンは一人でくすくすと笑った。

（駄目ね。全然引き離して考えられてない）

これをリドニアに打ち明ければ、リドニアは自分のことを責めずにならばそれで構わないと言うだろう。それは想像に難くなく、いつもの自分ならばそんなリドニアに甘えていた。

しかし、さすがに今回はそんな解決では駄目だとルーシャンも分かっていた。

（結婚なんて、幸せかそうでないか、二つに一つなのだから）

例えば、メフィス伯爵夫妻は幸せな結婚だと思うし、ローズとリジンもそんな結婚をするだろう。自分もそんな結婚がしたいと思っていた。

参加する舞踏会などで貴族の美しくない恋愛事情を聞き知って、絶望して、それでも望みを捨てないでいた。

（リクト様と結婚して……あたしは幸せになるのかしら）

幸せを求めて結婚できる立場ではないのに。そう考えてしまうのは、幸せそうな姉や母や　自分に恋をした、などと言うリクトのせい。

「ルーシャン殿……」

そんな時、再びリクトの声が。

（まだ、いたの？）
いつまでいる気だ。

ふと目を開ける。柔らかなベッドに埋もれて、ルーシャンは少し眠っていらしい。適度にお腹が空いていて、窓からは太陽の光が零れていた。

「リドニア、お腹が空いたわ」
わずかに開いたカーテンを見ながら、傍に控えているはずの侍女に言う。

「……リドニア？」
部屋を見渡して リドニアはメフィス伯爵邸に戻ったのだと思い出した。必要な時にいてくれないリドニアに、腹立たしさよりもまず寂しさを感じてしまう。何人もの侍女やメイドを従えていると思われがちだが、ルーシャンが傍に置いているのはリドニアだけだった。姉のローズには数人の侍女やメイドが仕えていたが。

リドニア以外、必要ない。
そんな思いをルーシャンは生まれてからずっと変えてこなかった。実際、マリア侍女長もリドニアが自身の娘だったので強く反対はしなかったのだ。

次いで、ルーシャンは扉に目を遣った。
（……リクト様、まだいらっしゃるのかしら）

いないかもしれない。どれくらい眠っていたかは分からないけれど、五分や十分ではないはずだ。
きつとしない。声もしないのだから。

（でも、）
いるかもしれない。

いたら何があるというわけでもないのだが、ルーシャンは扉を薄く

開いた。眠ったらもうネグリジエを見られた、などという小さなハプニングは忘れている。

リドニアもいないし、お腹も空いたし、ルーシャンは誰か自分以外の人間と会いたかった。

（……いない、わね）

そこには誰もいない。ただ広い廊下が続いているだけ。ゆっくりとした動作で部屋から出て、ルーシャンは安堵の息を吐いた。

（なんだ。いないじゃない）

リクトがいなかったことに、安心している。それと同時に落胆していた。

自分が思っていたよりも寂しがり屋なのかと思うと可笑しかった。

（お姉様からお昼ご飯をいただいてきましょう）

姉の部屋に向かおうとすると

「ルーシャン殿？」

「つきやああ!？」

曲がり角で、婚約者と鉢合わせしてしまった。

「す、すまない。驚かせてしまったか」

「い、いえ……」

（な、何でこんなに広い屋敷で、よりによってリクト様と会ったのかしら）

リクトは、パンやらスープやらが乗ったプレートを持っていた。

ルーシャンの視線に気づき、リクトはどこか言い訳がましく理由を説明する。

「ローズ殿が、ルーシャン殿の分だと。メイドが運ぼうとしたところを代わったのだ」

「代わった　どうしてですか?このようなことは、それこそメイドの仕事です」

ルーシャンがぐっとリクトの瞳を見つめると、リクトはすぐに目をそらした。

「これなら、貴女が返事をしてくれるかなと思ったんだ」

（返事？……ああ、無視したことね）

自分が無視したことを言われているのだと分かり、ルーシャンは黙り込んだ。

「いや、ルーシャン殿を責めているわけではないんだ」

弁解するようにリクトは言う。なおも黙りこくるルーシャンに、リクトは話題を逸らそうと持っているプレートを少し揺らした。

「それより、食事が冷めてしまう。早く部屋に運ぼう」

（……部屋に……）

昨日のディナーには、リドニアがいた。

一人じゃなかった。

「あの」

誰もいない、静寂に支配された部屋で一人でランチを食べる自分を想像してルーシャンは心細くなった。

（一人は嫌）

小さな声でリクトを制止すると、リクトは耳聴くその声を拾い、動きを止めた。

「どうした？ルーシャン殿」

「リクト様は……その。既にランチは済ませたのですか」

「いや。まだだが。伯爵主催で、身内だけのランチパーティーがあるらしい。私がルーシャン殿と婚約したことを報告したら、喜んで誘って下さった」

ルーシャンと婚約し、ローズの義弟になったことを言っているのだろう。身内と言っても広いものね、とルーシャンは思った。

「そのランチパーティーには、わたくしも参加資格があるのかしら」
まだウォルツ伯爵にも挨拶をしていなかった。ランチパーティーがあるのなら、いい機会である。

「参加されるのか？」

「文句があたりですか？」

睨みつけると、リクトは「いや……」と歯切れ悪く口ごもった。

「どこで行われるのです？」

「庭園だそうだ。ローズ殿の強い要望で」

「お姉様の」

ローズらしい提案だ。話で聞くとところによるとローズはウォルツ伯爵邸でも気に入られているらしかったので、ウォルツ伯爵夫妻は二つ返事で了承したことだろう。

「素敵だわ」

「ルーシャン殿は、花がお好きなんだな」

「ええ。花は好きです。特に薔薇が」

ヒルドマン侯爵邸でのランチパーティー。その際にルーシャンが吐いた嘘は、もうリクトにばれていた。

なにしろ、情報源が実姉なのだ。信憑性がありすぎる。それに昨日、リクトが無礼講・ティーパーティーの途中で割り込んできた時にその嘘は発覚した。

「屋敷に着いたら、百輪の薔薇をプレゼントしよう」

「いりません、百輪も！……ただ、小人薔薇の種は非常に感謝しております」

毎日庭師と観察している。

絵日記も書いている。それを知るのは今のところ、リドニアと庭師だけだ。

「感謝していただけてよかった。……ルーシャン殿、聞いてもいいか？」

「何ですか」

「どうして敬語なんだ？」

（え？）

思わず唇に指を当てた。本来、婚約者相手だろうと男性、特に位が高い者に対しては敬語なのだと決まっている。つまり、今のルーシヤンはどこも間違えていなかった。とすると、リクトが敢えて言う理由は一つだ。

（……これまで、ずいぶんと失礼なことをしたものね）
無礼者と言って手を払いのけたのも記憶に新しい。

今でさえリクトに対して好ましいとは思えなかったが、大声で喚きちらしたり、罵倒しようとは思えなかった。

「……………」

何も言う気になれず、黙々と足を動かす。リクトはルーシヤンの横顔に目を向け、含み笑いをした。

「もしかして、リドニアがいないせいかな？」

親しげに（少なくとも、ルーシヤンにはそう見えた）リドニアの名を呼ぶリクトに、ルーシヤンは眉をひそめた。

「リドニアを呼び捨てにしないで」

「はは、戻ったな。貴女はそちらのほうがいいよ」

「リクト様は……恐妻家になりたいのですか」

「いや、そういうつもりはないが……まあ、貴女だったら何でもいいさ。それより、」

リクトが足を止める。訝しく思いつつ、ルーシヤンもそれに倣った。

「敬語は止めないか？」

「……………侯爵家の嫡男に？」

「貴女の御両親だって、どちらも普通に接しているじゃないか。メフィス伯爵夫妻は仲睦まじいことで有名だからな　羨ましい」

スープからは湯気が見えない。すっかり冷めてしまったようだ。

「自らよりも身分の高い婚約者に敬語も使わないだなんて、どこの礼儀知らずかと思われますわ」

「貴女の家と私の家の関係は特殊だから。誰も変に思わない。それにランチパーティでは　」

（ええ、あたしは思い切り素で怒鳴ったわね）

きつと、今のこの状態は異常なのだ。ルーシヤンはそう考えた。

自分とこの方が、肩を並べて歩くなんて。リドニアがいないから、調子が出ないのだ。きつとリドニアが帰ってくれば、自分はヒルドマンを嫌悪することだろう。

（ああ……リクト様とヒルドマンを離すのだったかしら）

先程までは難しく感じていたが、今はひどく簡単なような気がした。

ここにリドニアか、もしくはローズがいたならこの数分で彼のことを理解したぶん、リクトを個人で考えることができるようになったのだらうとルーシアンに教えていただらう。

しかしここには二人しかいなくて。ルーシアンは何故かしら、と疑問に感じながらも何も言わなかった。

ルーシアンを見ると、ローズは目を丸くした。広い庭園にはテーブルが並び、立食形式だった。夜会に参加するために訪問した人も多く参加していて、身内のみというのは建前らしい。

「夜会もあるというのに」

呆れたようなルーシヤンの声。

「メイドに迷惑だとは思わないのかしら」

「ルーシヤン殿……」

さも意外だと言いたげなリクトの声音に、ルーシヤンは庭園に出ながら苦笑した。

「屋敷で、今日のように夜会やランチパーティが重なると、必ずと言っていいほどリドニアが手伝いに回されるのです」

「ああ、リドニアか」

二人がローズに向かって歩いていくと、ローズとリジンも寄り添いながら歩いてきた。

「ルーちゃん。もういいの？」

ローズはいつもの柔和な笑みを浮かべていた。

「お姉様……」

リジンとリクトは昨夜の内に挨拶を済ませていたらしく、軽く会釈をしていた。

「ルーシヤンと仲直りはできましたか」

「ええお蔭さまで」

につこりと、どこか底の見えない笑みを浮かべてリクトがリジンに向かって頭を下げた。

(……？仲悪いのかしら)

「私は何もしていないよ」

「ご謙遜を」

「謙遜なんて」

ローズはリクトとリジンを見てから肩をすくめ、ルーシャンに笑いかけた。

「ルーちゃん。よかった。元気な顔が見れて嬉しいわ」

「さすがに、お腹が空いたのよ」

「でも……リクト様に運んでいただいたお昼ご飯はどうしましょう」
リクトはプレートを持ったままリジンと話している。バイキング形式のランチパーティで、ルーシャンが参加するのならあのプレートは必要なさそうだ。

「リクト様には申し訳ないけれど、あれは処分するしかないわね」

「……ええ」

ローズはリジンの隣に戻るとリクトに挨拶をし、プレートを示して、

「リクト様。申し訳ありませんが……」

とそれが無駄になってしまった旨を伝えた。なるべく柔らかい表現を使っている。

(………)

ローズがメイドを呼ぶ仕草をした時に、ルーシャンは手を伸ばしてプレートの上からワイングラスを取った。

「ルーシャン殿？」

「……ワイングラスは、使わせていただきます」

リクトからの熱っぽい視線を背で受けながら、ルーシャンはただただリドニアが帰ってくることを願っていた。

ランチパーティが始まってしばらくしたらメフィス伯爵家からの馬車が来て。

そのすぐ後に、リドニアとティルーが帰ってくる。

リドニアとティルーがなぜ一緒なのか、伯爵邸に行ったのではなかったか。その理由を知るのは、また後の話。

お嬢様の見る風景（後書き）

次こそは夜会になります。

賑やかな夜想曲（前書き）

夜想曲って、英語でノクターンというらしいです。

賑やかな夜想曲

「ねえ、あれ……」

庭園で、私は信じられないものを見た。指を差すとティルー殿もぽかんと口を開ける。

「あれは……」

ティルー殿はあまり表情を変えない人だけれど、今回は驚いても仕方ない事だと思う。私だって一度見間違いかと思って、目を擦ってしまったもの。生まれてからずっと仕えている主を見間違うなんてミュール家として失格だけれど　本当に、衝撃だったの。

「お嬢様と、リクト様が……」

「ええ、ルーシャン様と、リクト様が……」

唯一人、リクト様を見たことのないトールだけは私達の反応に首を捻っている。

「リドニア？どうしましたか」

「トール……あれ、リクト様よ！ヒルドマン侯爵家の」

「ええ！？」

貴族の中でも上流と呼ばれる方々に仕える私達が目を見開いて絶句、なんてなかなか見れるものではない。

使用人は、たとえ殺人現場を見ても、男女の情事を目撃しても顔色を変えるな、って指導されている。そんなもので心を乱していたら、使用人失格だと。だから、その法則でいけば私達は使用人失格ってことだけど、今回は許されてもいいはずよ。

「お嬢様とリクト様が……」

ワインの入ったグラスの華奢な脚を持ち、お二人は優雅に乾杯していたの！

ここにいたのが私一人なら、見なかったことにしてその場から動いたと思う。

「雨でも降るんですかね」

茶化すように言うけれど、ティル―殿の声は動揺していて、驚いているのがありありと分かる。

「雨が振っては困りますね……」

ティル―殿の冗談に本気で返して、トールは私の顔の前で手を振った。

「リドニア。いつまでもブーツとしていないで。行きますよ。……ティル―殿も」

「わ、分かってます」

「そうですね、行きましょう」

トールもティル―殿もシヨックから抜け出している。

私はまだ驚いていたけど……無理矢理足を動かしてランチパーティに向かった。

時間から考えても、もう終盤だと思う。お嬢様に戻ったことを報告して片付けを手伝いましょう。

最初に私達に気付いて下さったのは、リクト様だった。こちらに軽く手を上げ、お嬢様にも声をかける。

「リドニア！」

お嬢様は顔を輝かせて私達　いえ、私を見た。

「お嬢様……！」

「遅いわよ！それに……どうしてティル―殿まで一緒なの」

トールについては、不審に思わないようだった。メフィス伯爵邸から一緒に来たと思われたらしい。

「それは、私も聞きたいな、ティル―？」

自分の主に睨まれ、ティル―殿は苦笑いした。

「あ……ははは。リドニア殿の護衛に……」

「護衛ですって？屋敷に戻ったのではなかったの？」

ああ、流れが。変な方向に流れている気がする。ここでトールが「リドニアは来てませんよ」なんて言ったら、私が意図的に黙っていたみたいじゃないの！

「あ、あの。お嬢様のお部屋から退出した際、メフィス伯爵邸より手紙を受け取ったのです。戻らなくても良いとのことでしたので、ならば夜会に使う化粧品を購入しようかと思い、街に行って参りました」

私の必死さが伝わったのか、お嬢様は不満そうにしながらもさらなる追求は止めて下さった。

「……で、僕もそれに護衛としてついていったんです」

都合よく私の説明に乗っかるティル殿。リクト様は顔をしかめた。

「必要あったのか？街くらい行き慣れているだろう」

「お役に立ちましたよね？リドニア殿」

「え？ま、まあ……」

役に立ったというか、何と言うか。

「何かあったんですか、リドニア？」

トールはそう聞いてくれるけれど、スリに遭いました、だなんて言いづらい。

「何もありませんでした」

「リドニア？本当のことを……」

「ないって言うてるでしょ！」

私がトールに怒鳴ると、お嬢様が呆れた顔をして手を二、三度叩かれた。

「みつともないからお止めなさい、二人とも」

いつも窘めているのは私だったから、何だか落ち込んだ。お嬢様のおっしゃったことは、考えることもなく正しかったのだもの。

エリザは、夜会を取り仕切るメイド長の補佐という大役に就いていた。

「すごいじゃない」

エリザは若い。私よりも年上だけれど、ウォルツ伯爵邸の中では若年層に部類するだろう。それに加えて、ローズ様の侍女として屋敷

に移ってきてから数年しか経っていない。

「そんなに嬉しくないわ」

私に対して、エリザは冷めたものだった。

「もつと喜ばないよ。選ばれなかった人に失礼だわ」

お嬢様やローズ様のいない私達だけの空間。夜会の行われる大広間。だからこそ、私達は本音で素の自分のままで話していた。

そう、私とトールは夜会の準備の手伝いをエリザに申し込んだの。

貴族が来るのは、完璧に飾り付けられ、楽団が音楽を奏でている時だけ。その前にどれだけの人数でセッティングをするか、またその後片付けをする使用人の苦勞など知ろうともしない。

いえ、別にいいのよ？こちらだってそれを前提としているのだから。気を遣ってもらおうなどとは思っていない。

「何故嬉しくないのです？」

白く広いテーブルクロスを敷きながら、トールは表情を暗くしているエリザに尋ねた。

大理石の床は鏡のように目の前のものを映していて、掃除をしたメイド達の努力が窺えた。

「だって、私が補佐になれたのは、ミュール家のせい　いえ、お陰なのよ」

エリザのフルネームは、エリザ・ミュール。

私の父、ルドルフの弟の娘が、エリザなの。

一気に、私はエリザの気持ちを察してしまった。

「誰も私の能力なんて見てないわ。ミュールを名乗れば、全員が私を尊敬の眼差しで見てくる」

一族で貴族に仕える。そういう一族は、多くないけれど存在する。なにもミュール家だけではないわ。

けれど、メフィス伯爵という、大貴族に一族単位で仕えることを許されているのはとてもない名誉なの。だって、旦那様は選べるもの。私達以外にも選択肢はあるのに　私達を使ってくださる。

それは大変に名誉なこと。

「ローズお嬢様の侍女でミュール家。それだけで私は大役に抜擢されるのよ」

苦々しい表情で出される料理一覧表に許可の印をつける。そのままエリザは近くにいたメイドにそれを渡した。

「だとしても ミュール家であることに誇りを持つべきよ。それに、いくらミュール家だとしても、エリザの能力がなければ誰も評価しないわ」

燭台の数と配置を確認しながら、私が言うと、エリザは無然とした表情になる。

「ミュール家の人は、皆これで悩むと聞いたわ。リドニアはまだなのね」

まだって。どうしていつか悩むみたいと言っのよ。

「私は悩まないわ。もちろん、ロアもよ」

出来の悪い弟の名を出すと、エリザは、

「確かに、ロアもあまり悩まなさそうね……」
と呟いた。

「いつでも自信満々だもの」

「あいつは、自信過剰なの！」

そういえば、もうすぐ帰ってくるかしら。あまり楽しみではないけれど。一応、弟だものね。料理でも作ってあげよう。

ミュール家の話はどこへやら、エリザは懐かしむように目を細めた。
「昔は、楽しかったわ。リドニアをルーシヤンお嬢様に取りられるのが嫌で、逃げ回ったりしてたのよね」

「そうだったかしら」

あまり覚えていない。むしろ、四人仲良く遊んでいたような気がするのだが。あ、私達とロアね。

「ええ。ツール、貴方はまだいなかったわよね」

「はい。私はその時……メフィス伯爵邸の使用人の募集人数が予想以上に少なくて、ミュール家を恨んでいました」

トールの言い方に実感がこもっていて、私とエリザは顔を見合わせた。

「それは、そうよ。ミュール家の特権だわ」

誇らしげな私とは対称的に、エリザは睫毛を伏せる。

「ええ。絶対に伯爵家において重要な地位に立てるけれど、それ以外に選択肢はないのよ」

……それは、常々エリザが言っていたことだった。

ミュール家に生まれたら、絶対にメフィス伯爵家に仕えなければいけない。それは権利ではなく、義務だと。

エリザがそれを言った際に、私は反論したものだった。

だってそうでしょう？伯爵に仕えるという光栄を、自ら手放す馬鹿がいるのかしら。

「それは……。これまでになかったんですか？別の道に進みたいと言っ者は」

参加者リストとグラス、料理数を確認しながらトールが言い、

「いないに決まってるでしょ。何を言うのよ、トール！」

銀食器に曇りがないか確認しながら私が返す。

「リドニア……変わらないわね……」

エリザは溜め息を吐きながら楽団に出す賄い^{まかな}を確認していた。

準備が全て終わり、私はお嬢様にドレスを着せた。トールに詰問したところ、母様……マリア侍女長に取ってもらったそうな。本当でしょうね？と思うけど、嘘を言う人でもないし、信じることにしたの。

「お嬢様。リクト様と仲を深められたようですね」

鏡の中のお嬢様。彼女に向かって言うと、カアツとその頬が赤くなつたので驚いた。

「な、何を言っているのかしら、リドニアは！」

「いえ、お二人が乾杯している所を見たもので。とても仲睦まじい

「ご様子でした」

胸元が寂しいわ。ローズ様にお借りした首飾りに何があつたかしら……。

頭を回転させながらの言葉だったが、お嬢様はガタリと立ち上がり、
れた。

「お嬢様？」

「な、仲睦まじくなんてないわよ！ヒルドマンよ！？」

言ってから、しまったという顔。

お嬢様はローズ様のおっしゃった事を真剣にお考えなのね。

そんな生真面目なところさえ愛しく感じる。

お嬢様の白い肌にアメジストを乗せると、……完璧よ。よく映える。

「あら？」

お嬢様の強く握り締められた拳が目に入った。そこには、たった一つの指輪さえない。

「お嬢様。リクト様からいただいていたのですか？婚約指輪」

「え？そ、そうね。忘れていたわ」

お嬢様は何でもないみたいにおっしゃるけど……困ったわね。私の方がショックを受けてしまう。

婚約指輪のピンクダイヤモンドをお客様に見せて回ることをイメージした色調でまとめたのだけれど。

リクト様、夜会で渡して下さるかしら。

「……後でティルー殿に言っておこうかしら……」

ティルー殿。

ハツと街でのことが脳裏に過ぎる。

純粹で真っ白なお嬢様。彼のことを知れば、この方の白は濁るのかしら。

「リドニア？どうかして？」

「な、なんでもありません、お嬢様。夜会で指輪をいただければ良いのですが」

「そうね」

素直な返答に、私は再び驚いた。私が目を丸くしたのをお嬢様は鏡越しに見て、眉を寄せた。

「ところで、リドニアは何を買っていたのよ、街で」

「え？あ、忘れるところでした。これを買ったのです」

高級化粧品店の紙袋を出すと、お嬢様は「ルージュ？」と意外そうな声を出した。

「ルージュなら、わざわざ買わなくても……」

「ふふ、色を見て下さい。ローズピンクなんですよ。ローズ様の唯一無二の姉妹の証として」

お嬢様は瓶すらも美しいルージュを見つめて、につこりと女の子らしく笑った。

「あたしとお姉様って、趣味が合わないけど……薔薇好きなのは一緒なのよね。きつと喜ぶわ」

「ご本人も薔薇色の人生を歩いてますしね」

そうね、とお嬢様は笑ってくださいました。

お嬢様はリクト様のパートナーとして夜会に出席された。指にリングはない。

私とトールは大広間でグラスや料理を持って歩き回り、エリザは別室でメイド長補佐として指示を出し、ティルー殿は護衛として夜会に参加していた。侍従兼護衛というのは、都合の良い身分ですね、と皮肉を言えば、そうでしょうと返された。

夜会が始まってしばらくすると、皆お酒が入って騒ぎ出すから、私達使用人には少し楽な時間になる。

その時を見計らって、私は真っ直ぐにその人の元に行った。

「カクテルはいかがですか、お客様？」

「……リドニア殿。嫌味ですか？」

私の声に振り返ったのはティルー殿。暇そうにしてる。私はこんなに忙しいというのに！

嫌味ですけど。と言うのを我慢して、私は「いいえ」と答えた。

「相手が誰であろうとそう呼べとマニュアルに書いてあるのです。いかがです？カクテルは」

「貰いたいですけどね。今飲酒したらリクト様を守れませんから。アルコールのないジュースでもいただきます」

まあ、護衛ならそう答えるわよね。

そう思い、アルコール度数の低い、お嬢様が好むようなドリンクを渡した。

「どうぞ」

「どうも。……高そうなジュースですね」

小さな逆円錐のグラスには、海の色と同じ色の液体が揺れている。チェリーが入っているのが、女性向けの証でしょうね。

「普段旦那様や奥様が嗜まれているものよりは高くありませんが。」

あ、申し訳ありません。今言うべきことはありませんでした」

「構いません。貴女と金銭感覚が違うことは分かっています」

グビツと飲み干して、チェリーはそのままに私の持っているプレートに戻る。

「あ、そうだ。お客様、少し頼みたいことがあるのですが。よろしいですか？」

ティルー殿は不思議そうな顔をして頷いた。

「足は踏まないでくださいね」

すぐに、お嬢様とリクト様が対面した時のことを言われたのだと分かった。

「……貴方がお嬢様を悪く言うからです」

後悔はしてないわ。

ティルー殿はクスリと笑ってその場の空気を変えた。少し表情を改める。

「何ですか？聞きましょう」

「はい。リクト様に、早々に婚約指輪をお嬢様に渡していただきましたのです。ティルー殿、急かしてください」

「……。僕に、そんな火中の栗を拾うようなことをしろと」

「ええ？」

そんなこと言っていないわよ。

「今のお嬢様は不完全なのです。ピンクダイヤモンドが指を飾って初めてお嬢様は輝かれるのです！」

多少大声を出しても、今の夜会では目立たない。皆、馬鹿笑いしているもの。

「んー。リドニア殿、あれが見えますか？」

ティールー殿が指差す方向には　お嬢様と、リクト様？

リクト様は蕩けるような笑みを、お嬢様は居心地の悪そうな表情を浮かべている。

「リクト様はルーシャン様を庭園に誘っておられますが、ルーシャン様が断って……るのは分かりませんが、拒んでおられるんですよ」

「まあ。お嬢様が？」

満更でもなさそうだったのに！

お二人は同じようなことを繰り返しているように見える。どちらも頬を染めて……。染めて……、

「　酔ってらっしゃる？」

そうなんです、とティールー殿は大きく頷いた。

「あんな酔っ払いに真面目に話し掛けても馬鹿を見るだけです。リドニア殿も飲みませんか？」

「私は今仕事中です！」

ウォルツ伯爵夫人にカクテルを渡し、ローズ様に首飾りをお借りしたことについてお礼申し上げ、酔ったお客様を介抱し……。夜会という神聖な響きから、和やかな話し合いのようになってきた頃。

私がお客様が落とされた食器を回収し、ツールが新しいものを渡す。そこで、私達は息をついた。

「山は越えたわね」

「ええ」

なんとなく戦友っぽい笑みを浮かべ合い、エリザに報告に行こうかと考えていた頃。

ガシツとだれかに腕を掴まれる。

「っ、テイルー殿？」

彼はすっかり出来上がっていた。顔は赤いし、意味もなく頬が緩んでいる。

……護衛だから飲まないって言ってなかったかしら。「どうしました？」「はは、向こうで、おもしろいものが見れますよ」

さすがに呂律は回るようね。

ホツとした。

困惑した様子のツールに「ちょっと休憩するわ」と言い残し（大丈夫だと思っただから抜けるのよ？）、私は引きずられるままに庭園に出た。

「テイルー殿？」

「あれです……見えますか？」

そこにはお嬢様とリクト様。

木の陰から、何かを盗み見るように。決して品のある行動ではなかった。

「のぞき見なんて……」

目を逸らして木から離れようとすると、腰に手を回された。酔っ払い特有の距離感が、しらふの私には近く感じる。

「何を」

「黙ってください。見つかります」

仕方なく口をつぐみ、私もお二人に視線を向けた。

「ルーシャン殿、受けとってもらいたいものがあるのだが」

まさに意を決したようなリクト様。それに対し、お嬢様は「ああ」と頷く。

「リドニアから聞きました」

なんとなく気まずい雰囲気になる。

リクト様もお嬢様も、私がここにいるの知らないのよね？

「……言っただんですか」

間近にあるティル―殿に睨まれ（た気がする）、

「……言いました」

小さな小さな声で答える。

私達がそんな会話を繰り返している間にも、リクト様は箱を取り出した。

「これなんだ。貴女のことを考えながら選んだ。気に入ってもらえるだろうか？」

箱を差し出すリクト様。お嬢様は受け取る。

なかなか開けようとせずに、ぼんやりとそれを見つめていらっしやる。

「わたくしは、貴方と結婚して幸せになれるのかしら……？」

どこか舌足らずな声で言い、お嬢様は自嘲するような笑みを浮かべた。

「絶対に」

何の根拠もないリクト様に、お嬢様は微笑みを見せる。

箱を開けると、その微笑みはさらに深いものになった。

「気に入っていただけか……？」

「」

お嬢様が口を開く直前。グラッとティル―殿の身体が揺れて、いきなり体重がかかってきた。身構えてもいない私は、簡単にバランスを崩す。

「わわ……！」

「あれ？」

ドタツと

庭園の芝生に倒れ伏した私達を、悲鳴すら上げられないほどに驚いたお嬢様が見つめる。

「リ……リドニア」

「お嬢様……」

「すいませんリドニア殿。一瞬寝てました」

頭を押さえてティルー殿が何かを言うけれど、そんなこと今はどうでもいいわ！

「あの　お、おめでとうございますお嬢様！！」

「お……、おめでたくなてないわ！！」

お嬢様は顔を赤くすると、指輪の入った箱を持ってその場から立ち去ろうとした。

「ルーシャ……」

「リクト様は来ないで！リドニア、貴女は来なさい！」

「は、はい！！」

眠そうなティルー殿と何とも言えない表情をしたリクト様に頭を下げてから、私はお嬢様を追ったのだった。

……絶対、お怒りよね。

夜会は、まだ終わらない。

賑やかな夜想曲（後書き）

ピンクダイヤモンドってどんなでしょう？
言葉だけ知っている謎の宝石です。

S h a l l w e d a n c e ? (前書き)

夜会編 (?) 終わりです !

Shall we dance ?

お嬢様は庭園から大広間に移ると、中心で踊る人々を見学するように壁に背を向けた。私がちゃんとして来ているか確認し、私も立ち止まったところで不機嫌そうに私を睨む。

「もう、リドニア！何をしていたの、あんなところで！」

「も……申し訳ありません……」

非は完全にこちらにある。のぞき見なんて嫌なことを仕事にするだなんて。

使用人以前に人として失格よ。

「……………」

さらに怒鳴られると思い肩を落しながらそれを待っていた私は、何もおっしやられないお嬢様を見上げた。

「……、お嬢様？」

お嬢様はとても悲しそうな それでいて辛そうな目をしていた。

「ねえ、リドニア。あたしとリクト様が結婚すれば、リドニアはリクト様にも仕えるのよね」

頷く。あくまで私はお嬢様（お嬢様がご結婚されれば奥様になるけど）の侍女だけれど、雇用主は今の旦那様（メフィス伯爵）からリクト様に移るだろう。

「はい。旦那様とお呼びし、私の命が尽きるまで、仕えさせていただきますわ」

それが、ミュール家の権利であり義務だから。

「……………」

「お嬢様？どうなさいました？」

お嬢様はお酒が入って、幾分か感情的になっているようだった。涙ぐんだお顔は、不謹慎だけれどとても魅力的。

「リクト様に……ヒルドマンに仕えられる？リドニア、相手はヒルドマンよ？嫌よね？」

「お嬢様」

縋るように抱き着いてくるお嬢様。夜会で人目もあり、令嬢が行う行動ではなかったけれど。

「嫌よね？リドニアが嫌なら、あたしは……」

お嬢様は、どこか焦ったように言い募る。嫌だと頷いてほしいけれど同じくらい、否定してほしい。そんな様子。

私は、旦那様を恨んだ。

小さな時から父親に聞かされてきたヒルドマンの悪口。

それは、お嬢様にとって絶対的な暗示になっていたのではないかしら。

だからリクト様を受け入れたくない……受け入れられない、と。今のお嬢様はそんな感じに見える。

だって、お嬢様はリクト様とヒルドマンを離して考えようとしていたのに、今は無理にくつつけて考えているもの。

きつと。

お嬢様は、リクト様に好意を抱いてらっしゃるわ。

それが恋とか、リクト様がお嬢様に抱いているのと同じくらいとは言わないけれど……お嬢様は、リクト様を好いていらっしゃる。

お嬢様に視線が集まる前に、私は膝を折ってお嬢様に顔を近づけた。赤い頬に、涙ぐんだ瞳。今誰か男性がお嬢様を見れば、一目惚れしてしまうわ！！

「お嬢様。私は、お嬢様に従います。とうに、ヒルドマン侯爵家に仕える覚悟はできておりますわ」

横目に、テイルー殿の靴が見えた（参加者の中で一番安価だから）。その隣にいるのはリクト様でしょうね。

「リド……」

「ですから！若いお二人はホールで踊るべきです」

肩を掴みクルリと回せば、上手い具合にリクト様の前に。

……勢い余って近づけすぎたかしら。

「リ、リクト様」

「ルーシャン殿」

さつさと誘いなさいよーっ、という言葉を見線に含ませると、分かつてるから黙れっ、との視線が。

「あ、あのルーシャン殿」

「ふふ、リドニアの言う通りね。リクト様、誘って下さるかしら」

「あ、ああ喜んで！」

好機を逃すまいとの速さでお嬢様の手をとると、リクト様は大広間の中心でお嬢様と踊りはじめた。

曲は途中からでなおかつ簡単ではないものの、お二人はまるで打ち合わせでもしていたかのような優雅さで舞う。

「美しいわ……とても」

ダンスを教えたのは私　と言いたところだけれど、残念ながらダンスだけは得意じゃなかったのよね。一応習ったけど。

うつとりとお二人に見惚れていると、隣でティルー殿がゴホンと咳ばらいした。

「リドニア殿。僕達も踊……」

「リドニア」

私とティルー殿に近づいてきたのは、トールだった。

「エリザが探していましたよ。カクテルの減りが想像よりも早いそうです」

「え？あー、そうね。今から行くわ。ティルー殿、構いませんよね？」

「……どうぞ」

肩をすくめて、ティルー殿は頷いた。

夜会の終わりに、ヒルドマン侯爵家の馬車がリクト様とティルー殿を迎えにきた。

「もう終わりか」

散々お嬢様と踊ったリクト様はそんなことを言っただけだ。私なん

て、普段より長く感じたわよ!?

「リクト様…… 本日は、とても楽しめましたわ」

馬車の前でお嬢様は可憐な笑みを見せる。今、絶対リクト様はお嬢様に惚れ直したわ。絶対。それくらいに可愛らしいんですもの。

「また会おう」

「ええ。そうですね」

とろんと眠そうな顔をしているのはティルー殿だ。私の隣で、「次会えるのは……」と指を折って数えている。

「一ヶ月後の、シンシア第二王妃殿下のお誕生日の日ですかね」

「ああ…… そうですね。毎年陛下は派手な誕生会を開いて下さいますから」

それに同調するお嬢様。リクト様はムツとした顔になった。

「それより前に、そちらの屋敷に行くから。一ヶ月も会えないだど? ティルー、ふざけているのか?」

「私ですか?」

「お前が余計なことを言うからだ」

馬車に乗り込む際も彼らは言い合い、お嬢様は少し羨むような目で二人を見ていた。

お嬢様がベッドに入られたのは、夏ならばもう空が明るみはじめた頃だった。

そのとき私達は 私とエリザとツールは反省会と称してエリザの部屋にいた。

反省会といっても、夜会で余ってしまったお酒をウォルツ伯爵にいただき、無駄話に花を咲かせているだけよ。

「リドニア。手伝うなら中途半端でなくきちんと最初から最後まで手伝うべきです」

酔っ払いのくせに説教をしてくるツール。

「何のことかしら」

「途中から手伝っていなかったでしょう」

「ティール殿のことだわ。と、すぐに分かった。」

「悪かったと思ってるわよ。お嬢様のことが心配だったの」

「心配？ティール殿と話してただけじゃないですか」

「何ですって？」

言い方に非難めいた空気を感じ、私はトールを睨みつける。どちら
も酔っ払っていて、感情の起伏が激しいのよ。

「余計なお世話よ」

「貴女の世話をしているわけではありません。そのせいで旦那様の
評判が下がったらどうするつもりですか」

こういう、過ぎたことをグチグチ言ってくるから嫌なのよ。

「下がらないわよ、あんたみたいだね」

私達の口論を無視して一人飲んでいたエリザが、さすがに無視でき
なくなったのかしら。私とトールの肩をポンポンと叩いた。

「終わったことよ。気にしない、気にしない」

あっはっは、と笑い、エリザは真後ろに倒れた。

「エリザ！？」

「寝てるのでしよう。私達も帰りますか、部屋の主が就寝中ですし」

「……そうね」

私の同意をもって、反省会は終了した。

意外かもしれないけど、お嬢様はお酒に強い。どんなに飲んでもほ
ろ酔い以上にはならないし、私と飲んでいても大抵私が先に寝る。

二日酔いも一切なし！という貴族として完璧な方なのよ。

だから、朝、頭が痛くてガンガンして、憂鬱な気分なのは私だった。

「リドニア。もしかして、あの後飲んでいたの？」

「……はい」

吐き気というほどではないけど、薄ーく重いなにかが胸元にくすぶ

っているような気分。

「リドニアは、顔に似合わずお酒に弱いことから。気をつけなさい。すぐに舞踏会が控えているのよ」

はい……。

「そちらでは今みたいにならないのよ」

「はい……」

私はかくかくと頷いた。

ウォルツ伯爵の書斎に行き、改めて突然の訪問と夜会の出席についてのお礼をし、ローズ様とリジン様にもきちんとした挨拶をする。

「また来てね、ルーちゃん、リド」

「ええ。お姉様、お幸せに」

「貴女もね」

お互いの頬にキスをして、お嬢様がたは微笑みあった。

私もお嬢様の後ろからエリザと視線を交わし、「またね」と無言で伝え合う。

屋敷の門の前にメフィス伯爵家の家紋のついた馬車が止まっていた。御者はトールが務めるの。

「ごめんなさいトール。待った？」

わざとらしく聞いてやると、トールはすました顔で「いえ別に」なんて言う。一時間くらいエリザと世間話でもすればよかったかしら。

「出しますよー」

御者の一言の後、ゆつくりと馬車が動き始める。

段々と小さくなるウォルツ伯爵邸を眺めながら、行きとは違うスッキリとした表情のお嬢様に、私は深い満足を覚えるのだった。

Shall we dance ? (後書き)

反省会でのお酒は、カクテルが足りなかったから足したら余った……って感じですね。

どうせ捨てるものだから、とのことでした。ありがとうございました。リドニアがお客さんだったことも大きいと思います。

次話は、ローズ様は出ないかな、と思います。まだ一文も書いていないので予想ですが。

姉と弟（前書き）

ロア登場です。

一話目から名前だけは登場していましたが、実際に出るのは今回が初めてですね。

姉と弟

ウォルツ伯爵の夜会が終わり、一ヶ月が経った。

リクト様はご自身の言葉通り頻繁にメフィス伯爵邸にいらっしゃり、私は何度も急なお茶会の準備をさせられた。

毎回会った瞬間にリクト様の目はお嬢様の右手を見ている（ような気がする）。

そして、そこに自分が送られた婚約指輪がないのを知って悲しそうに目を伏せていらっしゃる。

本人からしたらシヨックなことなんでしょうけど、私からしたら苦笑もの。

だって、お嬢様ったら屋敷内では指輪をしてらっしゃるんだもの。

リクト様とお会いするときだけお部屋のケースに入れているの。

リクト様の落胆ぶりに、一度だけ付けることを勧めたことがあるんだけど、「だって、恥ずかしいわ」と言われて余計なことを言うのは止めた。

だってその時のお嬢様のお可愛らしさと言ったら、筆舌に尽くしがたいのよ！あんなお嬢様を妻にできるリクト様は幸せ者なんだから、多少の悲しみは今の内に味わうべきだわ。

「そろそろ駅に着いた頃かしらね」

母様……マリア侍女長が呟いた。

「そうですね。朝に寮を出たのなら、そろそろではないかと」

私が頷くと、マリア侍女も満足げに微笑んだ。

十日前に弟のロアから届いた手紙によると、ヤツは今日の昼頃にメフィス伯爵邸に到着するらしい。

ロアが通う執事養成学校は全寮制で、休みも他の王立学校に比べて極端に少ない。夏に十日ほどと、三ヶ月に一度だけ。あいつは入学

時にブツブツ文句言ってたけど、実際に執事になったら休みなんてほとんどないのだから。むしろ今の状況に感謝しなさいって感じよ。」「ですが、同じ日にリクト様まで来られるなんて」

私は嘆息した。

リクト様が、三日前に次の逢瀬の日を今日に指定した時、お嬢様はキッチンとロアのことを伝えて断ったのだ。それなのに、今日を逃したら次はシンシア様の誕生日まで会えないとおっしゃり、無理に約束を取り付けたの。

マリア侍女長は苦笑して、「そうね」と言った。

「リドニア、貴女には良いと思える人はいないの？」

その時のマリア侍女は母親の顔をしていて。

「いないわ。……母様」母様は、仕事中に自分を母と呼んだ私を窺^{たしな}めなかった。

結果を言うと、リクト様方のほうがロアよりも早く来た。

マリア侍女長と別れて、私はお嬢様の部屋へ向かった。もう馬車が門の前に来ていることはご存知でしょうから、私が来るのを待っていらっしやると思うの。

「リドニア」

その途中、旦那様とトールと会った。

私を呼び止めたのは旦那様だった。眉を寄せて、あまり機嫌の良い状態じゃないみたい。

「旦那様……」

「ルーシヤンの部屋に行くのか？」

私が肯定すると、なおも複雑な表情をする。

一体、何なのかしら。

トールに目を向ければ、旦那様の後ろで苦笑していた。

「あの……」

「リドニア。ルーシヤンに伝えておいてくれ。婚約者だからといっ

て、無理にリクト殿と仲良くしなくてはならないわけではないのだと。結婚した後に、本当に愛せる人を見つければいい」

「……っ」

伝言の内容に、言葉を失った。

旦那様が言いたいことは、つまり結婚後に不倫をすればいいということ。

そして、不倫は私が嫌悪を抱くほどに罪深きこととされていないのが、貴族の世界。

旦那様もお嬢様も、リクト様もそちらの世界の人であることが、こういう時に思いしらされる。

私の承諾を待つ旦那様。頷けない私。

駄目。間が空くごとに、不自然な空気が流れる。

「……旦那様。そろそろ参りましょう」

そんな空気を破ったのはツールだった。チラリと時計を見て、やっぱり旦那様を急かす。

「ああ。そうだな。頼んだぞ、リドニア」

「……畏まりました」

モヤモヤとした気持ちを胸に抱きながら、私は止めていた足を再び動かした。

「お嬢様、ヒルドマ」

「リドニア！遅いじゃないの」

ノックをする寸前に扉が開かれ、お嬢様の顔が覗いた。

「も、申し訳ございません」

「いいのよ。行きましょう」

お嬢様の薬指に指輪はない。

咄嗟に確認してしまえば、指輪かあ、と、妙齡の女性ならば必ず考えることを考えてしまう。

私もそろそろよね……。

ミュール家に生まれたからには、婚期を逃して独身になることはないでしょうけど。

「リドニア。そういえば、どうして遅れたの？」

門に行く途中、お嬢様が尋ねてくる。

「あ……えと、旦那様に……」

「お父様？」

「少し リクト様について」

齒切れの悪い私に何を思ったのか、お嬢様は顔をしかめた。

「お父様ったら、私に婚約を命じておいて、リクト様を良く思っていないのよ。気にしなくていいわ」

「ですが……」

「リドニア。貴女の主は誰？」

「それはもちろん、お嬢様ですっ」

まあ、雇い主は旦那様だけど。それは言わないほうがいいわよね。
「ならば余計なことは考えないでいいのよ。そうでしょ？」

お嬢様……。真剣な顔のお嬢様に、少なからず感動してしまった。

「はい。分かりました」

強く頷くと、お嬢様はニコリと笑って足を早める。

ほんと、私が男だったらプロポーズしてるわ、なんて考えながら私もお嬢様を追った。

私達が門に到着すると、私達が着く前にリクト様に気づいたらしいメイドが、リクト様とテイルー殿を屋敷内に案内する途中だった。その子には仕事に戻るよう伝え、私とお嬢様は対応が遅れたことを謝罪した。

「お待たせしました」

「いや、それは構わないんだが……」

リクト様はお嬢様を見た。

お嬢様の指を。指輪はなく、リクト様は落ち込んだように肩を落とす。

「……」

「……。あつ、じゃあ私、お茶会のお菓子を準備を致しますね」

そそくさとその場から逃走すれば、悠長な動きでティルー殿がついて来た。

「……」

「あの……どうしました？」

「手伝います」

「……？」

いつもは手伝うなんて言っただけなのに。言われても断つただろうけど。

「ティルー殿も一応お客様ですし、お嬢様やリクト様と一緒にお待ちください」

「一応って……」

「あら、失礼」

「リクト様に、ルーシヤン様との二人きりにしろと言われたので、つまり邪魔だと言われたのね。」

結局、ティルー殿は厨房にまでついてきた。

料理人から出来立てのパイやクッキー、ビスケットを貰い、紅茶用のポットとカップをと一緒にワゴンに乗せる。ティルー殿にワゴンを運ばせた。……運んでもらった。

「もう弟さんはいらっしゃったんですか？」

「まだですよ。よく覚えてますね」

お嬢様がリクト様にその話をしたのは四日ほど前だ。確かに意識していれば忘れないだろうけれど、そんな細かく覚えてないと思っていた。

「気になっていたので。覚えてますよ」

「気になって、って……私の弟が？」

ロアなんか気にしてどうするのかしら。ティルー殿が気にするほどの人でもないし。

「執事の養成学校に通ってらっしゃるんですね？」

「……なるほど。気になるのは学校のほうね。」

「ええ。将来はメフィス伯爵家に仕えますから。ルドルフ執事の後を継ぐのです」

本当に、父様の後なんて継げるのかしら、とは思う。第一、ロアは執事って感じが全くしないもの。本人のやる気もあるのか無いのかよく分からないし。

紅茶やお菓子を乗せたワゴンを押しながら、ティルー殿は口を開いた。

「……ミュール家の特権ですか」

「……」

「メフィス伯爵家の執事だなんて、したい人はたくさんいるでしょうね」

ティルー殿の声音に混じる皮肉に、私は眉をひそめた。ガラガラとワゴンの立てる音が空々しく聞こえる。

「特権を得るための犠牲もあります。貴方にとにかく言われる筋合いはありません」

軽い皮肉や嫌味を言われるのは慣れている。屋敷内のミュール家でない使用人や、どこかの舞踏会や夜会になんて行ったらしょっちゅうよ。

羨望と嫉妬は紙一重のだと、私達は生まれて間もない頃に学ばされる。特に、ミュール家に直系で生まれた私とロアは。

「それとも、ティルー殿？本当はリクト様の侍従ではなく、旦那様の執事になりたかったのですか？」

抑^や捺^ゆするように言えば、あからさまにムツとしたように「そんなわけないでしょう」と言われる。

「なら貴方には関係ないでしょう。恐らく、ロアはもうすぐ帰ってくると思いますけど……あの子に余計なことを言ったら許しませんよ」

私の脅しにティルー殿は何も答えず、結局庭園で気まずそうに待つお嬢様の顔を見るまで、私は不愉快な気持ちを持て余していた。

いつも通りに紅茶をいれ、お菓子を並べ終える。

「シンシア様は、いくつになるんだ？」

紅茶を傾けながらリクト様はそう言った。さすがに頻繁に会っていれば話題も尽きるらしい。旬の話題が持ち出された。

「御歳三十四歳になれますわ」

「もうそんなものか……」

ご本人を前に言ったら不敬罪にでもなりそうなことを言って、リクト様は頷いた。

「陛下も出席されればいいのに」

「……」

ポツリと呟かれた言葉に、私とお嬢様は無言になる。

陛下は、一度もシンシア第二王妃殿下の誕生会に参加されない。それは、王城内、貴族間で囁かれる噂話。陛下も、シンシア様も否定されないのは、真実だからだと私は知っている。

シンシア様の誕生会に招かれるのは内輪の方々だけだからまだ噂の域は出ないけれど。きっと、遠くない未来にそれが事実だと広まるわ。

でも、陛下は正妃であるミーユ様の誕生会はおおつぴらにお祝いなさってる（らしい）。そんなこともメフィス伯爵家のヒルドマン嫌いに繋がってるのよね。

私的には……、ミーユ様にはとやかく言わないけど、シンシア様がお可哀相だと思うわ。

ご自分よりもずっと年上の方に嫁がれて、なのに相手は誕生会に出席すらしてくれないだなんて。私だったら耐えられない。

「今年も参加されないと、決まったわけではありませんわ」

お嬢様はそう言って、気丈にも笑って見せた。

「しかし、どうして参加されないんですかね？」

空気を読まない発言をしたのはティール殿。今の素晴らしい空気をどうしてくれるのよ。

「ですから、今年は参加して下さるかもしれないとお嬢様がおっしゃったではありませんか！」

悪意をふんだんに込めて睨みつければ、怯んだように一步下がる。

「ああいえ……でも、いくつで嫁いだのかは知りませんけど」

「二十歳です」

「二十歳からこれまで十三回も誕生会があつて、一度も参加されていないのなら、今回も望み薄なのは……？」

恐る恐るというように、厳しい現実を突き出してくる。

そんなこと皆分かつてゐるわよ！お嬢様がいなかったらそう叫んでいたことでしょうね。

「先のことなど、神にしか分かりませんわ」

なんとかそう言つて話を切り上げようとした時、とん、と肩が叩かれた。

メイドだ。

「リドニア様。ロア様がお見えです」

「あら、ロアが？やつと来たのね」

お嬢様を見ると、全て心得ているように肩を竦めた。

「行つていいわよ」

「ですが……」

今は仕事中。兄弟に会うために仕事を放棄します、だなんて、笑えやしないわ。

食い下がる私にお嬢様は苦笑した。

「行きなさい。命令よ。気になるんでしょう？別に、使用人がいなくなるわけじゃないもの。そんなに気にすることないわ。ねえ、

ティル―殿？」

話を振られたティル―殿は、流れを読んで頬を引き攣らせた。

「え」

まあ、そうよね。紅茶を入れたりお菓子を足したりなんてことはメイドや侍女の仕事なもの。

言つてしまえば、専門外よね。

……だから、私を見ってくるティル―殿の気持ちはあつさりと読めた。けど、

「申し訳ありません、ありがとうございます」

頭を下げ、早足でそこから退席する。

先ほど、余計なことを言った報復ってわけじゃないけど……いえ、立派な報復だけど。

「誰か来たのか？」

「リドニアの兄弟です」

「リドニア殿、すぐに帰ってきますか？」

「さあ……。どうでしょう」

そんな話し声が聞こえた。

ロアは、屋敷内の私室にいた。

「……ロア。入るわよ」

ノックをせずに入ると、振り返ったのはお嬢様と同じ年の少年ロア。

焦げ茶の髪と鋭い目つきは、学校の制服（燕尾服みたいな）を着てもガラが悪く見える。

ロアは片手を上げた。

「よお、姉さん」

相変わらず執事には不向きな話し方。下町の子供みたいだわ。学校で浮いてるんじゃないかしら。

「あんた、その喋り方止めなさいよ。メフィス伯爵家の執事として相応しくないわ。入学して何年目？そろそろ変えなさい」

ロアは持っていた鞆を椅子に乗せると、中から紙袋を取り出した。

「姉さんこそ……会ったびに母さんに似てくるな」

紙袋を投げてくる。袋には葉のイラストが描かれていた。

「……ありがとう」

紙袋の中に入っているのは、私が大好きなお店のお菓子。ロアの学

校の近くにあつて、こつちに帰つてくるときに買つてくるように頼んでいるの。お嬢様とロアと私でお茶会をするのよ。

「でも、母様に似てるなんて光栄だわ。あんたも父様に似なさいよ」
皮肉を返してやると、ロアは分かりやすく困つた顔をする。

「それより……姉さん、話があんだけど」

「話？後で聞くわ。あんた、もうお嬢様が婚約されたことは聞いた？」

「ん……ああ。ヒルドマンだろ？」

「そうなのよ。今来ているわ。挨拶なさい」

へえ、とロアは気のない様子で眉を上げた。
なによ。反応薄いわね。

でも、私もロアに大袈裟な反応は期待していなかった。この子、あんまり名前だけで人を嫌つたりはしなかったもの。

「姉さん、あんまり反対したりしないんだな」

「どういう意味よ」

「だって、前までヒルドマンなんてーとかお嬢様と言ひ合つてたじゃんか。なのに今は好意的な感じだったからさ」

弟の的確な指摘に、私は黙りこむ。

はは、と笑つてロアは私の頭を叩いた。

「何よ」

「別に……。ほら、挨拶に行くんだろ？」

少ない荷物を分けて、ロアは部屋を出た。私がついていくと、私からお菓子が入つてゐる紙袋を奪つて部屋のテーブルに置いた。

「お菓子は置いていくの？」

「三人分しか買つてねえんだよ」
なるほど。

窓から覗くと、庭園では慣れない手つきでティールームが紅茶をいれていた。何となく微笑ましくて、立ち止まつてしまふ。

「なんだありや」

私とは別の理由で立ち止まったらしいロアは呆れた様子でそう言った。

「ねえ、どこでそういう言葉を覚えてくるの？」

「街で。友達とお忍びで行くんだよ」

「もう。未来の執事が何やってんのよ」

忍ぶような身分でもないでしょ。

……でも、少しだけ羨ましいなと思う。私は学校に行かなかったから。

貴族の令嬢が通う学校ならあるけれど、それは花嫁修行の一環みたいな学校で、私が通うようなところではなかったの。

「そつえば、今回の休みも翌日まで？」

執事養成学校の休み三ヶ月に一度と言ったけど、ロアの今回の休みは少し例外なのよ。普通の王城で開かれる舞踏会に、私達侍女は参加できない。待機室で待つんだけど、シンシア様の誕生会だけは違うの。シンシア様が、ミュール家を招待して下さるのよ！

だからロアも、王妃殿下に招待された舞踏会に出席する、という理由で休みをいただくの。大抵は舞踏会の二日前から舞踏会の翌日までの四日間が多いのだけど、たまに授業の都合とかで短くなる。だから聞いたら、ロアはぼんやりと頷いた。

「ああ」

「そう。母様と父様に伝えておくわ。行きましょ」

手を引けば、ロアも歩きだした。

庭園に足を踏み出すと、こちらに気付いたお嬢様が手を振った。

「リドニア、ロア！」

悪戦苦闘中のティール殿と、そんな彼を不安げに見ていたリクト様も弾かれたように私達を見る。ロアは私の手を振り払うと、満面の笑みを浮かべて頭を下げた。

相変わらず、よくもまあいきなり笑えるものよね。私だったら絶対口元が引きつるわ。

「二ヶ月ぶりでしょうか、ルーシャン様」

「ええ、久しぶりね！」

ロアは真っ直ぐお嬢様の前に行くと、腰を追って挨拶をした。それからリクト様とティル―殿を見る。

「初めまして。ロア＝ミュールと申します」

「リクト＝ヒルドマンだ。ルーシャン殿の婚約者の」

リクト様は「婚約者」の部分を強く言い、ロアの手を握るお嬢様の手を自分の方に持っていていった。

「ティル―＝ディエラです。リクト様の侍従兼護衛をしております……が。リドニア殿、後を頼みます」

ティル―殿もロアに負けない笑みを浮かべながら、私にポットとし機（茶葉を取り除く物）を手渡した。
結局いれられなかったのかしら。

その後、ロアはお二人とも早々に馴染み、冗談を言って笑いあえる程度には仲良くなった。

シンシア様の誕生会に参加する準備があるからといつもよりも早めに帰るリクト様方に別れを告げる。

その後はそのまま母様や父様、旦那様に奥様と様々な方々に挨拶をして回って、ロアが再び私室に戻れたのは夕食の後だった。

「姉さん」

真夜中に扉がノックされ、私は飛び上がった。さあ寝ようと寝間着を着ていたし。

「……ロア？」

「ああ。お菓子を食べそびれただろ？ 今日中に食べなきゃ傷むだろうし、食べないかと思って」

お菓子か……。今食べたなら、確実に脂肪になる。

頭の中で脂肪とお菓子の美味しさが戦う。

「いいわ。入りなさい」

お菓子の美味しさが勝利した。

紙袋を持ったロアが入ってくる。

椅子を勧めて、私は紙製のお皿を取り出した。

「紅茶を持ってくるわ　と言いたところだけど、水でいいかしら。今紅茶なんか飲んだら眠れなくなるわ」

「ああ。悪いな」

後片付けをしていたらしい料理長に直々に入れてもらった水を両手に持って、私は部屋に戻った。

「さ。いただきますよ」

「……」

なんだか、ロアが変。

いつもならもつと無駄口を叩くくせに、今日は妙に静かだったりする。

どうしたのかしら。

覗き込むようにしてロアを見ると、

「どうした？」

と逆に聞かれてしまった。

「いや、私はどうもしないけど。あんたこそ、何かあった？元氣ないみたいよ」

明るい場所で見れば焦げ茶の髪も、暗い部屋で見れば黒に見える。月明かりを浴びながらお菓子を貪る姉弟というのも変な構図よね。

「ロア」

名を呼んで髪を撫でてやると、ロアはじっと私を見た。

「……話そうと思ってたんだけど、止める」

話そうと思っていたことは、つまり元氣がない理由よね。

当然聞けるものだと思っていた私は、拍子抜けしてしまった。

「えっ、何で？」

「今話しても姉さんの邪魔にしかならないと思う。だから、誕生会

が終わってから話す」

「そう。あ、昼に話があるって言ってたけど、それと同じ話？」

「ああ」

真剣な声と表情。重い空気に耐えられなくなり、私は水を口にした。

「……… そんな時は、俺の味方をしてくれる？」

「味方とか敵とかの話なの？」

「ああ。きつと、皆反対すると思う。……… 姉さんも」

いつになく弱気なロア。

私の答えなんて知ってるでしょうに。

「私はいつだってお嬢様の味方よ。お嬢様があんたの意見に反対されたら、私も猛反対させていただくわ」

私の答えに、ロアはキョトンとしてから苦笑した。

姉と弟（後書き）

次回、舞台は王城に移ります。
きつとりクトとティルーも出ます。

第二王妃の誕生会

シンシア様の誕生会に参加する人は、大抵が知り合い。

メフィス伯爵家、ミュール家、ウォルツ伯爵家、と身内が続くのだけど、ヒルドマンも招待されていると数年前に知って、とても驚いたのを覚えているわ。

だって、ヒルドマンよ？今でこそお嬢様とリクト様が婚約されたけど、昔はただの敵じゃない。

正妃のミーユ様がメフィス伯爵を誕生会に招いていたのは知ってたけれど（皮肉かと思ってた）、どうしてシンシア様はヒルドマン侯爵家に招待状を送るのかしら、って、ずっと思ってた。

その答えは簡単だった。でも、答えを聞かない限りは分からないものだと同時に思ったわ。

シンシア様は昔、マリア侍女長　母様が侍女として仕えていた人なんですって。シンシア様が国王陛下の妃となることが決定したとき、誰もが母様も王城に行くと思っていたそうよ。それくらい二人は仲が良かったんですって。

でも、母様は屋敷に残った。その理由が、「ミュール家の主はメフィス伯爵家だから」だなんて。シンシア様も結婚されたら姓がメフィスから国名でもあるグウィリーに変わるじゃない。だからもう私の中では主ではなくなった、そう言ったらしいわ。

父様と結婚する前は母様はミュール家じゃなかったのに、母様の方がミュール家に合っている気がする。

私も相当ミュールという名前に支配されてるほうだけど、それでも母様には負けると思ってしまうもの。たとえお嬢様がヒルドマン侯

爵家の奥様になっても、私は付いていくわ！

母様は違ったけれど。

後悔はなかったの？迷わなかった？

そんなことを聞ける親子関係じゃないことくらい、私が一番理解している。

パーティに招待されたら、礼服を着る。それは当然のマナー。

一年の大半をお仕着せで過ごす私だけど、一年に一度、シンシア様の誕生会にだけはドレスや装飾品を着けさせてもらえる。普段は同僚のメイドに髪を結われ、首飾りを着けられ、メイクをされる。それは何とも気恥ずかしさを伴う作業よ。

屋敷に働く使用人の内、三分の一はミュール家の人。とは言ってもエリザやロアほどに濃い血縁関係にあるわけじゃなくて、親族と言えるレベルの人達だけだ。

「できました、リドニアさん」

「ありがとう。お嬢様はもう？」

「ええ、リドニアさんをお待ちですわ」

髪を結ってくれたメイドにお礼を言い、私は彼女と共に部屋を出た。私の部屋の鏡台は小さく、ドレスアップには相応しくないとのことから専用の小部屋を借りたの。

「リドニア、終わった？」

いつもより少女らしさを強調したお嬢様の雰囲気。

可愛らしいわ、とても。まあ、私ならお嬢様の首飾りは紫じゃなくて青にするけれど……って、競っている場合じゃないわよね。

お嬢様は私を見てにつこりと微笑まれた。まさに天使の微笑みよ。

「ええ、悪くないわ。でも、耳飾りは薄桃色ではなくもつと濃い紅色にすべきだったわね」

天使は容赦なく私の横のメイドにそうおっしゃった。

「あ、も、申し訳ございません……！」

気の毒に思ってしまうほどにメイドは畏縮し、突き飛ばせば絨毯に倒れ込んでしまいそう。

「お嬢様、私がお嬢様の婚約指輪と同じ色がいいと我が儘を申したのです。次回は助言通り紅色の石にさせていただきます」

「あら、そうなの？確かに、薄桃色もいいかもしれないわね」

お嬢様はあつさりと意見を変えると、私の前を歩きだした。

「そろそろ王城に向かうそうよ」

「はい。シンシア様はお元気でしょうか」

「今回もにこにこ笑ってるんでしょうね」

お嬢様の声には、僅かな皮肉が混じっている。それを咎めることなく、私も軽く頷いた。

私とお嬢様が門に出ると、四頭立ての馬車と、二頭立ての馬車がいくつか留めてある。母様や父様を始めとしたミュール家の人達はほとんどが準備万端みたいね。

「リドニア」

遅いわよ、と母様に目で言われた。

「申し訳ありません。支度に手間取りました」

「もうすぐ旦那様方が来られます」

「分かりました」

すぐに、旦那様と奥様がいらっしゃった。私達とは違って普通に仕事着のトール。毎年、少しだけ罪悪感を感じるのよね。

トールや他の使用人は出られないから。たとえば来て来たとしても、控室で待たされるのよ。

「お嬢様、あちらの馬車に乗りましょう」

「リドニアは？」

「わたしは一つ後ろの、あの馬車で王城に向かわせていただきます」
お嬢様を旦那様方と同じ馬車に乗ってもらうと、私も素早く決められた馬車に乗り込んだ。

御者が綱を振るい、馬が歩きだした。

グウィリー王国の王城は、メフィス伯爵邸から馬車で数時間かかる。大陸で三番目に大きな王国の王城は、大陸で三番目に豪華だと評判よ。豪華というかなんというか……無駄にお金がかかってるわよね。客室の数を把握しているのは老執事だけで、彼が死ねば具体的な数は分からなくなるという噂は本当かしら。

という私の疑問は置いておいて。

私達は王城の正門前に到着した。

毎年不参加のヒルドマン侯爵家も今年は来るので、少し誕生会に割く人員を増やしたらいいわ。

「ようこそお越しくできました。こちらです」

歳のいったメイドが頭を下げて、大広間まで案内してくれる。

トール達使用人は控室に行ったから、今は私達 ミュール家（私を入れて八人くらい）とメフィス伯爵家だけになる。

大広間に近づくと、美しい旋律が聞こえてきた。

厚い扉越しでも聞こえるその音は、扉が開けば数十倍にもなって耳に響く。

扉を開くと、既にウォルツ伯爵家とヒルドマン侯爵家は着いていたみたいね。自分達同士で談笑したり、シンシア様に挨拶をしているわ。

「メフィス伯爵家の方々、ミュール家のご入場です！」

扉の近くに控えていた使用人が声高に叫んだ。

談笑していた方達はそれを止めて、私達を……いえ、旦那様を見る。実際の舞踏会では知らないけれど、今回のようなシンシア様の誕生会では全員が旦那様に好意的に近寄ってくるわ。

「お久しぶりです、メフィス伯爵」

「ああ久しぶり。ご家族は息災かね」

旦那様も笑みを浮かべて握手をしたり肩を叩いたりとアットホームな雰囲気壊さない。

……いつもなら。

「ルーシャン殿」

どうやって入ってきたのか疑問な侍従と仲良く話していたらしいお嬢様の婚約者が自分（というかその後ろのお嬢様）の方に来て、旦那様は眉を潜めた。

「なぜ、ヒルドマン侯爵家の方がこちらにいらっしやるのかな？」

「え？」

完全に眼中になかった旦那様からの突然の問いかけに不意を打たれるお嬢様の婚約者のリクト様。

「お父様っ」

お嬢様の声も完全無視で、嫌味ったらしく旦那様は唇を歪めている。
「もちろん、シンシア様より招待されているからですよ」

リクトも微笑む。お嬢様の名を呼んだときは全く違った、落ち着いた笑みだけ。

「だがしかし、シンシアの誕生会で貴方方を見たのは初めてだったと思うが？」

つまり、毎回来てなかったのだから今回も来るなど。

「ええこれまでは。しかし、私とルーシャン殿が婚約者となった今では、私達ヒルドマンもシンシア様と無関係というわけではないでしょう」

今は親族だとリクト様は主張する。

ちなみに、お二人が話している時にリクト様の後方にいるヒルドマン侯爵とその奥様は我関せずとばかりにお話をしていらした。

ティール殿はと言えば……黙々と料理を食べていた。護衛のくせに主の危機は無視するのね。まあ、旦那様を切れと言いたいわけじゃないけど。

「だが」

「あなた、見苦しいことは止めてちょうだい」

言い返そうとした旦那様は、隣に立つ奥様に窘められて開きかけた

口を閉じた。

その場から移動する旦那様を見てリクト様は、ふうと息を吐いてお嬢様に歩み寄る。

「ルーシャン殿」

「申し訳ありません、父が……」

「構わないさ、全然。そろそろシンシア様が挨拶をされると思っから……その後踊ってもらえるか？」

「ええ。ぜひ」

頷いてから上げられた手の指に着けられた指輪に、リクト様の目が見開かれる。

盗み聞きなんかしないように、私はお二人から離れた。

とは言え、私が気軽に話せる人なんて限られている。

広間を壁に沿って歩いていったロアを見つけて呼び止めた。

「ロア！」

「あ、姉さん、俺ちよつとローズ様とエリザに挨拶してくるわ」

「え？あ、分かったわ。母様に言った？」

「ああ」

じゃ、とロアは私の用件なんか聞かずにどこかへ行く。私は肩を竦めて壁に背を向けて目を閉じた。眠るわけじゃないけど、何となくね。すぐ開くはずだったのに思っていたよりも心地好くて、私はしばらく目を閉じていた。

「リドニア殿？」

そんな声と共に、頬に冷たいなにかが当てられた。

「ひあっ！？」

目を開けると、そこは暗闇。

明かりが消されたのだと、一瞬を置いて理解する。

完全な闇ではないけど、シャンデリアの煌々とした明かるさに慣れた目には真っ暗闇のように感じられた。

「やはりリドニア殿でしたか」

私の頬に当たっていたのは、カクテルの入ったグラスだった。そしてそれを持っているのは、リクト様の侍従兼護衛のティル―殿。

「どうぞ。ご気分が優れませんか？」

俯いて目を閉じていたから、気分が悪いと思われたみたい。

「あ、いえ……」

勘違いに納得しつつも気にかげられたことが嬉しくて、頬が緩んだ。
「あ、始まるようですよ」

ティル―殿の言葉と共に、暗闇の中に、一部だけ明るい場所ができる。そこに美しいドレスを着たシンシア様が立って、一度頭を下げると誕生会に来た方達にお礼を述べる。

それもやはり毎年恒例のことと、私も落ち着くことができた。

「しかし、よく私だと分かりましたね。このような暗闇で」

闇のせいで色の分からないカクテルを舐めながら言う。実際に気になったことだった。シンシア様の挨拶を聞くのが正しい行いなんだろうけど、何年も繰り返されたらさすがに飽きるわ。

「そりや分かりますよ。何たってリドニア殿なんですから。目隠しをされていても分かります」

「……そうですか。で、本当は？」

「明るい時から気になってたんです。最初はリドニア殿とは思っていなかったんですけど、近付くにつれてリドニア殿に似てるなー、って」

それで実は私じゃなかったらどうしたのかしら。貴族令嬢の頬に使用人がグラスを押し当てるだなんて笑えない。理由が人違いなんてなおさら悪いし。

「……ん？」

そんなことより、ティル―殿の持っていたカクテルは、意外とアルコールの強いものだった。

カツと身体の中が暖くなり、思考力が弱くなる。

「そう言えば……どうしてティル―殿はこちらに？」

酔いを覚ますためにも、私は積極的に言葉を紡いだ。

「え？普通に何も言わずに付いて行ったら入れましたけど」

「それは駄目ですよ」

空になったグラスを押し付けると、少し驚いた様子で次のカクテルが渡された。やっぱり色は分らないけど、オレンジの爽やかな風味が感じられる。

「ティルー……様はシンシア様がお可哀相だと思いませんか」

「様？リドニア殿、酔ってます？」

「私は、シンシア様がお可哀相だと思います。今だってシンシア様の横に陛下はいらっしゃらないのに……。ミーユ様はずるいです。陛下の愛を一身に受けて」

怒りを表に出して、再び空いたグラスをティルー殿に渡す。少しして新しいカクテルがくる。

「……シンシア様ですか。可哀相と言いますか。正直なところ、僕はミーユ様とシンシア様の関係がよく分かりません」
「どういう意味かしら。」

「……そうですか」

「ええ」

私のてきとうな返事にティルー殿は真面目に返す。

「僕が見たところ、シンシア様とミーユ様は仲が良さそうなんです」
「よ」

「ふうん……」

僕が見たところって、そういえばティルー殿は陛下を近くで見たことがあるのかしら。

ティルー殿の出した重要ワードを聞き過ごして、私はそれこそどうでもいいことを考える。

「ですから、一概に可哀相とも言えない」

メイドから受けとった新しいカクテルを飲む。お嬢様は私がお酒が弱いだなんて言ってたけど、そうでもないわよね？

私、たくさん飲んでるけど平気なもの。

「リドニア殿、あれ……陛下ですよ？」

「えー？」

ティールー殿が指を指した場所に目を向けると、ぱっと明かりがついた。いきなりの刺激に目が痛む。

けど、そんな痛みよりも遥かに重要な方がそこにいた。

他の貴族の方々も驚いた様子でその人を見た。

「……………へいか……………」

呂律が回らない。

頭がぐるぐるとして、ふわふわとして……。

「陛下。どうなさいました？」

そこにいたのは陛下だった。

後ろには、従者かしら。冷たい表情をした男性が控えている。

シンシア様は特に驚いた様子ではなかった。けれど、とても嬉しそうに笑う。

ああ、陛下が来てくれて嬉しいのね、そう思えた。

「皆に公表したいことがある」

陛下の声は、決して聞きやすいとは言えない声質なのに大広間に響き渡る。

皆が何を言い出すのかと身構えた。

陛下は顔色を変えず、まるで当然のことのようにそれを言う。

「余は、第二王妃シンシアⅡメフィスⅡウイグリーと離婚することにした」

妃も余の決断に異議を申ししていない。

むしろ、異議を申し立てるのはシンシア様の親類よね、なんて軽口は叩けなくて。気付けば瞼が閉じられていた。

第二王妃の誕生会（後書き）

リドニアはお酒に弱いんですねー。

彼女が酔っ払った話も書きたいですけど、本編ではなく番外編のよ
うな形になりそうですね。

夜中の悩み（前書き）

眠ってしまったリドニアですが、さすがに使用人だけあって目覚めは良いみたいですネ。

夜中の悩み

深紅の、毛足の長い絨毯を月明かりが照らす。窓口の形に照らされた明かりは実際のそれよりも長く細い。猫足のテーブルの上にはワイングラスが二つ並んでいて、片方だけが減っていた。

そこにいるのは二人の女性だ。片方はくつろいだ様子でベルベットのソファに腰掛けて、もう片方は彼女の傍らに寄り添っている。

「……お嬢様」

窓の形を作っていた明かりが暗くなる。歪みなある月に雲がかかったのだ。

「なあに？」

ワイングラスとテーブルのぶつかる音が静かな空間に響き渡る。女性が赤い液体のなくなったワイングラスをテーブルに乗せると、ちょうど良い時にもう片方の女性がボトルから新たなワインを注ぐ。「ねえ、マリア。陛下は約束を守って下さったのよ」

何かを抑えるような声音だった。それを言われた女性　マリアは無言で顎を引く。

「お兄様は、さぞかしお怒りでしょうね」

返事を期待していないのか、女性はワインに口をつける。無言で肯定を示してから、マリアは小さく息を吐いた。

「マリア？どうしたの」

「私は、貴女の幸せを願っております」

「ならば　来てくれる？わたくしのもとに」

問い掛けに、マリアは頷いた。

「もちろんですわ。どこまでもお供いたします」

「……」

柔らかなベッドの感触を背に感じながら目を開ける。天蓋が目に入り、起き上がると私は自分が寝室にいることを知った。

……あれ？私何していたのかしら。

傍らに手をつく、ガサツと紙の感触がした。窓に近寄って月明かりを頼りに紙を広げると、見覚えのない筆跡で「向かいの部屋を借りたので、何かあったら起こして下さい」と書いてあった。誰かしら。

ぼんやりと部屋を眺めていると、頭が痛くなってきた、シンシア様の誕生会に出席していたことを思い出した。

そうよ！酔っ払って、寝たんだわ……。

情けない。使用人が酔って寝るだなんて！部屋から出たくないわ……。お嬢様に合わせる顔がないもの。

どうしようか迷っていると、すーっと眠気が襲ってきた。ゆつくりと身体は傾き、意識は無くなっていく。

「いい加減にしろ……」

ダンッ

怒鳴り声に意識が浮上した。

えっ？今の、旦那様の声、よね？聞き間違えるはずがない。扉に張り付き、薄く扉を開くと、そこには旦那様とシンシア様、母様（誕生会が終わったのなら、マリア侍女長と言いかえるべきかしら）がいた。

「お前が陛下の寵愛をとれないからだ。子もいない、寵愛もない、そんなだから離縁などされるのだ！」

「申し訳ございません、お兄様」

部屋から出るに知られずにいると、ふと視線を泳がせたマリア侍女長と目が合ってしまった。

「旦那様、シンシア様。このような場所では、人目につきますわ。どこかに場所を移動しましょう」

「……っ。そうだな」

三人は連れだつてその場を移動していった。姿が見えなくなったことを確認すると、私は部屋から出た。等間隔に置かれた燭台。蠟燭の火がゆらりと揺れている。

「起きましたか」

私の部屋の向かいの部屋。その扉が開いて、ティル―殿が顔を覗かせた。

「あ……、ティル―殿？」

「いきなり寝たから驚きました。あ、着替えはメイドに任せましたから」

「え？」

自分の着ているものを見下ろす。着ていたはずのドレスではなく、軽めのワンピースになっていた。寝間着にも代用できるタイプよ。

「……お手間をおかけしました。申し訳ありません」

「いえ。ドレス、とても似合っていましたよ。誕生会では言いそびれていました」

深々と頭を下げた私に、ティル―殿はそう言った。そして、これまでのことを話すから、と部屋に来るよう言われる。

普段は王城に泊まるなんてことはせず、誕生会が終わればそのまま屋敷へ帰っていた。にも関わらず私やティル―殿が王城の客室にいるのは、旦那様を始めとした貴族の方々がここに滞在しているからでしょうね。

「私はお嬢様のもとに参ります。ご厚意、とても感謝いたします」
そのままお嬢様のもとへ向かおうとした私を、ティル―殿は止めた。

「ルーシャン様は、今とても混乱しておいでだと思います。何も知らないリドニア殿がお傍にいても、何も変わりません」

確かに　まずお嬢様に会いに行くより、ティル―殿に話を伺った方が良くかもしれない。

「そう、ですね。ぜひお話を伺いたいです」

満足げに頷くと、ティル―殿は部屋の扉を開けた。

王城の客室は、二部屋の連間になっている。私の部屋は寝室だけだったから、客室といっても、使用人のためのものだと思うわ。

「頭痛は大丈夫ですか？」

ティルー殿の部屋は、私のものと同じ作りだった。窓の向きで多少の配置の違いはあるけど、ソファもテーブルも同じ物だわ。

「ええ」

気遣ってくれたティルー殿に頷き返す。

「それは良かった。……ああ、どうぞ座って下さい」

「ありがとうございます」

ソファは、二人掛けのもの一つしかない。ティルー殿は座らないのかしら。なんて思っていたのだけど、ティルー殿は何の断りもなく隣に座ってきた。

「ちょ……、いきなり座らないで下さい！」

「え？ああ、すいません」

二人掛けとはいえ、一人部屋に置かれているものよ。二人座って余裕があるほどに大きくはない。だから、二人並んで座ったら距離が近いっつらないのよ！

「お隣り、よろしいですか？」

「どうぞ」

座ったまま言われても。本当は嫌だったわ。近すぎよ。

「さて、説明ですが……、どこまで覚えていますか？」

どこまで覚えているのか覚えていません。たしか、ティルー殿と話していて、陛下が来られたのよね。で、シンシア様と離婚する、って、

「離婚!？」

シンシア様と、陛下が。離婚するのよね？なんで忘れていたのかしら。

旦那様　メフィス伯爵の権威は、その大半がシンシア様のご家族という裏付けがあつてのものよ。シンシア様が離婚されてしまえば、旦那様の権威は落ちる。結婚して離婚されるだなんて、結婚し

なかったほうがマシよ。

旦那様がシンシア様を怒鳴り付けているのを思い出す。あれは、このことを言っていたのね！

「陛下の言葉までですか？」

「ええ、ええ……。ああ、どうしましょう？困ったわ……」

私の挙動不審な、ソファを立ったり座ったりする行動については何も言わず、ティルー殿は私にその後のことを教えてくれた。

「まず、メフィス伯爵が異議を唱えました。まあ、理由を求めていますね。で、ウォルツ伯爵等の他の方々もそれに続き、あ、でも執事さんは何も言っていないませんでした」

「……マリア侍女長は？」

マリア侍女長は、シンシア様の元侍女。あの人がこのことをどう思っのか、多少なりとも興味はあった。

「マリア侍女長……萌黄色のドレスの女性ですか？あの人も普通にしましたよ。無反応だったのはヒルドマン侯爵家の人と執事さんとロア君と……その女性だけでしたから。覚えています」

無反応って……。本当に、マリア侍女長のことが分からない。もしもリクト様がお嬢様と離婚したいだなんて言い出したら、私は死を覚悟してヒルドマン侯爵邸に殴り込みに行くわよ。

「で、その後、明日に各党首の方々と陛下の話し合いの席が設けられることが決まりました。本日は皆、王城で一晩過ごすことになりました。あ、ロア君も学校を休むことになりましたよ」

すらすらと話すティルー殿の話に頷き、最後のロアの話で私は首を捻った。

「……あの、どうしてロアの話まで知っているんです？かなり私的なことですのに」

ああ、とティルー殿はさも簡単なことを話すかのように言った。「僕が貴女を抱えていたからですよ、リドニア殿。貴女のことをどうしようか聞きにいったときに聞こえました」

恥ずかしさで、倒れなくなつた。

眠っていらつしやるかしら、とは思ったけれど、私はお嬢様の部屋を訪ねた。厚い扉を叩くと中から小さな声で「どうぞ」と入室許可が下り、私は部屋に入った。

さすがにお嬢様の部屋は、連間の広く美しい客室だった。

お嬢様は寢室のベッドに座って、ぼうつと前を見つめていた。部屋履きは細い足から落ちて、片方だけが絨毯に転がっている。

「お嬢様……！」

「リドニア。起きたのね。だから、あんまりお酒を飲まないように言っていたのに。ティルー殿に、お姫様みたいに抱えられていたのよ」

言うことは普段通りでも、声のトーンはいつもより低い。恥ずかしさを我慢しながら、私はお嬢様に近寄った。

「……お嬢様」

「ふふ、リドニア。お父様の顔、見た？顔面蒼白で、焦って」

乾いた笑いを浮かべたお嬢様は、絶対に奥様の血を濃くひいているわ。旦那様寄りだったら、今頃あたふたと焦っているはずだもの。「それに比べて、シンシア叔母様の落ち着いたこと」

そうなのかしら。落ち着いていたのは、シンシア様の本心からの行動かしら。

「お嬢様は……どのように思われますか？シンシア様と離婚したいと陛下がおっしゃったのは、何が原因なのでしょう」

お嬢様は足をゆっくりと揺らし、部屋履きを何とは無しに眺めている。

「子がいないこと。ミーユ様の存在。……考えられるのは、これくらいじゃない？もちろん、夫婦喧嘩やそれに類することかもしれない。お父様が原因かもしれない」

お嬢様は 微かに苛立っているようだわ。口調に僅かな荒々し

さを感じて、私は口をつぐんだ。

「お嬢様……？」

「シンシア叔母様は、今回の離婚に本当に反対しなかったのでしょう。陛下の提案をただ呑んだのだけわ」

当然よ、とお嬢様は続ける。

「だってそう教わっていたのよ。自分よりも上位な者に、逆らってはいけないと」

ぼさり、と後ろに倒れて、お嬢様は深く溜め息をついた。

お嬢様のおっしゃっていることは正しい。離婚を切り出した陛下。そのお方に縋り、離婚を止めてもらうには、シンシア様は育ちが良すぎた。

「お気の毒です、シンシア様が」

「ええ。明日は、レイ殿の戴爵式があるらしいわ。皮肉なものね」

……レイ殿？

聞き覚えのない人命に、私が首を捻っていると。

「陛下の従者よ」

とお嬢様が教えてくださった。

陛下の従者って、あの冷たい表情の方よね。美形だけど近寄り難かったわ。

「もう寝るわ。……リドニア、明日は頭痛がすごいと思うけど、我慢なさいね」

「……はい」

私は頷いた。お嬢様の部屋を出て、小さく息を吐く。

政略結婚で陛下に嫁ぎ、その後も夫に省みられず結局離婚。

シンシア様は、不幸……かしら。

あの方が幸せになればいいと、心から思った。

夜中の悩み（後書き）

ツールや他の使用人は一度屋敷に戻って、旦那様方の着替えや色々を運んだ……のではないだろうか。

従者の戴爵

「……………」

目を覚ましたのは、まだ真夜中とも言える時間だった。けれど、お嬢様とお話した時よりも少なからず時間は経っている。日が昇っていた。眠気よりも鈍い頭痛のほうが強くて、私はうずくまった。

外に出て、気分転換でもしようかしら。

目を閉じて、眠れそうにない。ただ無駄に時間を潰してしまえそう。ついでにどこから二日酔いの薬でも貰いましょう。

ベッドから足を下ろし、部屋履きを履く。箆笥まで歩いてから、その下に置いてある靴に履きかえる。お仕着せはどこかしらと思っていたら、綺麗に洗濯されたものが畳まれて、テーブルの上に置いてあった。

洗濯メイド（洗濯専門のメイドのことね）がやってくれたのかしら。手慣れた感じだもの。

ワンピースを脱いでそれに着替えると、私は部屋からでた。

城内は、適度に騒がしく、適度に静かだった。昼間に比べれば朝に相応しい静かさがあるけれど、それでも料理人の料理の下準備や、水を運ぶ下男の子音、洗濯メイド同士の話し声、馬の世話をする馬丁……。音に満ち溢れてる。まあ、それらの音が聞こえるのは私の借りている部屋が使用人用のものだからであって、陛下やお嬢様の部屋からは何も聞こえないのでしょうけど。

手の空いている下男や下女を捕まえて薬を貰おうと思っていたのに、私が見る限り暇そうなのは私だけだった。

……、あれは。

ふと窓から庭園を見て、私は立ち止まった。そこにあっただのは、他と隔離された花壇。植わっているのは小さな小さな薔薇よ。

「まあ……………」

小人薔薇よね？あれ。
自分の歓声が頭に響いて、私は頭を押さえた。

実際、その薔薇は小人薔薇だった。いえ、私にはそう見えたわ。
お嬢様がいればこの薔薇が小人薔薇か、もしくはそれに類似した別の薔薇か分かったかもしれないけれど、この場にいるのは私だけだったから。

緩く薔を開いた状態のそれは、屋敷にあるものよりも育っている。
お嬢様がいらつしやれば、きっと凄く喜ばれたわよね。後で教えて差し上げよう……。

「誰だ？」

しやがみ込んで小人薔薇を撫でていると、後ろから声がかかった。
「えっ……」

この時間に起きているのなんて、使用人くらいしかないわ。使用人の中でも、下位のほうの人達。だから、ゆっくり振り返って驚いたわ。

「レ、レイ、様！？」

そこに立って、私を見下ろしていたのはレイ殿……いえ、レイ様だった。今日をもつて爵位を戴爵するのなら、様をつけるべきよね？
「誰だ。見慣れない顔だが、新入りか？」

しやがみ込んでいたせいで、私のお仕着せが見えなかったらしい。
メフィス伯爵邸でのお仕着せと城で配られるお仕着せは全く違うもの。

「紛らわしいことをして申し訳ございません。私はメフィス伯爵邸より参りました、ルーシャンお嬢様の侍女をさせていただいている者です。リドニア＝ミュールと申します」

立ち上がったから頭を下げると、レイ様が私よりもかなり長身なことに気がついた。細身だから気がつかなかったわ……。

「ミュール？ミュール家か」

「はい」

さすが。ミュール家は王城でも有名らしい。一種の誇らしさを感じ、私の唇は自然と弧を描く。重く感じる頭が、一瞬だけ痛みを消した。

「レイ様、この度の戴爵、真におめでとうございます。我が主も、あのようなことがなければ祝したかったと申しておりました」

「離縁のことか……」

気づかれないようにその表情を窺ったけれど、レイ様の表情には何も映っていない。悲しみも怒りも、喜びも。

「私も、驚いている」

……そうは見えないわ。

レイ様は私の横に立った。すぐにどこかへ行くものと思っていたから、少し驚いたわ。レイ様のような人も、私みたいな小娘と話をしようと思うことがあるのかしら。

「美しい花ですね。小人薔薇でしょうか」

小さな花壇に小さな薔薇。

あんまりレイ様がじつと見つめているものだから、彼が世話をしているのかと思った。

「ミュール家は、草花にも精通しているのか？」

けれど、違うみたいね。

思わぬことを聞いた、という顔をされた。

「いえ……。主が、薔薇に詳しいものですから」

ああ、とレイ様は納得されたらしい。

「この薔薇を植えさせたのは、シンシア様とミーユ様だ。小人薔薇だと説明していただいたのだが、私にはよく分からない」

……お二人で？え、お二人は仲が良いの？

昨日、ティールー殿に教わった気がする。どのような状況で？何を教わったのかしら。

頭がぐらぐらする。重い……痛い。引っ掛かった何かは、掴む寸

前で指をすり抜けていく。

「ああ……君は知らなかったのか」

レイ様はあっさりと私に答えを差し出した。

「あの方達は仲が良いのだ。互いに妃になる前から　な　った後で
さえ」

胸が苦しい。忘れかけていた二日酔いが戻ってきて、私の頭を支
配する。

私が俯いていると、レイ様は私に手を向けた。

「二日酔いに効く薬だ」

「え……？」

「会ったら渡すように言われていたのだ」

粉の包まれた薄紙を受け取り、私はもう一度深く頭を下げた。

「ありがとうございます」

「酒を飲むのなら、自分を制御しろ。酒に吞まれる者は、真の意味
での使用人にはなれないぞ」

厳しい顔で私にそう言う、レイ様はどこかに行ってしまった。

何だったのかしら？

薬を持ったまま、私も水を求めて庭園から移動した。

薬を飲み、部屋に戻ってからぼーっとしていればお嬢様の起床時
間はすぐにやってきた。その頃にはかなり気分が良くなっていて、
私はいつも通りに過ごすことができた。

「あら。頭を押さえて苦しんでいるかと思っていたけど……大丈夫
なの？」

珍しく寝起きのよかったお嬢様は、開口一番そんなことをおっし
やった。

「はい、お嬢様。早朝にお薬をいただいたので、みっともない姿を
さらすことは避けられました」

顔を洗い、柔らかな布で拭く。お嬢様が少し残念そうなのは、私の気のせいかしら？

「残念だわ」

気のせいではなかった。唇を可愛らしく尖らせて、お嬢様は責めるような目で私を見た。

「弱っているリドニアを見れるのは、そんなときだけなのに……。私に許可なく薬を飲むのはお止めなさい」

お嬢様の可愛らしくも愛しい命令に、私は目を細めて頷いた。

「……本日の予定を申し上げます。本日は、レイ様の戴爵式に出席した後、旦那様が陛下との会談を行います。お嬢様は予定もありませんから、自由に過ごしてください構いません」

「シンシア叔母さんも、その会談に出席されるのかしら」

お嬢様の問いに頷く。原因でもあるシンシア様が会談に出席しないわけではないわ。

「ええ……恐らくは」

クローゼットからお嬢様のドレスを取り出し、お嬢様に着ていただき、その長い金髪を結っている時に、扉が叩かれた。

「ルーシャン様……失礼ですが、姉はおりますか？」

ロアの声。

お嬢様は私を見て、「いるわよ」とロアに答えた。

「失礼します」と言って、ロアが室内に入ってくる。

今はレディの身支度中なのよ？ 思いつきり軽蔑の目で見たら、ロアは怯んだように肩を竦めた。

「ティルーさんに頼まれたんだよ。ほら、二日酔いの薬」

ロアが突き出してきたのは、今朝私がレイ様にいただいたものと同じ粉薬。

「ティルー殿に？」

「そうだよ。苦しんでるだろうから、って」

そうなの、と思いつつ、何だが今ここで元気にしているのが悪いような気分になった。さすがに二つは飲まないし……どうしようか

しら。

私が躊躇っていると、ロアは強引に私に薬を受け取らせてすぐに部屋を出た。

残された私とお嬢様の間に、何とも言えない沈黙が走る。

「お優しいことね」

「お嬢様……これどうしましょう」

鏡の中のお嬢様と目を合わせると、お嬢様はクスリと笑った。

「次回使えるように、とっておけば？」

「お、お嬢様、次回などありません！」

とは言っても、捨てるわけにはいなくて。私はスカートのポケットに薬を滑り込ませた。

戴爵式なんて、そう頻繁に開かれるものではない。あつたとしても、陛下や国のために頑張った庶民が、領地を持たぬ一代限りの士爵位を賜るくらい。従者が貴族になるなんて、普通はないことよ。

聞くところによると、レイ様が賜るのは男爵位だとか。陛下のご意思は分からないけど、明確な理由のない戴爵は、あまり褒められたことではないと思うわ。……まあ、私が言うことではないけれど。謁見の間で式は行われる。大貴族と呼ばれているヒルドマン侯爵、メフィス伯爵、それから力のある貴族が並ぶ。爵位を賜る際に、その方々の許可が必要なのよ。大抵は許可するように仕組まれているけれど。

で、男爵位と領地を賜って、終了。

「……あ」

少し早めに用意して部屋から出ると、廊下でミーユ様と会ってしまった。

侍女とメイドを引き連れて、正妃らしく着飾り堂々とした態度で歩いている。歳はシンシア様よりも年下で、その身分から当時正妃

だったシンシア様を追い越して、正妃の座に収まった方。

私は、正直あまり好きではないわ。だって……どうしても、彼女がいなければシンシア様は幸せだったのではないかと思ってしまう。

「あらあ、ルーシャンちゃん？」

始めは私やお嬢様と同じように目を丸くしていらっしゃったけど、ミーユ様はじきに笑顔になった。まさか軽蔑されたり冷笑されたりするのでは、と思っていたわけではないけど、この笑顔には驚いた。「ミ、ミーユ様。お初にお目にかかります」

お嬢様は深く頭を下げた。私もそれにならって、最敬礼をする。ミーユ様はキョトンと私達を見てから、およそ王妃らしくない笑い声を上げた。

「あつははは！ルーシャンちゃんたら、顔を上げて。私達、初めましてじゃないのよ？」

「え？」

お嬢様は困惑した表情。でもそれは、私も同じだった。

一度でも言葉を交わした貴族は、絶対にそれを忘れてはいけない。それはお嬢様にも、そして侍女である私にも当然のことよ。自分よりも下位の人なら何とでもなるけれど。先日一緒に話した人に「初めまして」なんて言われたら嫌な気分でしょう？」

そして、こちらが忘れていた相手が大貴族とも呼べる方だったら笑い事じゃあ済まされない。

だから、貴族の方々は人の顔覚えるの早いわよ。私なんて、たまにこんながらがりそうになるけれど。

今のお嬢様と私の状況は……一番避けるべき事態。

「……と言っても、私がルーシャンちゃんと会ったのは、ルーシャンちゃんが生まれて、それをシンシアに自慢された時以来だから、覚えてないわね！」

しまった、という表情を浮かべていたお嬢様だったけれど、ミーユ様の言葉に、少し安堵した表情を浮かべた。私も、ほっと胸を撫

で下ろす。

「ところで　ルーシャンちゃんって、その子以外に使用人は連れ歩かないの？」

十人余りの侍女を引き連れたミーユ様が不思議そうに私を見る。たった一人の侍女（それに加えて若年）しか連れていないお嬢様が不思議らしい。

お嬢様はね、数より質なのよ！

と自分で言えるほど上質でもないかしら。

「ええ　最も信用できる者だけを連れようと思えば、自然とこうなっております」

お嬢様……！

あ。今、泣きそうだわ。

裏を読んだらミーユ様への厭味になりかねない言い方だったけれど。少しそれを考えてミーユ様を見ると、彼女は綺麗に表面しか見ていなかったらしい。

「そうね！素敵よ！」

と、楽しそうに笑っているもの。

「シンシア叔母様と、仲がよろしいのですか？」

私としてはミーユ様とはさつさと別れたかったのだけど、お嬢様はにっこりと微笑んで、ミーユ様と立ち話をする体勢をとった。

「ええ。シンシアとは、昔から仲がいいのよ！」

本当に元気な方ね。陛下は、ミーユ様のどこが気に入ったのかしら。

でも確かに、ミーユ様のような明るい方って、敵が少なそう。

レイ様もおっしゃっていたじゃない。ミーユ様とシンシア様は、昔からの親友だった、って。

「ルーシャンちゃんが生まれたら真っ先に自慢されたのよ？ローズちゃんに続いて、シンシアにはかり姪ができるんだもの。一人くらい私にもできたっていいのに、って思ってたけれど……」

ぺらぺらと息継ぎなしで話し続け、そこでミーユ様は言葉を切っ

た。嬉しくて堪らないという顔をしている。

そのシンシア様のことなんか考えないで。いい気なものね。
「リクトちゃんと結婚するなら、ルーシャンちゃんが私の姪になるのね。シンシアと家族になるのかわ！」

その喜びようは本物で。

なぜ友人であるシンシア様が人生で一番不幸かという時にミーユ様が笑っていられるのか、私は不思議でならなかった。

それじゃあね、とミーユ様と別れたら、時間は余裕を持って部屋を出た意味がない時間帯になっていた。余裕どころか、小走りで向かわないと危ないかもしれない。

「リドニア。入場は何時までだったかしら!？」

ミーユ様は、陛下と共に、戴爵式の前半で入場の場面があるからこんなに焦らなくともいいのでしょけど。お嬢様は一般席（といっても、見るのなんてほとんど貴族の方でしょけど）で観覧されるのだから、多少の気遣いは欲しかったわ!

私が時間を言つと、お嬢様は小走りだった足を止めた。

「お嬢様!？急ぎませんと、間に合いませんっ」

「近道があるのよ。こちらを通りましょう。じゃなきゃ間に合わないわ」

近道……？

首を傾げると、お嬢様は昨夜リクト様が教えてくれたのだと言つた。

「一度外へ出て、裏口から入るのですって」

「裏口……ですか？」

何となくの想像力がつく。謁見の間で何か起こった時用に作られている、言わば非常口のようなものよね。鍵はなくて、簡素な木でできている場合が多いと聞くわ。目立たぬ場所にひっそりとあるん

ですって。気にならないと言ったら、嘘になるけれど……。

「お嬢様、あまり使わないほうが、よろしいかと。あくまで災害用ですし」

「……そう思う？」

お嬢様も、薄々そう思っているんじゃないかな。眉を下げ、自信なげにそう言った。

「ええ。本気で走れば間に合いますわ。参りましょう！それに、いざとなれば参加などせずともよろしいではありませんか。相手はシンシア様を捨てる、憎き国王陛下とその従者なのですから！」

グツと拳を握って励ますと、お嬢様も笑って頷く。

「そうね。その通りよ。……でも、少しボリウムを落として。不敬罪で捕らえられてしまうわよ」

必死に走りながら、お嬢様は息を切らせて、戴爵式が終わったら裏口を探しに行きましょう、と私に言った。

……見てみたかったのね。

「そうですね……、ええ！行きましょう！」

私もお嬢様も普段運動なんてしないから、謁見の間に到着した時は、息も髪も乱れていた（お嬢様のは、私が直してさしあげたわ）。開かれた扉に入ると、すでに旦那様やヒルドマン侯爵はいらっしゃった。

「……ルーシャン殿！遅かったな」

最前列にいたリクト様がこちらに手を振った。いるのは貴族が過半数を占めていて、ルーシャン様を見ると少し場所を譲る。

「あ、姉さん」

「ロア……何であんたいるのよ……」

「ルーシャン様も、こちらへどうぞ」

人の間を縫うように進んで、お嬢様は最前列に収まった。私も付いていこうとしたら四方八方から睨まれて、少し遠くからお嬢様を見守ることにした。

それにしても、けっこう人が多いわね。やっぱり、陛下の従者が

戴爵、という理由が大きいのかしら。

「……どうも、リドニア殿」

「わっ！？ティルー殿！？」

至近距離から名を囁かれ、私の肩が跳ねた。

「こんなところから見るんですか？」

振り返ると、もつと前にいるはずのティルー殿。こんな後ろで何をしているのかしら。

「来たのが遅れたのです。幸い、リクト様とロアのおかげでお嬢様は前に行けましたから。私はここで構いません」

「こんなの、セール中の八百屋に比べれば閑散としたものです」

八百屋？

「もつと前に行きましょう。陛下を近くで見れますよ」

「あ、ちよつと！」

にやりと笑うと、ティルー殿は私の手を引いて豪奢なドレス（と言っても、貴族の普段着だけ）の間を抜けていく。

こんなことをして……主の名に傷がついたらどうするつもりなのかしら。

こう言っではなんだけれど、ティルー殿って使用人に向いていない気がする。

「あ、あのティルー殿……」

彼を止めようとしたところで、楽団の音楽が鳴り響く。騒がしくしていた人々はお喋りを止めた。

「始まりましたか？」

「ええ……恐らく」

扉の側に控えていた騎士や兵士が最敬礼をし、旦那様やヒルドマン侯爵、他の権力のある方々が顔を強張らせて頭を下げる。

その敬意を一心に浴び、赤い絨毯の上を、ゆったりと歩くのは陛下よ。その後ろからミーユ様と、シンシア様が続く。

シンシア様の離婚騒動を知っているのは昨日、彼女の誕生会にいた人だけ。そう理解しているはずなのに、私は、何事もなかったか

のようにミーユ様に続くシンシア様に違和感を覚えてしまった。

「普通そうですね」

「そうね」

思っていたことが真横から言われて自然と頷く。返してから、敬語を使わなかったことに気付いたけど……、

「ですよねえ」

ティルー殿も気付いてないみたいだから、いいかしら。

陛下が玉座に座り、その横にミーユ様が座る。その二つに寄り添うような場所にある椅子に、シンシア様が腰掛けた。

そして最後に 主役が登場する。

礼服に身を包んだレイ様が静かに玉座に歩みより、数メートル離れた場所でひざまずいた。

「リドニア殿、レイ殿の戴爵の理由を聞きましたか？」

「いいえ。ティルー殿はご存知ですか？」

「どうか……理由なんてあったのね。」

「なんでも、隣国との和平の条約を好条件でまとめたらしいですよ隣国？と聞き返せば、ティルー殿はその国名を教えてください。触れたら切れそうなの……というほどではないけれど、グウィリー王国と緊張体制に入っている、と言われている国。」

「その褒美に男爵位……ですか」

確かに、手柄と言えば手柄だけど。少し、過剰じゃないかしら。私の気のせい？

「これより、レイ＝ミラードの戴爵式を行う」

国王陛下の声が響いた。

強制・ティーパーティー

戴爵式は滞りなく進んだ。

早く終わらせたいのね、と分かる者には分かる態度で旦那様はレイ様の戴爵に許可を出していたし、ヒルドマン侯爵も特に異議を唱えたりはしなかった。

レイ様の戴爵の理由は、確かにティルー殿の言う通り和平の条約の件だった。誰か何か言うんじゃないかと思っただけで、特にそれに対して文句を言う人はいなくて、レイ様は陛下より男爵位と海沿いにある、空気の綺麗な土地を領地として賜ると式は無事に終了した。

「リドニアっ」

義務は終えたとばかりに、お嬢様は笑顔で私に駆け寄ってこられた。

「ティルー。お前、いつの間にかいないと思っただら……」

当然のようにお嬢様の隣に立ったリクト様はティルー殿を怒ったように睨んだ。

「ポツンとリドニア殿が人込みに埋もれていらっしやったので」

「私のせいですか？」

「違いますか？」

「違うわよ！」

そう言い返そうとしたのに、リクト様の後ろから出てきたロアが「後ろつまってるから。歩いて」と急かすものだから結局言い返せなかった。

謁見の間から出ると、ロアはルドルフ執事の元に行く、と言い出した。

「え。ロアくん、会談に参加するんですか？」

意外にも、一番驚いていたのはティルー殿だった。

何でそんなに驚くのかしら。

「そんなに意外でしたか」

少々大袈裟な態度に、ロアも苦笑した。

将来執事になるロアがルドルフ執事に付いて勉強するのは、有り得ないことじゃないわ。こんな、一生の内に立ち会えるかも分からない会談を実地で見るなんて執事候補からすれば嬉しいことかもしれない。

「あ、いえ。そういうわけではないのですが」

失礼な態度だったかと慌てて否定するティルー殿。リクト様は笑ってティルー殿の肩を叩いた。

やっぱり。まるで友人みたい……、と私が思っていると。

「はは、だから、お前もついて行けばよかったんだ」

リクト様の言葉に、私とロアは顔を見合わせた。

「ティルー殿も誘われていたのですか？」

「ええ……まあ」

「……何がおかしいの？リドニア」

お嬢様は不思議そうにされてらっしやるけれど、陛下も出席される会談に執事以外の使用人を連れていくことなんて、そうそうないの。連れていくとすれば、ロアみたいに次期の執事にしようと思っている者ね。それ以外は思い浮かばない。

だから聞いたのだけど。

「では、ティルーさんは執事になるんですか」

仲間ができたばかりに、ロアは喜んだ。何がそんなに嬉しいんだか。

「あ、いえ、そういうわけでは……」

歯切れ悪く、ティルー殿はごにごにとそれを否定する。

そうですか、とロアは暗い声をだして落ち込んだようだったけど、小走りで旦那様やルドルフ執事のいる方へ走っていったわ。

お嬢様に予定がないことをリクト様に言ったら、リクト様も今日は予定がないと教えてくれた。

「リクト様。わたくし、リクト様に教えていただいた裏口を探そうと思ってますの」

王城の庭園。小人薔薇があることを教えてさしあげたら、お嬢様は歓声を上げて喜んでくださった。

薔薇を撫でたり突いたりしているお嬢様を優しく見守りながら、リクト様は「そうか」と言った。

「王城の裏口は、俺もよく分らないんだよな……」
「そうなのですか？」

お嬢様はキョトンとした顔でリクト様を見る。教えてくれたのだから、当然知っていると思っていらっしゃったみたい。私も、リクト様は知っているのだと思ってた。

信憑性のない噂をお嬢様に教えないでほしいわ。

こっそり睨みつけると、リクト様は苦笑いして私を見返した。

「……いや、あるにはあるらしいんだが、陛下が使用禁止にしているらしい」

陛下が。何故？

裏口を使用禁止だなんて。裏口なんて、使えなきゃ意味ないじゃない。

リクト様も頭に手をあてて、詳細は知らないようだった。

「お嬢様、どうなさいますか？」

存在も確信できなくて、陛下が使用を禁止しているようなものを探すのは、あまり有意義とは言えないと思う。お嬢様がどうしてもとおっしゃるなら探すけど。

「んー……」

探したい、とお嬢様の顔にははつきりと書かれている。

けれど、裏口探しを私やリクト様が良く思っていないのを分かっているから言い出せない……、そんな感じ。

「お嬢様。探しましょうー！」

「氣遣ってもらうのは嬉しいけど、私は何でも命じていただきたい。使用人に気を遣う主なんて、変なもの。」

「リクト様はわずかに眉を寄せ、お嬢様は嬉しそうに表情を輝かせ、
「ですよーね！そうしましょう」

「ティルー殿も手放して喜んだ。」

「なんでティルー殿が喜ぶのかしら。」

「私も興味があつたんです。ご一緒しても構いませんか？ルーシャン様」

「待った。お前が参加するなら俺もするぞ」

「何となく皆で顔を見合わせると、お嬢様は「全員で探しましょう」と最善策を提示した。」

裏口を探すと言っても、何の情報もない状態で、この広大な庭園にある小さな入口を探すのは骨が折れる。手当たり次第に探すのではなく、あやふやにでも見当を付けよう、とのことになった。

「裏口とは、謁見の間の近くと繋がっていることが多いと聞きますわ」

「では……東側ということか」

「でも、繋がっているというのは、隠された道ということですか？なら、一概にそうと言いきれないのでは？」

「暇そうにしていらっしやるお嬢様には申し訳ないけれど、片っ端から探していったら、絶対に今日中に終わらない。少しでも範囲を狭めないと！」

結局、謁見の間の近くにあるだろう、という私とリクト様の案が可決された。ティルー殿も裏付けがあつて渋っていたわけではなかったらしく、押しが弱かったの。

「……では、主にお城の東側を重点的に探すということで、構いま

「せんね？」

「ああ」

「そうですね」

三人の意見がまとまり、ようやく私は手持ち無沙汰だったお嬢様に声をかけた。

「お嬢様、お待たせして申し訳ございません」

「やっと話し合いは終わったの？」

庭園の花を眺めていたお嬢様が、疲れた表情で顔を上げる。

「はい。東側を探しましょう、ということに決まりましたわ」

「そう」

それに異議を唱えることなく、お嬢様は軽く頷くと「じゃあ、」と話を続けた。

「移動しなくてはならないわね……ここは東側でないから」

「そうなりますね。参りましょう」

難しいことは忘れて、今は子供のように遊ばせて差し上げたい。

……いえ、私も遊びたい。

お嬢様を先頭に、私達はそこから移動した。

この辺りかな、とまたまたアバウトに判断して、お嬢様の裏口探しは始まった。

始まったと言っても、ドレスを着てらっしゃるお嬢様が走り回ったりできるわけもなく、壁沿いにゆっくりと歩きながら庭園を見て歩く感じ。

「さすがに王城ほどの広さがあると、庭園の維持も大変だろうな」
目を輝かせて壁を見るお嬢様とテイルー殿とは違って、リクト様はそこまで興味津々というわけではないみたい。

庭園を見ながら私に話しかけてきた。

「そうですね。しかし、この広さだと庭師も数人雇っているのでは？」

「まあ、ここはな。統一性を保つために、庭師は一人と決めている、という王城もあるらしいが」

王城の庭園を一人で！ ぞっとしないわ。

というより、無理じゃない？

そう言おうとしたら、「あらあ！」と無駄に明るいついに遮られた。
「ルーシャンちゃんじゃないの！偶然ねっ」

……。

声にした方を見れば、そこには。

「伯母上？」

リクト様の伯母様……つまり、ミーユ様がそこにいた。
共も付けず、ただ一人で。

偶然会ったというには、あまりに不自然な。

待ち伏せ……なんてしないと思うけれど。

「このようなところで、何を？」

リクト様も、私ほど悪意に満ちた想像はしていないものの、多少違和感を感じていらつしやるみたい。

ふう、とミーユ様は長く息を吐き出して私達を見た。

「私ね、この辺りでお茶会をしようと思っているのよ。貴方達もどうかしらと思って。ね、いいでしょう？」

につこりと微笑んだミーユ様の言葉に、疑問を持ったのは私だけではないと思うわ。

「お茶会……ですか」

「ええそうよ！ あ、ここよー！」

ミーユ様が背伸びをして、私達の後ろに向かって手を振った。

振り向くと、そこにはテーブルを持って走る召使と、椅子や手籠を持って走るメイド。それから数人の侍女が、やはり小走りでごちらへ向かって来ていた。

「な、なに……？」

お嬢様が私の側にきて、怯えるように私の手を掴んだ。

答えを持たない私は、お嬢様を隠すように前に立ち、黙って彼らが到着するのを待った。

「ミ、ミーク様……！」

すぐに到着した召使は、持っていたテーブルをその場に置いて、息も絶え絶えにミーク様の名を呼んだ。でもそれは、ミーク様に呼び掛けたというよりも、ただ声を出しただけみたい。ミーク様はそれに返事をしなかったし、召使も再度呼ぶようなことはしなかった。皆、ご苦労様！ここにセツティングしてちょうだい」

「こちらにですか？」

召使が戸惑ったような声を上げる。

無理もないわ。普通、こんな城壁沿いでお茶会なんてしないもの。日当たりも良くないし。

召使は戸惑いつつも、その場にいる全員の視線を浴び、あたふたとテーブルを一度持ち上げてから平らな場所に設置しなす。メイドがそこに椅子を置いて、手籠の中からテーブルクロスを取り出してテーブルに敷いた。

一連の動作には無駄がなく、こんな時でなければ見惚れていたかもしれないわ。

「ふふ」

ミーク様は満足げに笑うと、椅子に腰掛けた。

「ねえ、椅子を二つ、新たに持ってきてちょうだい。それと、紅茶とお菓子もよ？」

メイドと、数人の侍女の内の二人が返事をして、もと来た道を戻っていく。

私は何も言えず、立ち尽くしたままそれを見守っていた。

「ちよつと待っててね」

声をかけられたお嬢様が、びくりと震えた。

少しして、椅子を二つ抱えたメイドと、紅茶のポットとカップ、お菓子の乗ったワゴンを引く二人の侍女が現れ、その全ての設置

が終了したとき、彼らの表情は晴れやかだった。

「……………」

この様子だと、こんなところでお茶会を開く予定なんて全くなかったのね、きつと。

「さ、ルーシャンちゃん、リクト、座ってちょうだい！」

「あ、あの……………」

断ろうにも、自分よりも高位のミーユ様には逆らえないお嬢様。私の手を掴みながらリクト様に助けを求めるような視線を投げかけた。

「伯母上、申し訳ありませんが、今は俺もルーシャン殿も予定がありません」

そんな視線に応えるように、リクト様はお嬢様の前に出た。

「予定？何かしていたの？」

「ええ。庭園を探索しておりました。伯母上は、庭園に裏口があるのをご存知ですか？」

リクト様がそう言った瞬間、ミーユ様の表情が強張った。

「知らないわ！」

その場の空気が凍りつく。

主の命令を遂行して得意げだった使用人達も、私達も、何事かとミーユ様を見る。

ミーユ様は自分を取り乱したことを隠すように唇を歪め、あはは、と軽い笑い声を立てた。

「………… お茶会に付き合いなさい。それとも、私の言うことが聞けないの？」

それは、明らかな命令だった。

「このようなところで、お茶会ですか」

ローズ様の開くお茶会が無礼講・ティーパーティーなら、これはさしずめ強制・ティーパーティーね。……なんて思っていたら、突然聞き慣れた声がした。

そちらを見ると、マリア侍女長とシンシア様が連れだって歩いてきていた。発言したのはマリア侍女長。

「マリア侍女長……！」

その組み合わせに、私は声を上げてしまった。

だって、驚いたのよ！

マリア侍女長は、あまりシンシア様に关心がなさそうだったから、マリア侍女長がシンシア様の侍女だった頃を私は知らないから、二人が並んでいるところを見ると変な気分になる。

どんな会話をするのかしら。

「あ、シンシアじゃないの！」

盛り下がっている雰囲気の中、一人ハイテンションで紅茶を飲んでいたミーユ様は、シンシア様にも笑顔を見せた。

「ミーユ。ずいぶんと若い子に囲まれているのね」

あからさまに沈んだ表情を浮かべるお嬢様を見て、シンシア様は苦笑される。

「ふふ。ルーシャンちゃんとリクトが結婚したら、いつでもこんなお茶会が開けるのよ。楽しみね。貴女も羨ましいでしょ、シンシア？」

「そうね。羨ましいわ」

淡い笑みを浮かべるシンシア様。

ぐいっと紅茶を飲み干すと、ミーユ様はニヤリと笑ってから言った。

「会談は終わったの？」

「お、伯母上！？」

お嬢様同様ぐったりとしていたリクト様が、信じられない！とでも言うつような目でミーユ様を見る。

そう、信じられないわよ！

なんて無神経な方かしら。よくも当事者であるシンシア様に「終わったの？」なんて聞けるわね！

「ん？どうしたの、リクト？」

「いえ……伯母上のその発言は、その、あまりに無神経かと……」

ミーユ様はその言葉に目を丸くした。

「あ、えっと。そうなるかしら、シンシア？」

「……そうねえ、わたくしに失礼かしら。マリア？」

国の女性の最高権力者二人に問われているというのに、マリア侍女長は澄ました顔で「ええ、恐らく」とあまり考えずに答えた。

年上三人組は彼女達にしか分からない空気で冗談を言ったり笑ったりし……マリア侍女長が私のジツトリとした視線に気付いてそれは中断された。

「ルーシャン様、リクト様。失礼しました」

「あ！そうね。ごめんなさい、お茶会になんて付き合わせて」

ミーユ様も、マリア侍女長に合わせるように謝ってくるけど。だつたらやるな、って感じよね。

「ねえシンシア。ルーシャンちゃん達、城の裏口を探しているのですって」

「そう……裏口を。確か、使用を陛下が禁止されてたわよね」

「叔母様はどこにあるのか、ご存知ですか？」

シンシア様は、お嬢様の質問に「知らないわ」と残念そうに首を振った。

ロアによると、会談は平行線をたどって、結局明日に持ち越されるらしい。

会談に参加したのは陛下と旦那様に奥様、それから、次期メフィス伯爵位を受け継ぐリジン様と、その婚約者であり次期メフィス伯

爵夫人であるローズ様。

それから、ミーユ様のご実家であるヒルドマン侯爵家の当主夫妻。本来なら奥様方は参加されないのだけれど、事の内容とシンシア様が女性であることが考慮されて、参加を許されたのですって。

「聞いて驚くなよ、姉さん？……なんと、シンシア様は参加されなかったんだよ」

「え。そうなの？」

ロアは、就寝時間少し前に私の部屋に訪ねてきて、ぺらぺらと報告をしてくれる。

会談に臨む前に、公言しないことを誓う儀式のようなものをする、って聞いたことがあるけど……いいのかしら。

「ああ。俺も、当然シンシア様は参加されるものだと思ってて。驚いた」

広くないベッドに姉弟並んで座り込んで、話し合う。ロアが帰ってきた日と似てるわ、と思った。

「それで、つまり要点は、シンシア様と陛下が、夫婦だったというところにあるんだよ。つまり、関係を持ったということだろ？そもそも、王族と離婚した者は再婚の権利がないからな」

報告をできとくに受け流しながら、私が思い出すのはあの日の、真剣な表情のロア。

話があると言っていたけど。

「旦那様は、離婚を中止させたいわけだろ？ま、俺もわざわざ離婚しようとする陛下のご心中は分かんないけど……。つまり、旦那様の主張は、シンシア様に手を出した陛下が、一方的に離婚を決めるのはあまりに無責任な行動ではないか、という感じだな。おい。聞いてるか？」

「……えっ？」

私が聞いていなかったことを知ると、ロアは舌打ちして、最初から語ってくれた。

今回は話に集中し、私も無駄なことは頭から追い出す。

「そもそも、陛下はどうしてシンシア様と離婚しようとなさっているのよ？」

初歩の疑問を投げかけると、ロアはよくぞ聞いて下さった！とばかりに私の肩を叩いた。

「そう！それを言わないんだよ。これは余の独断である、ってそれはつか。今日の会談を見る限りでは、旦那様が勝っているように見えただけ」

旦那様の強みは、離婚の理由がはっきりしないこと、シンシア様が離婚後に再婚の権利を持たなくなること、そして、これが一番大きいと思うけど……、婚姻の儀式を交わし、初夜を迎えたことではないよね。

それは法律でも定められているから、王族特有というわけではないけれど、如何なる理由であっても二人は夫婦だゝみたいなことを誓うらしいから。

それに対し陛下の強みは、シンシア様が同意していることと自身が最高権力者であるということかしら。いざとなれば、命じればよいのだからね。

そうすれば逆らえる人はなくなるのだから。

「どっちも微妙ね……」

というのが私の答え。

確かに、陛下と旦那様が同じ立場なら旦那様が勝っていたかもしれないけど。

「そうかな？俺は、旦那様が勝つんじゃないかと思ってるんだけど」

「あんたは、根本的に間違えてるのよ。陛下は、国王なのよ」

切り札を持つてる。理屈なんて必要ない。

国王の命令。

それだけで、皆は文句を止めて従うことでしょう。

強制・ティーパーティー（後書き）

サブタイトルを考えるのが、楽しくもあり難しくもあり、という感じ
です。

真剣に三十分くらい迷いました。

使用人達の追跡

ヒタリ、という音で、目が覚めた。

最近、私には睡眠運（恋愛運とか、そういうの）がないらしい。毎回変な時間に寝たり起きたりしてるわ。変な癖がついたらどうしよう……。

どんなに遅く寝ても、決まった時間に覚醒する癖がついている。まだその時間じゃないことを知って、身体が傾いた。

まだ眠い。朦朧とする意識の中、耳に微かな音が入り込む。

……ヒタリ……ヒタリ……

「……………」

身体がベッドにつくまえに、ガバリと起き上がる。

音は、扉の外から。これは 足音よ！

毛布の温もりが、一気に遠く感じられる。温かいのに寒い。そんな感じ。

動きを止めた私を支配しているのは、最早睡魔ではなく、恐怖！眠気なんか一気に覚めたわよ。

自慢じゃないけれど、私は、幽霊とかってあまり得意じゃない。だって怖いじゃない、対処方もないし！

普段なら発揮されないような想像力が二割増しで発揮され、部屋の向こうを想像してしまう。

何かしら。誰？人？人よね！？

ヒタ、ヒタ、と足音はどんどん遠ざかっていく。心臓は、自分で分かるほどに騒いで鼓動を打っている。

怖い。けど、気になる。

ゆつくりと毛布から足を出し、地面へ降ろした。靴を探して履く。毛布が地面へ落ちた音が暗闇に響き渡る。身体がビクリと震えた。泥棒のように足音を立てないよう、そろりそろりと床を歩いた。扉まではそう遠くもなかったのに、床を少しずつ歩いているとかなり遠く感じられた。

カチャリ、ノブを触った音に、肩が跳ねた。幽霊とか関係なく、もはや音が怖いわ。

そつと回し、扉を内側に引くと。

「……っ」

「っ！？ひゃあむぐぐ……！」

だつ、だつ、誰かがいた！

いえ、いたと言うか……まだいる。

私の意思とは関係なく、生理的に出た悲鳴。誰かの手が口を覆ってそれを防ぎ、私はそのことに、さらに恐怖を募らせる。負の連鎖って言うのよね、こういうことを。あれ違う？

バタバタと暴れる私を羽交い締めにして押さえ付け、口を塞ぐ。

「っ！ちよっ………！」

「静かにして下さい、リドニア殿っ！」

「………む？」

耳元で、それこそ静かに囁かれた言葉に私は動きを止めた。抑えて、ほとんど音にならない声だけど、この声って、

「……ティルー殿？」

「そうです」

ピタリと動きを止めた私から、その人……ティルー殿は怖々と離れる。

「騒がないでくださいよ？」

………なんだ。

………ティルー殿だったの。

ティルー殿が離れた途端、私は支えを失ったかのようにズルズルと廊下に座り込んでしまった。

恐怖で、身体が小刻みに震えている。

「……ティル―殿も、足音で起きたんですか？」

「ええ、そうです。大体、驚きましたよ……あれ？」

文句を言っていたティル―殿は、座り込んだ私を見下ろした。驚いたように目をしばたかせる。

「何してらっしゃるんですか？」

「いえ、別に」

怖かったなんて、絶対言えないわよ……。

「気になりませんか？あの足音」

「いえ、気になりません」

気持ちとしては、さっさと部屋に戻って寝たい。でも、全身が震えて立てない。どれだけ驚いたのよ私！

「追い掛けてみましょうよ」

ティル―殿は急かすように私の腕を引っ張った。座り込んだまま拳手するような形になる。

「行きたければ、お一人でどうぞ」

「えーでも、今の、えーと、……マリア侍女長……ですよね？」

……。

「母様……？」

リドニア殿のお母上なんですか？とティル―殿が言った。そういえば、言っただけだったかしら？

こんな夜更けに、母様が？

考えられるのは、お手洗いかだけど、母様の部屋からならこちら側に来るのは変よね。お手洗いは向こうの、私の部屋とは真逆なもの。

真剣に考えてから、ハッと気付く。

……何が悲しくて真夜中に母親の後を追わなきゃいけないの。面倒臭い。

うんざりと睨んでやると、ティルー殿は粘り強い説得を試みる。粘り強いっていうか、ただ単にしつこいのよね。

「それに、礼服を着てたんです。礼服を！」

「礼服？」

「そうです」

私の食いつきに、満足げに微笑むと、彼は言った。

「まるで、貴族や、国王陛下に謁見するような」

「……謁見って、」

「気になりますよね？」

「……」

さっきは気にならないなんて言ったけど……礼服を着ていたなんて言われれば、気になるに決まってる。長々と話しているせいで目も覚めてきたことだし。

私の無言を、ティルー殿は肯定と取ったらしかった。

「気になりますよね？行きましょう」

「あ、ちよつと！」

引きずられそうになりながらも、私はティルー殿を突っぱねた。

「待ちなさい！私達は使用人ですよ？変なことに頭を突っ込むのは、あまり褒められたことではありません！！……むぐぐ」

「だから黙ってくださいって。　　そういえば、何で立たないんですか？」

なかなか立ち上がらない私を見下ろして、ティルー殿が言った。

「……力が入らないんですっ」

そう言えば、目を丸くして私の身体を起こしてくれた。

「ありがとうございます」

「いえいえ、はい、行きましょう」

ティルー殿は私の腕を掴み、まるで連行するみたいにその場から移動しようとした。

だから、何で行くのよっ！

そう抵抗しようとする

「あ、少し待ってください」

ふと振り返り……私を見た。私がティル―殿の顔を見ても、目は合わなかった。それに気付いたところで、同時に、私はこの暗闇に目が慣れていることを自覚した。

ティル―殿は素早く自分の部屋に入る。私は廊下でぼつりと一人きりになった。

「……………」

何で私、起こしてもらってお礼言ったのかしら……。ティル―殿のせいで立てなくなったのに。

「戻ろう」

クルリと振り返り、私は自分の部屋に戻った。

礼服を着て、深夜に部屋を抜け出した母様。いきなり離婚された、母様の元主、シンシア様。様子が変わったミーユ様に、離婚の理由を言わない陛下。

変なことばかり起こるのは、ここが王城だからかしら。王族なんて、貴族よりも理解不能な方々だから。

……………けど。

使用人は全てを見て見ぬふりをしないと。それが有能な使用人の証。ティル―殿みたいな不思議に思っ即行動なんて、無能な使用人のすることよ。一番嫌がられるタイプ。

それより、どうしてヒルドマン侯爵はあんな駄目な侍従を雇い続けているのかしら！それが一番の謎よ！！

「あーちよっと、何戻ってるんですか」

「い！？な、ノックも無しに女性の部屋の扉を開けるなんて、信じられな……むぐぐ」

「黙ってくださいと、何度言えいいんですかね。行きますよ」

信じられないことに、部屋に乱入してきたティル―殿。私の腕を掴んだままズルズルと……ということはなく、グイグイと引っ張ら

れる。

「ちょ……、痛、痛いですから！離してください」

「じゃあ来ますね？」

「……はあ、分かりました……行くだけですよ？」

根負け、した。

「つくしゅ！」

耐え切れないほど寒いということは無いけれど、真夜中の廊下は肌寒い。私は上着の前を合わせ直した。

ティルー殿が部屋から持ってきたのは、今私が着ている上着。あの時私が着ていたのって、寝間着だったのよ！それに気付いたティルー殿が、寒いだろうからって上着を貸してくれたの。

「いませんねえ、マリアさん」

「いつの間に人の母親とさん呼びする仲になったんですか」

……ひたひた……ひたひた。

二人分の足音が、空間に浮かんで跳ね返る。歩いていても腰が引けて、ティルー殿のようにキョロキョロと周りを見渡せない。窓の外なんて見て、何かがいたらどうするの。

「同じ職場でもないのに、侍女長と呼ぶのも変でしょう？だからと言って、リドニア殿のお母上、と呼ぶのも面倒です」

「貴女がマリア侍女長の名を呼ぶ機会など、そう何度もないでしょう」

ティルー殿の半歩後ろを歩く。

……と、ティルー殿が立ち止まって振り返った。

「リドニア殿」

「は……はい？」

「どうしてマリアさんのことを、マリア侍女長と読んだり母様と言ったり変えるんですか。変ですよ」

グイツと手を伸ばされ、掴まれたのは。

恐怖が吹っ飛んだ。頭の中が真っ白になる。

「えっ……ええ？ちよつと、」

変と言われたことに対して抗議しようとしていた口は、全く別のことを言う。幼い子供のように、繋がれた手を見つめる。何のつもりなのかしら。

ティルー殿は、別段気にする様子はなく、手を繋いだまま歩きだした。グイツと先程よりも早い歩調に、繋いだ手を中心に私もつられる。

驚いて離そうとすると、チラリと見られた。

「離さないでください。リドニア殿の歩調は、正直遅いです」

……遅いつて。

……それだけ？

それだけだった。

ティルー殿はそれきり無言で歩き続け、私も同じ速さで歩く。特に気まずさは感じなかったけど、私は先程話していた母様の話題を続けることにした。

「母様の呼び名のことですが」

「え？ああ、はい」

「仕事の時と私的な時で呼び名を変えているだけです」

これは別に、私達ミュール家に限られたことじゃないわ。親族が同じ職場になったら、誰だってそうすることでしょう。

それを言えばティルー殿は、きよと、と私を見る。初めて知りましたくみたいな顔をしている。

「そういうものですか？」

「そういうものですよ。ティルー殿だって、もしもご両親が同じ職場にいたらそうしますでしょう？」

「……さあ……。どうでしょう」

「……、……も、」

「も？」

「あ、いえ」

もしかして……ご両親がいらっしやらないんですか？なんて。そう聞いてしまいそうになるほど、ティルー殿はぼんやりと首を傾げたから。まるでそんなこと、考えたこともなかったみたいに。

よりにもよってそんな時、街でスリをしていたと言うティルー殿が思い出されてしまう。彼はもしかして、私の想像も及ばないような人生を送ってきたんじゃないか……。

私の、不安そうな表情が伝わったのかしら。ティルー殿は繋いだ手の力を強めて、歩みを早くした。

私とティルー殿は、家族のことや過去を話し合う仲じゃない。ただだんに、主が婚約をしたという関係。それを思い出した。

「変なことを言い出して、申し訳ありませんでした」

「いえ、リクト様とルーシャン様がご結婚されるば、僕とリドニア殿も顔を合わすことが増えるでしょうし。仲良くしましょう」

「……あつ、だから私を無理矢理連れて来たのですか？親交を深めよう？」

「いえ、まあ……。一人より二人のほうが楽しいかなと思ひまして」
ヒタヒタ、ヒタヒタ。

何となく恐怖は薄れていく。

お嬢様や旦那様と歩く時みたいに、足音などの所作に気を遣わなくていい（って言っても、私はたとえ一人でも、だらし無い動きはしないわよ？）。

手を繋ぐことへの恥ずかしさはなくなつて、導かれるままに歩いていた。

「ね、リドニア殿。楽しいでしょう？」

「……普通です」

楽しいなんていうことは、断じて、ない。

……ただ、居心地は悪くないけれど。

暴いてはいけない秘密

静かで神秘的……いえ、音のない、不気味な空間を、私とテイル殿は進んでいく。彼は暗闇に対して恐怖を感じないようだったけれど、私は、テイル殿の立てた音でさえ内心悲鳴を上げてしまう。ゆっくり進んでいくと、段々と目も慣れてきた。気を紛らわすために壁や絨毯を真剣に見つめていると。

「ん？ リドニア殿」

「え、あ、ど、どうされました？」

「いえ……向こうに、光が見えませんか？」
「光っ？」

ビクリと肩が跳ねた。だって、怖いんだもの！

テイル殿が指差しているのは、廊下の壁にある、窓の外。暗闇の中、光を見つけるのはとても簡単だった。

目をこらす必要なく、私の目は、それを捕えた。

……。 ……確かに、何か、光が動いてる。見たところ、あれは火ね。わずかに風で揺れてるもの。

まさか、とテイル殿を見ると、彼は窓の鍵に手をかけた。

「行きましようか、リドニア殿」

「…はい」

ガラリと窓を開き、テイル殿は私に窓の枠に足をかけさせると、持ち上げるようにして外に出した。目が慣れているとは言え、ここは闇の中。足が地面に触れた時にはホツとしたわ。

その後テイル殿が身軽に窓から外に出てきた。

そして再び、揺れる火を追う。

火は迷いなく、城壁に沿うようにして庭園を進んでいった。

ここまで来たら引き返すのも馬鹿馬鹿しいわ。私も、足音を立てないようにしてそれを追っていた。

「……あれは、母様でしょうか」

火を目で捕らえながら言えば、傍らでティル―殿が肩を竦めた。

「分かりませんが、恐らくは」

「こんなところで、何をするのでしょうか？ シンシア様が傷心の時に、不謹慎だわ」

母様はもう、シンシア様の侍女ではないかもしれないけれど。でも、だとしても一度でも主として仕えた方が不安を感じていたら、私だったら傍で支えたいと思うわ。

母様にも、そんな風に考えてもらいたい。

そんなことを思っていると、ずっと前を歩いていた火が、ピタリと止まった。城壁の前だった。

……私やお嬢様が、ミーユ様にティーパーティーに参加させられた場所の、すぐ近く。

そつと近づき、木の陰からそれを見つめっていると。立ち止まって何かをしていた母様（？）が、火をこちらに掲げて振り返った。

「……っ！」

「しっ、静かに……」

ティル―殿が、私を抱き寄せるようにして木陰に入る。そんな状況でもないのに、私の頬がわずかな熱を持った。

……照れてる場合じゃないのに！

もしも追跡なんかしていたのを母様に知れたら、かなり叱られてお嬢様の侍女を外されてしまうかもしれない。

少しの間、母様は振り返っていたけれど、すぐに前を向いた。

キィ、と弱々しい音がして、火が、消えた。

「消え……ましたね」

「行ってみましょう」

「ええ」

小走りで向かうと、そこにあるのは城壁だった。

ここで消えたのよね？

ペタペタと壁に触れて辺りを見回していると、「リドニア殿！」と隣から鋭い声がした。

「ティルー殿。何かありましたか？」

「見てください、この扉。……『裏口』じゃないですか？」

ティルー殿に近寄る。

そこにあるのは、古ぼけた木の扉。固いもので殴れば、呆気なく壊れてしまいそうだわ。

「裏口！？これが？」

錆びかけたノブを握り、捻ったけれど、ガチツと金属がぶつかる音がして回らなかった。

「……鍵が……」

「きっとここですよ。開きませんか？」

私が、鍵がかかっていることを身振りで伝えれば、ティルー殿が扉の前に立った。

少々強引に扉を揺ると。

バキッ

「あ」

「ああっ！！何ということ……！！」

わ、割れた！扉が壊れた！

走って逃走したい思いに駆られながら、私は扉を見る。鍵はかかったままで、扉だけがティルー殿の乱暴な扱いに耐え切れなかったみたい。

「リドニア殿、奥に通路が」

「貴方ね、何考えてるんですか！と、扉が……扉が壊れて、あ

あ、もう終わった……」

「行きましょうか」

捕まって、死罪になるんだわ。裏口を壊した罪で。

手を引かれて、引きずられるようにして、私は裏口から中に進入した。

裏口の中は、薄暗い闇で覆われていた。微かに明るいののはきつと、壊れた扉から注ぐ月光と、それから奥に続く通路のどこかに、光源があるからだと思うわ。

彼に妥協して着いて行った私の浅はかさに絶望しながら、私は中を歩いていく。

早く帰りたい。

もう母様とかはどうでもいいわ……帰って、残りすくないこの生を、謳歌したい。

「ね」

「は、……………す」

微かな、本当に微かな声が聞こえた。私がそれをティル―殿に伝える前に、彼は歩く速度を落として、私にもそうするように指示した。

「……………行きましょう」

とても小さく囁かれる言葉。

「分かりました」

同じくらいの音量で返して、壁に沿うようにして歩く。

通路の壁に、扉らしきものは無かった。

その代わり 通路の最奥に、扉がある。

中からは、先ほどよりしっかりと声が聞こえてきた。

「……………今日で最後ね」

「ええ」

「また会えればいいけれど」

！

この声。聞き違うはずはないわ。

隣を見れば、ティル―殿も目を丸くして、驚いている。

……この声は、シンシア様とミーユ様。

どうしてお二人が、こんな場所に。

「ティル―殿、ここで引き返しましょう……！」

「……どうしてですか？」

「私達使用人が、王族の方々の秘密を探るなど、許されてはいません……！」

多分私はこの時、泣きそうだった。

こんな、分かりづらく鍵のかかった部屋で交わされる会話。

例えばこれが、母様ならばよかった。叱られただらうけれど……逆に言えば、叱られるだけですむ。私達と母様の間の距離は、とても少ないから。

けれど、どうだろう。

王族の方々と私達は、天と地よりも離れている。

私は 私達は、この秘密を暴いてはいけない。そう確信していた。

「ティル―殿……！ティル―殿、戻りましょう」

しがみつくようにして彼を来た道に押し返そうとすると。

「リドニア殿。……無理みたいです」

扉に背を向ける私を力一杯抱き寄せると、ティル―殿は苦笑して扉へ視線を送った。

「……えっ？」

次の瞬間、爆発したようにガシャンツと開いた。

「っ！？」

「どなたです……！」

響いたのは、鋭く攻撃的な。まるで殺意でも混じってるのではないかという、母様の声。

思わずティル―殿にしがみつくと、彼の腕も更に私を引き寄せた。

それは男女のする抱擁というよりも、子供が親にイタズラを見付かった時のような、怯えからくる抱擁に似ていると思う。

「……母さ、」

「リドニア！……と、ティル―殿？」

何で、母様がティル―殿を？そう思ってから、ティル―殿が母様を知っているのと同じ理由なのだと分かる。私が酔っ払って寝た時に、知ったのよね。

「どうしてここに……」

扉が開け放たれた室内からは、ランプの灯が漏れている。

母様の奥には数人の人がいて。

その方々の顔ぶれに、私は目を見張った。

どうして、こんな国の重鎮が揃ってるの！？

母様、ミーユ様、シンシア様。このお三方は、まだいいわ。問題なのは。

シンシア様の隣に座る男性。

「……レイ様……」

そして。

ミーユ様に寄り添う、

「陛下」

ティル―殿の眩きと私自身の視界に映るその御方に、目眩がした。

暴いてはいけない秘密（後書き）

遅くなりました。

待っていて下さった方には、とても申し訳ないです。

第二王妃の恋人

……どうして陛下が、こんなところに！

私が絶句したままそのお姿を凝視していると、私とティルー殿を睨みつけていた母様が目元を引き攣らせた。

「貴方達。まずは、離れなさい」

……。はっ！

「っ！？」

自分を包み込む温もりに我に返った。

全力でティルー殿を突き飛ばして必要以上に距離をあける。バタバタと動く私に合わせて室内に埃が舞い、母様が眉をひそめた。

「もっ……申し訳ございません」

「とりあえず中に入りなさい」

「……はい」

中は、なかなか広い部屋だった。明るいし、暖かい。陛下がいらっしゃらなければ、ホッと一息ついてソファに座り込んでいたと思う。

陛下がいるから、そんなことしないけど。

直立不動で母様の隣に並んでいると、ティルー殿が陛下を凝視しているのに気が付いた。

何ということ……！

慌てて彼の背中を叩く。

「あたっ」

「止めなさい、無礼ですよ！」

「無礼って……」

陛下は一度ティルー殿を見て、すぐに逸らした。

レイ様はシンシア様と微笑み合って 合って……、あら？

お二人の間に恋人同士のような雰囲気を見つけてしまった。指摘しては……駄目、よね。

とは思っても頭の中が色々と考えてしまう。もしレイ様とシンシア様の関係が恋人だったなら。それを陛下はご存知なのよね…？
「とりあえず、座って？」

どうしようかと迷っていると、シンシア様が私とティル―殿にソファを勧めた。

「お嬢様、リドニアは使用人です」

「そうですよお嬢さ……え？」

母様。今なんて？

つられてシンシア様を「お嬢様」と呼びかけ、すぐに違和感に気づく。

だって……お嬢様だなんて。シンシア様は（たとえ離婚するとしても）既婚者よ？

それに、母様はシンシア様を置いてメフィス伯爵家に仕え続けた。それなのに、何故。

私の視線を知ってか知らずか、シンシア様と母様はそのまま会話を続けていた。

「ティル―殿はまだしも、リドニアはメフィス伯爵家の使用人です。お嬢様の前に座らせることなどできません」

「……マリア。リドニアは私のお客様よ？ホスト役の私にお客様の前で一人座れと言いたいのか？」

なんか怖い。

もう立っているから止めてほしい。

……ちなみにティル―殿は最初の母様の「ティル―殿はまだしも」発言で長いソファに座っていた。ミーユ様もいるのに！

「ですが……」

「マリア。いいわね？」

母様は納得いかない様子だった。けれどシンシア様が母様の名を呼べば、いかにも渋々といった様子で頷いた。

有り得ないぐらい座りづらい。でも立っててもシンシア様に角が

立つし……。

「リドニア殿？座らないんですか？」
のんきに見上げてくるティール殿。

「座ります。お隣り失礼します」

無愛想なくらいに強く言って、隣に座った。

イマイチ母様とシンシア様、レイ様とシンシア様の関係が掴めない。……主にシンシア様関連ね。

ほとんど付き合いはないけれど、母様が仕えていた人として尊敬していた。メフィス伯爵家が強くなったのもシンシア様が陛下に嫁いだお陰だろうし。

無意識にシンシア様を見つめていたからかしら。

「やっぱり、シンシアの離婚騒動、気になるの？」

「……えっ？……」

突然、ミーユ様に絡まれた。

陛下は何故かそんなミーユ様を愛おしむように見つめる。ミーユ様のどこに、陛下が溺愛するような場所があるのか。

多分私には一生分からない。

「気になる！？」

「え、いえ……あの、」

気になります！とも、いえ全く、とも言えない。

だって気になるんだもの！

でも、侍女の立場的にはここは否定する場所。……よね？母様。

チラリと母様を窺えば、小さく首頷かれた。よし。聞かない！

「気になりませ、」

「そうよね、気になるわよねえ。ねえ、この可愛い侍女さんになら言ってもいい？マリアだけだと、色々大変だろうし」

……気にならないって言ったのに……。私やっぱりこの方苦手。

そう思っていたら、母様が苦笑してるのが見えた。もしかして、母様もミーユ様のこと苦手なんじゃないの？

「構わないか？シンシア、レイ」

「ええ、私は」

「構いません」

よく考えれば、お二人とも身分は陛下より下なわけで。陛下に許可を求められたら了承するしかないわよね。

この時は明かされる秘密に緊張して気付かなかったけど。

やはり母様だけが、複雑な顔をして黙っていた。

「うーん。何から話しましょうか」

何もおっしゃられなくて結構です。とも言えず。黙りこくっていたらティルー殿が声を上げた。

「ミーユ様。よろしいですか？」

「どうぞ？」

意外なことに、なんだか親しげな空気。

ティルー殿は寄り添うレイ様とシンシア様に視線を向け、僅かに頬を緩めた。

「王族だったシンシア様は、再婚できませんよね？」

「……………」

一気に静かになった室内。母様も含めた皆がティルー殿を見る。

何言ってるのよ、この人は！

それは私も例外ではなく、真っ青になってティルー殿を睨んだ。

ティルー殿は私の睨みを軽く無視。

「……そうね。私はもう結婚できないわ」

ティルー殿に答えたのはシンシア様。

「どう理由をつけるんですか？元王妃と、国王の従者が恋人同士だなんて」

先ほど陛下を見た時と同じ位目眩がした。
もう嫌だ。

ティル―殿と一緒にいたら、いつか不敬罪で捕まる。

「外聞が悪いにもほどが　痛っ」

最早堂々とした態度のティル―殿の足を踏み付けた。……私が。

そのまま立ち上がり、肩を掴んで揺さ振ってやる。

「ティル―殿！　本当に貴方、場を弁えなさい！　確かにどう見てもレイ様とシンシア様は恋人同士ですが、思ったことをそのまま言ったら、いつか首切られますよ！？」

鳩が豆鉄砲を食らったような表情のティル―殿に、同じく呆氣にとられた母様の顔。

次第に我に返った私の頬も恥ずかしさで熱くなる。

「ね、どう見ても恋人同士ですって」

「そりゃ、恋人同士だから」

嬉しそうに微笑み合うシンシア様とレイ様。

良かった……首の皮一枚つながった。

陛下も驚いてらっしゃるけど、怒った様子はない。ように見える。……というか、やっぱり恋人なのね。察してたけど。

「じゃあ、話すわね。そうね、シンシアがメフィス伯爵令嬢だった頃がいかしら？」

嬉しそうにはなすミーユ様。誰も彼女を止めようとしない。

「ミーユ様とは絶対に秘密を共有したくないなあ……」

隣でボソリとティル―殿が呟いた。

同感だわ。

王妃殿下の昔話

「当時、ヒルドマン侯爵家とメフィス伯爵家は、そう仲が悪かったわけじゃないのよ」

もちろん、仲が良かったわけじゃないけれど。

付け足された言葉に、私は頷いた。

その時は圧倒的にヒルドマン侯爵家が上だったのだと思うわ。メフィス伯爵家に、ヒルドマン侯爵家に対抗するほどの切り札はなかった。

きつと、普通の付き合いだった。

目に見えない格差は歴然で、旦那様もそれを越えようだなんて考えもしなかった。

「私とシンシアは親友だった。……いえ、今も親友だけど。昔から仲が良かったのよ。そして、」

そこで言葉を切り、ミーユ様は陛下の腕に手を絡めた。

それに嫌悪感を一切感じなかったのは、これによってシンシア様が傷付かないと分かっているから。

「私と陛下は、恋人だった」

きつとお二人は、その関係を隠していなかった。だからこそ、ヒルドマン侯爵家は昔から強かった。

侯爵だけでも強かったヒルドマン家にとっては最高の土台。無くても強い。けれど、その事実があったらさらに強くなれる。

「その頃、シンシアと陛下の婚約の話が出たの。それを言い出したのは、その頃の、陛下の臣だったわ」

元来から一夫一妻制のグウィリー王国だけれど、国王に対してだけその限りではない。

世継ぎとか、そういう諸々を考慮した決まりね。

「当時メフィス伯爵は、段々とその富を蓄えていて、国としても良いと思える土地をたくさん所有していたから、というのが理由だったわね、確か」

「…ええ」

そうね、と頷くシンシア様。

…… 当時からのご友人だったミーユ様の恋人との結婚だなんて。珍しい話ではないとしても、何とも言えない気分にならされる。

だとしても、お二方はそれに対して文句なんて一切言わないでしょうね。だって、それが令嬢の義務だから。

私やエリザが働くように。令嬢は何不自由ない生活の代わりに、他人に未来を決められてしまう。

「わたくしとレイが恋人だったことは、陛下もご存知だったのよ。そしてわたくしと陛下は、良き友人でもあった。わたくし達は幸せだったの。だから、わたくしと陛下の婚儀ごときでその幸せを壊すのは嫌だった。わたくしと陛下は、一つの約束をしたのよ」

…… 約束。

それが今回のことに深く関わっている気がして、私はグツとシンシア様を見つめた。

「わたくし達は、本当の意味での夫婦にならない、と。…陛下はミーユを迎えにいくことを決めていたし、わたくしだって、友の子を産む気はなかったし、ね」

よく考えたら凄いいことよね、友人の子を産むって。

私がツールと結婚して子供を作るようなものじゃない 無理だね。

そんなことを考えていると、隣で小さな、本当に小さな声で、

「はた迷惑な約束して…」

というぼやきが聞こえた。

ティール殿の気持ちも、陛下とシンシア様の気持ちも分かる身と

しては何か言う気にも慣れず、私は黙っておいた。

「わたくしと陛下は、もともと離婚をすることが前提で結婚したのよ。…ただ、いつ離婚するかが問題だったのよ。わたくしはいつでも良かったけれど…」

「…レイ様が戴爵される日にされたんですね」

私の言葉にシンシア様は頷く。

「旦那様は、納得されるでしょうか…？」

陛下の第二夫人という栄華から、一転。離婚されて、レイ様の恋人。旦那様が納得するとは思えない。

「いざとなれば、どうしてもできるわよ」　なのに、なんでミーユ様はこんなにも余裕でいられるの？

「伯爵といえど、ただの貴族じゃない。王族の命令に逆らえるわけがないのよ」

なんて、なんて傲慢な考え方だろう。

けれど、それしかないのかもしれない。私や母様は権力の前には非力で。

旦那様はシンシア様が夫人でなければ納得しないのならば、陛下やシンシア様が幸せになるためには、権力を振りかざして旦那様を跪かさなければならぬのかもしれない。

どうにかならないの？なんて考えてはいけない。だって私は、単なる使用人なんだから。

そつと隣を伺うと、テイルー殿と目が合った。彼はこちらが驚くほどに穏やかな表情をしている。

「ど……して、笑っていられるの？」

「こういう対処もあるのかと思っていました」

「え……？」

「いえ、何も」

こういう対処？
どういう意味かしら。

＊＊

貴方達はもう戻りなさい。

そう言われて、私とティル―殿は部屋を追い出された。

口外しないように、とは言われなかった。

誰に知られてもいいと思っているのか、はたまた私達を信用しているのかは分からないけれど。

ただ驚いたのは、部屋を出る寸前、ティル―殿が陛下に何かを渡していたこと。

『お手紙越しで申し訳ないのですが、ぜひお頼みしたいことがあります』

早口にそれだけ言うのと、紙を押し付けてさっさと部屋を出た。私は慌てて彼についていったの。

今彼は、私の前を悠々と歩いている。私はこんなに混乱しているのに。

「……ティル―殿」

「シンシア様は幸せになれますよ。レイ様が迎えに来ますから。女性というものは、愛する人がいるだけでどんな場所でも状況でも、幸せになれるものです」

「……男性は違うとでも言いたげですね」

「結局、性格や人柄ですけどね。愛する女性をとりまく状況が少しでもよくなるよう、尽力するんですよ。無責任な約束までして」

それが彼の持論なのかしら。まるで見たことがあるみたいに言うけれど。

……というか。

「無責任な約束って、今回陛下とシンシア様が行った約束のことですか」

「え？ いえ、違いますよ」

壊れた扉を通る。

真つ暗闇の中、ふらふらと歩いていたらティルー殿が足を止めた。それに気付かず歩いたら、彼にぶつかった。

「あたっ。…ティルー殿？ 何止まってらっしゃるんですか」

「リドニア殿は、本当に夜目が利かないんですね」

手をとられた。帰りも手を繋いで帰るっていうのかしら。

「ね、リドニア殿。行きに、僕の両親が同じ職場だったらって話しましたよね」

「え？ ……ああ、しましたね」

どうして母様をマリア侍女長って呼んでいるのか、って話だったような気がする。すっかり忘れてたわ。

「僕の両親ね、同じ職場だったんです。確かに役名で呼んでました。……いえ、結婚したときはどちらも仕事を辞めていましたけど。それでも、父は母を役名で呼んでいました」

「あら、そうなんですか。結婚して、辞めた後も役名で呼ばれるだなんて嫌ですね……」

結婚後に役名で呼ばれるって、どういう状況だろう。父様が母様のことを、家でも「侍女長」って呼ぶようなものよね。

「ええ、確かに母は嫌がっていました」

「お父様は、お母様を何て呼んでらっしゃったんですか？」

ティルー殿は、少し間を置いてから答えてくれた。置かれた間は、彼の迷いを表していたように思える。

「お嬢様、と」

新たな波乱？

予想はしていたけれど、見事寝不足になっていた。

いつもより少しだけ遅く起きて、身嗜みを整えると私は部屋を出た。水をもらおうと厨房に向かうと、ティルー殿がいた。

ふと昨日の彼を思い出して、声をかけようか迷ったわ。

『お嬢様、と』

彼の家族構成に興味なんてない。けれど、そこから発展しなかった会話を思い出すと声をかける気が あ、気付かれた。

ティルー殿がこつちを見た。

「……おはようございます、ティルー殿」

「おはようございます、リドニア殿。……寝不足のようですね」

そこにいたメイドにぬるま湯の手配をして、私は少しだけティルー殿と話すことにした。

「ええ、まあ。秘密を知ったことを後悔はしていませんけど、やはり寝不足は辛いですね」

ティルー殿は大して辛くなさそうだけど。男女の差かしら。

そんな私の心の声を通じた……わけはないけれど、ティルー殿は答えてくれた。

「僕は慣れてますから」

「私は全然慣れません。いつだって夜更かししたら眠いです」

そもそも、お嬢様が舞踏会や夜会のない日は早くベッドに入られるから。っていつても十日に一度くらいだけ。

「慣れないほうが良いですよ。貴族に仕えながら生活習慣に気を使うなんて無理な話ですけどね」

わざとらしく肩を竦めてから、ティルー殿は私を見て「あ」と声を漏らした。

「ティルー殿？」

いえ、彼が見ていたのは私ではなく、私の後ろ

「……おはようございます」

「レイ、様」

「おはようございます、レイ様」

優雅に挨拶を交わすレイ様とティル殿。私も慌てて腰を屈めた。

「二人で何の話を？」

「レイ様がお気になさるような話ではございませんよ」

ティル殿もレイ様も、どちらも穏やかな笑みを浮かべていて怖い。大抵、こういう表情って失礼なお客様の前で浮かべるものよ。

「それより、今夜はよく眠られましたか？」

「普段通りだ」

「睡眠は摂ったほうが良いですよ」

にこにこにつこり

あまり笑うのって、逆に失礼じゃない？というくらい、ティル殿は笑う。

「ティ、ティル殿、失礼ですよ」

小声でたしなめても、彼は聞く耳を持たない。にこにこ笑みを浮かべたまま、レイ様を見つめている。

「良いんですよ。彼らは、自分達がどれだけ自分勝手なことをしたのか気が付いてないんです」

あああああ、何てことを！

レイ様に聞こえるわよ！！というか、絶対聞こえてるわよ！
文字通り真っ青……というか真っ白というか……になった私。

……多分、もうティル殿と会うことはないでしょう。だって、彼はすぐに不敬罪で解雇されるから。

「貴方達は、自分で解決するべきだったんだ。なのに、無駄に高い権力を振りかざして……っ。陛下だって、」

不自然なほどに、ティル殿は怒りに燃えていた。笑っていたのが気のせいかと思うほどに。

ティル殿の批判が、陛下個人におよびかけた時、初めてレイ様がティル殿の肩を強く掴んだ。

「私達のことは構わないが、陛下のことは言っな。でないと、お前を捕らえねばなくなる」

まるで、捕らえることが本意ではないとも言っように。

「あ、あのう……」

そんな不自然な空間は、か細いメイドの声によって打ち破られた。弾かれたようにティル―殿はレイ様から離れ、数歩距離を置いた。

「ティル―殿、もう参りましょう」

メイドからぬるま湯を預かり、穏やかな声でティル―殿にそう声をかけた。

「…レイ殿と陛下は間違えた。それでは、シンシア様は幸せにならない」

「ティル―殿ッ！！」

「……っ」

ガン！とつま先を踏ん付け、私はティル―殿に背を向けた。

「たとえ判断を間違えていたとしても、貴方は過去に戻ってそれを正すつもりですか？……無理でしょう？」

いつまでもぐだぐだ言ってないで、私達使用人は主に従えば良いのです」

主が行っていることは、その内容に関係なく受け入れる。そしてそれを正しいことだと信じる。それが、私のすべき事だと思うようにしている。

それに、お嬢様が悪いことなんてするはずないもの。

「リドニア殿は、何も分かってないんですよ。だから……」

ぶつくさと呟かれる言葉があまりにも不愉快で、私はたまらず、足を止めた。

「分かるわけないでしょう、貴方方が何の話をしているのかも分からないのに！　ただ分かるのは、貴方がとんでもなく不愉快な人だということだけです」

早く行かないと、お湯が冷めるわ。

早足でその場を去ると、少ししてから駆け足で私に近づく音がした。

「リドニアさあ〜ん」

「……。…はっ!？」

無視してしまおうと思って　その違和感のある呼び方に反応してしまふ。

何? 何で少し砕けた呼び方になってるの?

「テイ、ティル―殿?」

「何でしょうリドニアさん?」

「……ティル―殿?」

「はい」

「ティル―、ど、の!」

「殿」に力を込める。

そう呼べという意味を込めて。

「……別に大して変わらないのでは」

「大した違いです、ティル―殿! 呼び方はその二人の間柄を表すんですよ!」

「殿」みたいな堅苦しい呼び方は、つまり私とティル―殿の関係を表しているわけで。

こうやって「さん」になって、最終的に呼び捨てにでもなったら……。

「ひいっ」

「んな大袈裟な……。別にいいじゃないですか。何も呼び捨てにするわけじゃないんだから」

「当たり前です!」

いくら文句を言ってもティル―殿は呼び方を前に戻さず、ぬるま湯を持った私は、ため息を吐いて歩き始めることしかできなかった。

お嬢様の身支度を整え、部屋を出る。今日、メフィス伯爵邸に戻る。……シンシア様を連れて。

昨日のことをお嬢様には伝えられずにいた。事情を知ってしまったとはいえ、私にどこまでの自由が許されているのかが分からなかったから。多分、ティルー殿も伝えてないんじゃないかしら。

「旦那様は……あまり上機嫌ではないでしょうね」

「まあ、そうでしょうね」

逆上機嫌だったら嫌だ。……怖い。

「でもあたし、シンシア叔母様とはあまり交流が無かったから……少しだけ、楽しみだわ」

「では、屋敷に戻ったら早々にティーパーティーでも開きましょう」
ええ、とお嬢様が頷きかけた時、バタバタと小走りで駆けってくる音がした。

「ルーシャンっ」

走ってきたのは、リクト様。

「……、リクト様。どうかなさいましたか？」

「メフィス伯爵が、」

続いた言葉に、お嬢様は真っ青になった。リクト様が走ってきた道を逆走する。私も慌ててその後を追った。

旦那様が、シンシア様を殴りつけた。

そんな、だって、あの旦那様が？

もの凄い大事になっているのかと思ったけど、そんなことはないらしい。

途中でお嬢様を抜いて導き役になったリクト様が止まったのは、シンシア様のお部屋の前だった。

「叔母様！」

「シンシア様……っ」

リクト様は入ってこれなかった。

部屋の中には拳を強く握った旦那様と、壁に寄り掛かってうずくまったシンシア様、それから、そんなシンシア様を守るように覆いかぶさっている母様。

「お前は……どうして……」

「……」

「お前が……、幸せになれるようにと……思っていたのに」

「お父様……」

呟かれた声は、お嬢様のものにも、シンシア様のものにも聞こえた。

「帰ろう、シンシア。殴って悪かった。マリア、手当をしてやってくれ」

「かしこまりました」

嫌だな、と思う。

今回の騒動に、悪者がいないことが。皆行動の動機が純粹で、だから責められるべき人がいない。

「……お嬢様、戻りましょう？」

「……ええ」

ガタタ、と揺れる馬車は静かだった。

人を除いて。

「なあ、何あのシンシア様の頬の湿布」

「……」

「もしかして、誰かにたた」

「黙りなさい、ロア。詮索なんて悪趣味よ」

馬車に乗る前に次回の逢瀬の約束をしていらしたお嬢様とリクト様。

その間も、ロアはチラチラとシンシア様を見つめてて……、ほんといつ叩いてやろうか迷ったわ。

「あ、そういえばロア。あんた、何か話があったんじゃ……」

私の声に顔を上げたのは、ロアと母様と父様。ロアはハッと母様を見て、高速で首を振った。

「い、いやいやいやいや、今じゃなくていいからっ！お願い後にして！」

「え？でも」

キキー

ガタン！

馬車が停車した。素早く降りると、私達は主の乗る馬車に向かう。お嬢様に手を貸していた私は、ふと屋敷の門を見て 目を丸くした。

「あら？」

その場にいた全員がそちらを見る。

「あ、セルア様……！？」

悲痛な声。

「ロア、来ちゃった！」

そこにいたのは少女で

彼女はロアに向かって微笑んだ。

ミネルバ公爵の一人娘

「……セルア様って、あのセルア様？」

母様の呟きに、私も我に帰った。

セルア。そんな名前の有名な人がいる。

本当にセルアⅡミネルバ公爵令嬢かしら、この方が。

セルアなんて、そこまで珍しい名前ではないけど……でも、もしこの方があのミネルバ公爵令嬢だったのならば。

「……なんでロアと知り合いなの？」

セルアⅡミネルバ公爵。

彼女が、というより、ミネルバ公爵が有名なの。先代の国王陛下の弟君が先代のミネルバ公爵なのだけれど……とても残酷な方で、機嫌の悪いときに使用人を虐殺していたような方なのよ。

それも、公爵家だけに限らず、お客様の使用人とか見境なく手にかけてから。だから有名なの。主人がミネルバ公爵の屋敷を訪れると言い出したら、全力をもってそれを止めるか、もしくはクビ覚悟で応戦するために剣術を学べ、それが辞めろ、って。

もつとも、今のミネルバ公爵にそういう残酷性はないらしいけど……でも、あの方の娘だから。分かったものじゃないわ。

そんなことを考えていると、ロアがセルア様に近づいた。

「セルア様！どうしてここにっ？というより、どうしてここが分かつたんですか」

「ええ？普通に。聞いたら教えて下さったわ。それに、ミュール家なんて有名な家、あたしでも知ってるわよ」

馬鹿ねえ、ロアったら。

けらけら笑うセルア様。

ロアはそんなに馬鹿じゃないわよ。

……なんて姉馬鹿を発揮することもなく、私はポカンと二人を見る。

「とりあえず、屋敷へ」

父様の声に、私と母様は迅速に従った。母様に付き従われたシンシア様は、お屋敷を懐かしそうに見上げていらっしゃった。陛下とご結婚されてから一度も戻って来られてないんだもの。当然よね。そんなシンシア様を急かすことなく、母様は愛おしむように見守っている。

「やつぱり 懐かしいものね」

「昔を思い出しますわ」

「ええ。……マリアは老けたわね」

「お嬢様こそ」

かつての主従は、その間に横たわる長い時間を忘れさせるように笑い合っていた。

「姉さん、実は、話したいことってコイツのことなんだ」

そんな団欒シーンを見ていた私に、ロアがこそそと話しかけてきた。

「あら。公爵令嬢に対してコイツだなんて。偉くなったものねえ、ロア」

早く話してなさいよ！

……という意味を込めて厭味っぽく言ってみた。

「今はそんなことどうでも良いんだよお！ああ、どうしよう。身の破滅だ。外堀りから崩していこう作戦が。仲間を作るう作戦が。こいつのせいで台なしだ！」

「……はあ？何言ってるの、あんた」

一人でぶつぶつ言ってる……気持ち悪いわね。

ぞろぞろと連れだって屋敷に入る。旦那様と奥様、お嬢様は自分の部屋に戻られた。ロアはセルア様を客室まで案内した。

「わたくしの部屋は……」

「ございますよ。掃除は欠かしませんでしたから」

シンシア様を誘導する母様は、少しだけ嬉しそう。

「お嬢様。参りましょう。お疲れでしょう?」

「ええ。でも、セルア様が……」

「お着替えなさってからのほうがよろしいですわ」

それに、どうやらセルア様のお目当てはロアのようだし。むしろお嬢様は行かなくても良いのでは?

そういうわけにはいかないか。

「ね、姉さん……」

泣きついてくるロア。情けない。

「後でお嬢様と行くから、セルア様の相手してなさい」

「言われなくてもするよ……」

「ロア! 行きますよ。案内してよ」

「分ーかってますよ、セルア様」 結われた薄い金茶の髪を揺らしてロアの肩を叩くセルア様。

……なんか、親密じゃない。

「ではセルア様。参りましょうか」

「ええ!」

お嬢様の私室に戻る途中、すれ違ったメイドにお茶の手配をした。お嬢様は普段関わりのないタイプのセルア様が物珍しいのか、早く着替えようと悪戦苦闘なさっていた。

比較的ラフなドレスに着替えてすぐに客室へ向かった。

「はい、あゝん」

「い、良いですよ!」

「食べなさいって」

「良いですって!」

……。

何の会話かしら。え、どんな状況?

お嬢様と顔を合わせて、お互いに首を捻った。

「今の、セルア様とロアよね」

「はい……私にもそう聞こえました」

扉を薄く開き、顔を覗かせてみる。当然ロアの前に紅茶は置いて

いない。

クッキーの並べられたお皿が何故かロアとセルア様の間の真ん中に置いてあった。

「はい、あゝん」

セルア様はクッキーをロアの口元に押し付けていて、ロアはそれを嫌そうに遮っている。

「セルア様あ。止めてくださいよ」

「何でよ！とっても美味しいのに！」

「わざわざセルア様にいただかなくても、欲しかったら自分で食べますから」

一度音を立てずに閉めて、強めにノックしてから開いた。開いたら、慌てた様子でノアが口を動かしている。セルア様の指にクッキーはない。

「ロア：食べたのね」

お嬢様の呆れたと言わんばかりの声。

「そのようですね……」

「あ、ね、姉さん。遅かったな」

「ロア。お客様の前で姉さんはないでしょ……それとも何？セルア様の前では良いっての？」

「まあ、そうかな」

え。

ロアの返事に目を丸くしていると、セルア様が唇を突き出して不満げな表情を浮かべた。

「もしかして、ロア。言っていないの？」

「だからー、外堀を埋めようとした時にセルア様がいらっしゃったんですって」

「ロア。何の話なの？」

お嬢様がロアの隣に座ると、ロアはハッとした様子で立ち上がった。

「ルーシャン様！失礼しました、こちらへどうぞ」

ルーシャン様にソファを譲って、ロアは、セルア様の隣に立ったの！

まるで、セルア様に仕えるみたいに。
嫌な予感がした。とても、とても。

「……」

あんたが並ぶべきは、そこじゃないでしょう？

そんな意味も込めてジロリとロアを睨みつけると。

「……話すよ。話す。話します。どのみち、話さないって選択肢はなかったんだ」

なんだかよく分からない勘違いをして、勝手に自分が話す空気を作り上げた。

別に、言えって意味で睨んだんじゃないんだけど……。

すーはーと深呼吸を繰り返して、緊張を主張するロア。何だか私も緊張してきた。

何？何を言うのよ。

味方になってくれる？って言ってたことよね

「俺、ロア＝ミュールは、学校を卒業次第、セルア＝ミネルバに忠誠を誓い、仕えることにした」

私とお嬢様。

この言葉により強い衝撃を受けたのは、果たしてどちらかしら？

特別な使用人

「そ、んなの許されるわけないでしょう……！」

事前に味方になってくれと頼み込むのが私だなんて……ロアは人選ミスをしたと言わざるをえないわね。

むしろ、私が一番反対するのは目に見えてるでしょうに。

セルア様がビクリと怯えたように肩を揺らした。

ああ、お客様の前で声を荒げるだなんて。

でも、それぐらいショックで、そして、
悲しい。

セルア様とどんな運命的な出会いをしたのかは分からないけど、生まれた頃から仕えてきたメフィス伯爵家がこんな、一人の令嬢に負けるだなんて。

「そう言うと思ったよ。……母さんが、だけど……でも決めたんだ」

「私達ミュール家は、一族でメフィス伯爵に忠誠を誓っているの。」

心から。あんたのその身勝手な行動は、私達が築き上げた信頼関係を崩すものなのよ！でも決めたですって？
あんたの一存で決められるものじゃないのよ」

もしも相手がヒルドマン侯爵だったなら、私は渋々頷いたかもしれない。お嬢様が嫁がれるところだし、何より……。

「セルア様の前で言うのはナンだけど　　ロア。あんた、忠誠心と恋心を取り間違えてるんじゃない？」

「……はっ！？」

ロアは血相を変えた。

だって、そうとしか思えない。先ほどのやり取りをみる限り、少なくともセルア様のロアへの態度は、使用人に対するものではなかったもの。

「そうでしょう？じゃなきゃ、主の前で座ったりなんかしないし、

そんな口の利き方しないわよ」

ロアは俯き、セルア様は傷ついたような表情を浮かべている。そつとお嬢様を窺えば、無表情だった。気高い女主人。

思わず見惚れてしまふ。こういうのを、心酔する、とても言うのかしら。

「それは……っ」

「セルア様」

セルア様が何か言いかけて、それをロアが止める。

「分かりました。じゃあ、セルア様への忠誠を見せ、主に相応しい対応をすれば許してくれますか、リドニア？」

いきなり敬語に直したって。

「そんなわけないでしょ。」

とりあえず、マリア侍女長とルドル

フ執事呼びましょう」

話は、その後だわ。

メイドに呼びに行かせてから数分。慌ただしく母様と父様が部屋にきた。

セルア様が立ち上がってぺこりと頭を下げる。……使用人相手に、わざわざ頭を下げるのね。もしかしてロアの両親だから？

私が相当意地の悪いことを考えている間に、ロアは私達に言ったことをもう一度二人に言った。

「………そう」

母様も父様も、私のように取り乱したりはしなかった。それでも頬は強張って、何度か視線をさ迷わせる。

「あの、私……！」

立ち上がったセルア様を視線だけで止めると、父様は数秒の間目

を閉じた。

「これは、我々だけの問題ではない。後日、リジン様とローズ様をお呼びし、話し合いの席を設けましょう」

あ……。

そうよね。次期メフィス伯爵はリジン様。私はお嬢様に付いていくつもりだったから、当然ロアもお嬢様に仕えるものだと思っただわ。

ロアの主はリジン様なのよね。

「ですがあの、ルドルフ執事。学校は……」

ロアの控え目な主張。

学校なんてこの際どうでも良いでしょ！変なところで真面目なんだから。

一言文句を言ってやろうと私が口を開くよりも早く、父様が私に向かつて鋭い声で命じた。

「今から、一時休暇申請の紙を届けさせる。リドニア。手配を」

「は、はいっ」

「マリアはウォルツ伯爵家へ、リジン様とローズ様宛てに手紙を。

出来次第届けさせるんだ」

「分かりました」

残されたのは、お嬢様、セルア様とロア。

ちなみにこの時私は、書類に休暇申請理由を書いていた。

「セルア様。日にちを変えて、改めて話し合います。その際はミネルバ公爵にもこちらの招待を受けていただかねばならないかもしれないません」

きっと、ロアとセルア様の約束は口約束くらいに軽いものだった。そこに心の通った堅い忠誠があったとしても 父親の名が出て初めて、セルア様は気付いたはずよ。

ミュール家の次期当主に仕えられる重さを。

私がセルア様に仕えるよりも難しいでしょう。

ロアは、私よりも価値が高いから。純粹な意味で。

「わ、かりました」

セルア様の返事に父様はニコリと笑う。お客様相手に見せる笑み。
「では、失礼いたします」

私を手配を終わらせたのはセルア様がお帰りになった後で、お嬢様は「驚くほどに空気が重く、非常に気まずかった」とおっしゃった。

正直寝不足でそれどころじゃなかったけど。なんだか、窓から空を見てたら妙な同情心が湧いて。

「……ロア？」

「姉さん!？」

裏切り者の部屋の扉をノックした。

もう皆寝ているこんな時間に起きてるということは、ロアも眠れなかったのかしら。

「……ごめんなさい、起こしたかしら」

部屋に入りながらわざとらしくそんなことを言ってみると、ロアは緩く首を振った。

「いや、姉さんが来てくれなかったら、一晩中ぼーっと空を見ていたかもしれないよ」

と微妙な返事をくれる。

「偶然ね。私も空を眺めてたわ」

「ほんと？すごいね。やっぱり姉弟だからかな」

「え。そんな細かいところも似るの？」

「知らないけど」

ロアは一度部屋から出て、数分後にホットミルクを持って戻ってきた。

「どうぞ。　今から始まる話は、手短に終わらないだろ？」

「ええ。多分ね」

「セルア様のことを聞くんなら、2、30分じゃ終わらないよ」
私はロアのベッドに座っていて、ロアも私の隣に座った。

「……こんなに長い間学校を休むのは、初めてだ」

「勉強とか遅れないの？」

「いざとなれば、父さんに教わるから」

そういえば、ロアって学校の成績いいのかしら。

……。

ま、まあこの話は今はいいわよね。

「で？何が聞きたいの？」

「セルア様とは……どこで会ったの？あんたの学校、男子校でしょ」というか、そもそも男女混交の学校がない。女子校ならば花嫁修業目的で、男子校ならば王立の貴族の息が入る学校からロアの通う執事養成学校まである。

大体において、男性が優先された世なのよね、今は。

「たびたび、街へ抜け出してるって話はしたっけ？」

「ええ、聞いたわ。あんたが帰ってきた初日に」

忍ぶような身分じゃないでしょ、と思ったのを覚えている。

あの頃は、こんなことになるなんて思ってもみなかったのに。

そんなことを思いながらホットミルクを飲む自分が、なんだかお年寄りにでもなったかのような気分になって、私は小さく笑ってしまった。

…… 本当、こんな落ち着いた気分でいちゃいけないのに。

使用人と変わり者の令嬢

「そう、それはある休日、いつものようにお忍びで街へ繰り出した時だった……痛っ」

口調を変えて語りだしたロアを小突く。普通に喋りなさいよ、普通に。

というかしかしてあんた、不良だったんじゃないでしょうね。いつものようにって何よ。

「……。まあそんな時、連れとはぐれたんだよ。別に目的地があったわけじゃなし、会える確率も低いから、学校に戻ろうかと思ったんだ」

課題もあったし、と付け足すロア。よかった。とりあえず課題をこなそうと思う程度には真面目だったらしい。

「そこで、セルア様と会ったのね？」

「……まあ、会ったって言うか。重そうに荷物引きずってたから助けて差し上げたんだよ」

「そのついでに家まで付いていって、」

先を言ってから目を細めていると、ロアが焦ったように「やましい理由じゃないぞ！」と言ってくる。

「私、何も言ってないわよ？」

「うっさい」

ま、良いわ。ロアにはロアの考えがあるんでしょうし。

「で？続きは？」

続きを促すと、ロアは何か言いたげに私を見てから口を開いた。

「屋敷に行ったんだ。…立派な屋敷だった」

ミネルバ公爵の屋敷が立派なのは想像に難くないわ。いくら先代が浪費家だったとはいえ、屋敷を売り渡すような馬鹿ではなかったはず。

相槌を打たずに頷くと、ロアは話し出す。

「ただ、庭は荒れ放題で、花壇に花はなく、屋敷の質は……とても悪かった。門なんて、変色してたしな」

その時を思い出したのか、ロアは苦笑した。屋敷の庭園や門なんて、普通の貴族なら真っ先に手を手を加えないといけない場所よ。なんたつて、屋敷は顔。それを見ただけで、その家の経済状況が分かってしまう。

でも、もっと言えばロアの言っていることは、誰でも対処できること。

門を磨いたり、庭園の雑損を刈ったり、……花を植えるのは、庭師かしら。

「ろくなメイドがないのね」

厭味ではなく、ただただ正直な感想を漏らした。だって、そうじゃない？メイドが3人もいたらどうにかなるのに。

「……俺も、そう思ったよ。でも、すぐにおかしいと思った。だれもセルア様を迎えにこないんだ。メイドも、執事も、彼女の侍女でさえ」

その言葉で、ピンときた。でも、まさか。だって。

「もしかして、使用人がいないの？でも……」

「先代のミネルバ公爵は、姉さんが思っていたよりも浪費家だったんだ。今代に残された財産は、微々たるものだ。そして、安い給金で集まるには先代の噂が悪すぎた」

ミネルバ公爵の元に主が訪問する際は、必死で止める。それが無理な場合は剣術を学べ。もしくは辞める。

でないと、使用人は殺される。

給金に対し、リスクが高すぎた。もちろん、何でもいいから日銭を稼ぎたいという人はいるだろうけど……。

「これまでに数人、身元の分からない孤児や浮浪者を雇ったそうだけど、金製の鍵や燭台を盗まれたから止めたらしい」

「そ、そう……」

……そういうこともあるのね。私からしたら考えられないわ。主

のものを盗むだなんて。むしろ、私の全てをお嬢様に捧げるわ。

「それを聞いた時は、大して何も思わなかったんだ。気の毒だな、ぐらいしか感想もなかったし」

「時は、つてことは、その後も会ったのね。セルア様と」

少しの間沈黙して、ロアは頷いた。彼はとても神妙な顔をしていて、……月夜の照らされている背景に、とても似合っていた。

「お互いに意図したわけじゃない。運命だと言い張るつもりもない。けれど出かける周期が似ているのか、俺とセルア様はそれからたびたび、街で会った」

まるで、街に回るロマンス小説の内容みたい。使用人と令嬢が出会い、惹かれあう。少し普通と違うのはセルア様がミネルバ公爵の娘だということ、ロアがミュール家だということ。その関係を否定するのが令嬢の家族ではなく、使用人の家族：特に姉：だということ。

「それにさ、姉さん。俺とセルア様の間に、恋愛感情はないよ」

「……………」

「少なくとも、俺にはない。主には忠誠を。そう生まれた頃から躰られたんだ。相手がどんなに可愛かろうが、相手が主なら俺は忠誠以外の感情を抱かない」

ロアの顔は、真実を語っている顔だった。少なくとも私は、それをその場限りの嘘だとは思わなかった。

実際、ロアの言うことは間違えじゃない。私達はそう教え込まれた。主は異性云々の前に主なのだ。

「でも私は、今日のアなたとセルア様を見て、まるで恋人同士だと思ったわ。あんたは、使用人らしくなかった」

「街で何度か会ってる内に、セルア様が俺のことを友人として見ていることに気がついたんだ。別にそれ自体はおかしなことじゃない。その頃の俺とセルア様の間には、何もなかったんだから。ただ俺は、セルア様をルーシアン様よりも高い身分の令嬢だとは思えなかった」

ロアは私の言葉に対してコメントしなかった。それとも、もしか

したらこれが答えにつながるのかもしれない。

「着ている服は、令嬢らしいものだったんだ。母親の形見だとおっしゃってたけど……。そこでやっと、気付いた。セルア様にもないもの。人を従わす力だよ」

私には、ロアの言いたいことがいまいち分からなかった。

それが顔に表れていたのか、ロアが苦笑した。

「孤児や浮浪者を雇っても、何も起こらない人はたくさんいる。セルア様には、命令する力が全くないんだ。ルーシャン様や……リクト様のような、貴族なら誰もが持っている圧力が、セルア様にはない。彼女の言葉に従わなくてはいけないという感情を人に抱かせないんだ」

やっと言いたいことが伝わった。

貴族は、大抵誰でも生れた時から大勢の使用人にかしづかれている。命令は日常となり、日常となった命令には従わなくてはならない空気がまとう。貴族は傲慢さが武器となる。

けれどセルア様にはそれが無い。貴族に一番必要なものがない。

「言い方は悪いが……セルア様はナメられやすい」

「本当に言い方悪いわね」

ロアの冗談で張り詰めていた空気がなくなり、どちらからともなく息をそつと吐き出した。

わけを聞いたところで、私の気持ちが変わらないのはロアだって知っているはず。そもそも、理由を聞いて許可できるような話でもない。

それに、ロアの一存で全てが決まらないように、私の一存でもロアをセルア様に受け渡すことはできない。

「どう？少しは心動いた？」

「馬鹿。そんなわけないでしょ」

茶化すようなロアに、私も同じ空気をもって返した。こんな真夜中に言い争いをするなんて、私もロアも嫌だ。

「……確かに、私も少しセルア様を馬鹿にしていた節はあるわ。そ

れも、あんたの言う圧力に関係あるのかしら」

こんな令嬢に負けた、って思ったもの。実際ロアが言う通り、お嬢様よりも高位なのに。

そう言うと、ロアは馬鹿にしたように私を鼻で笑った。

「俺がミュー様に仕えるつたって、姉さんなら怒ってただろ。それとこれとは無関係。姉さんの中で、ルーシアン様は陛下よりも偉いんだから」

「失礼ね。そんなこと……ないわよ、多分」

私達は和やかに笑いあう。

明日からはきつと、睨み合って言い争うのに。

あんたが諦めるまで私とあんたは敵同士よ。明日から。

そんな思いを込めて、部屋から出る間際に頬にキスをしてあげた。さりげなく拭われた。

使者と伝言

ふと思った。

ロアがセルア様に対しておよそ使用人らしくなかったのはもしかして、彼女がそう望んだからなのではないかと。

執事養成学校から了承の手紙が届いた午後、ウォルツ伯爵からの手紙も届いた。

内容は挨拶をすつ飛ばし、驚きと会議に対することが書かれていた。ミネルバ公爵には、手紙を送っていない。セルア様がもう報告しているだろうし、まだ、私達家族は動揺していた。

一番落ち着いていらっしやるのはシンシア様かもしれないわ。ロアとの交流が最も少なく、客観的で公平なコメントをしてくださる。「マリアもね、驚いてたのよ。ね？」

シンシア様が、お嬢様とお茶会中にそんなことを言い出した。後ろで控えていたマリア侍女長が、一瞬視線を泳がせた。

「……………」

私はマリア侍女長の横に立っていて、ジッと視線を向けると睨み返された。

「……………なんです、リドニア」

「マリア侍女長。私は、ロアを手放すつもりはありません。私達ミュール家は、メフィス伯爵家に忠誠を誓っているのですから」

セルア様に対して感じる、同情に似た気持ちとは別に、私にはロアを止める義務がある。ロアの行動が、人道的に良いか悪いかは関係ない。ミュール家として、私はロアを許せない。

忠誠を違えてはいけない。ロア一人が忠誠を覆すだけで、ミュール家はメフィス伯爵家に対して不誠実な行為をしたことになる。

「リドニア。貴女は……」

マリア侍女長と目が合った。何の感情もない。

「とても、ミュール家らしいわ」

結婚したシンシア様について行かないマリア侍女長のほうが、何倍もミュール家らしいと思わないでもない。

私が何も言わないでいると、マリア侍女長は無表情を一転して明るい表情を浮かべた。

「リドニアの反対で変わる意見なら、それまでということでしょう。私達は、旦那様とリジン様の決定に従うのよ」

「はい」

マリア侍女長の言う通りだ。

私は、主の判断に従えばいい。

お菓子も減り、お茶会も終わりに近づいた頃。

「ルーシャン様　こちらにいらっしゃいましたか」

いつも旦那様に付き従っている、ツールが駆け足で近づいてきた。

「……お茶会でしたか。慌ただしく、失礼いたしました。ヒルドマン侯爵家のリクト様の使いの、ティルー殿がいらっしゃいました。ただ今は客室にてお待ちしていただいております」

リクト様という名に敏感に反応を示したお嬢様。少し身体を浮かせて、それからハッと途中のお茶会に目を向けた。

「ティルー殿が？そう……。リドニア。悪いけど、言ってきたでしょう。用件をお伺いしてほしいの。何なら連れてきても構わないわ」

「……分かりました」

ティルー殿……なんか、頻繁に会っているような気がする。気の

せいかしら。

トールと共にその場を去る。

「旦那様は、最近、その……お元気ですか？」

あまり気乗りはしなかったけど、私は旦那様の様子を聞いた。旦那様にとつて、ここ数日は悪夢のようでしょうね。

シンシア様のことも、ロアのことも。

ロアについては旦那様に直接的には迷惑はかからないけど……ロアは、ルドルフ執事の跡を継ぐことが決定していたのに。

トールは深読みできる間を置いて、頷いた。

「一応、表面上では元気にしていらっしゃいますよ」

「……表面上、ね。裏では？」

平気なわけない。そのことを分かった上で私は尋ねた。

「……あまり、心が安定していません。シンシア様のことが大きく原因となっているようで、ロアのこととは……まだ実感がないふうに見受けられて……」

トールの言うことは、私でも納得できることだった。これまでずっと学校にいたロアは、言い方は悪いけど、頻繁に話題に出てたわけじゃないから。

いきなり表に引つ張り出されても、お互いに戸惑うし……何より実感が湧かない。

「ロアが執事になることは、ほとんど決まっていましたから……」
トールの言葉に、私はふと考えてしまう。

もしも。万が一、ロアが執事にならなかつたら、誰がこの屋敷を仕切るのかしら。

「貴方が、私、でしょうね」

確率は私のほうが高い。

「は？」

「ロア以外の執事候補ですよ。……貴方がミュールだったら、確実に貴方でしょうけど」

トールがミュール家に入る話は、多分出ている。その話を聞いた

わけではないけど、それくらい私にだって推測できる。

きつと近い内に、私かエリザの結婚相手にと話が上がるわ。

「トール、貴方エリザとお似合いですよ？」

「……つまり貴女はお断りだと」

「正式に命じられたら受けるけど」

どちらか選べるなら、嫌。

トールのことは、同僚としか思えないから。

それを言う前にティルー殿のいる客室に着いて、トールは旦那様の元へ戻っていった。

……ロアとトールが、逆の立場だったら良かったのに。

「失礼いたします、ティルー殿」

恐らく旦那様もそうお考えだろうことを思っ、私は部屋に入っ
た。

ティルー殿はソファーに座り、紅茶に口をつけていた。その場面で静止し、私に視線を寄越す。

「リドニアさん」

嬉しそうに……というのは気のせいかもしれないけど……するティルー殿とは対称的に、私は眉間にシワを寄せる。

「まだそれ続けてらしたんですか」

「それ？」

「その「さん」呼びです」

「そんなに嫌ですか？」

「親しげな感じが、とても奇妙な気分させられます」

トールは呼び捨てだけど。トールはほとんど親戚みたいな感じだもの。ティルー殿は他人だし。「では……リドニア？」

「……」

「……冗談です。本日はリクト様の使いですからね。本題に入りますしょう」

座ってくださいと言われたので、ティルー殿の向かいに腰掛けた。「リクト様がこちらのメフィス伯爵邸に訪問したいとおっしゃった

ので、シンシア様の様子見も兼ね、ルーシャン様の予定を尋ねに参った次第……でしたが、それどころではないようですね」

「やはり、分かります?」

「とても」

そう言われれば返す言葉はない。

どちらにせよ、ヒルドマン侯爵家に隠す気は毛頭ない。旦那様もそう言うはずだわ。

「リクト様にも、どの道知らせなければならいことですからね」
そう前置きして、私はロアのことをティール殿に伝えた。

私達に比べれば、ティール殿はロアと会ってからの期間が極端に短い。それに加えてミュール家とメフィス伯爵家との繋がりにも疎く、話を聞き終えた第一声は「へえ」だった。

「ま、そういうこともありますよね」

「普通ありません」

のほほんと頷くティール殿。イチからミュール家とメフィス伯爵家の結び付きについて語ってあげたい。

「ちゃんとリクト様に伝えてくださいよ。それと、関わらなくていいですよってことも」

「はいはい。分かってますよ」

軽く何度も頷いてティール殿は立ち上がった。それにっられて私も立ち上がる。

「どちらに?」

「え?ルーシャン様に挨拶してから帰ろうかと。構いませんよね?」
私は頷いた。

特に断る理由はない。

侯爵家への忠誠

「ミネルバ公爵ですか」

廊下を歩きながら、ティルー殿がぼつりと呟いた。その声音からは、ミネルバ公爵に対する彼の感情を察知できなかった。ただただ、人の言葉を繰り返すように中身の無い声。

「ええ。私も驚きました」

今「実は冗談でした」と言われても素直に頷けるくらいには驚いている。このミュール家が受けている恩恵。皆が感謝していると信じていたのに。

ウォルツ伯爵邸での舞踏会を思い出した。エリザと私とトールでミュール家について話したこと。まさか一番信じていた弟が真つ先に反旗を翻すことになるとは思っていなかったわ。

「ロアくんは将来、メフィス伯爵家の執事になるはずだったんですよね」

「そうです。……はずだったのではなく、今だってその予定ですよ。ロアをミネルバ公爵家になんて渡しません」

微かに声に刺を含ませて睨みつける。客人に対する態度じゃないけど……別に彼相手ならいいんじゃないかしら。どうせ未来の同僚なんだし。

「まあ、ね。それは置いておいて。とすると、次の執事はどなたが？ まさかリドニアさん？」

ちょうど私とトールが話していた内容。ティルー殿は無知だけど、どうやら目の付け所は間違えていないらしい。

「分かりません。私はお嬢様に付いていくつもりでしたが……。私か、もしくはトールの内のどちらかですね」

そうですか、とティルー殿は眉を下げた。

「できれば、リドニアさんにはヒルドマン侯爵邸に来ていただきたいです」

「そ……そうですか？ 光栄ですけど」

そう言われれば悪い気はせず、何だか妙に気恥ずかしい。ティル
ー殿が珍しく真面目な顔で言うからかしら。

「ええ。きつとその時、僕はいないので」

「え……何故？」

当然のように付け足されたその言葉に、私の足は止まった。確かに
ティルー殿は素晴らしい従者とは言えないけれど……リクト様
には合ってると思うわ。それなのに……。

私の思い浮かべる未来像には私がいて、お嬢様がいてリクト様が
いて、ティルー殿がいる。もちろんエリザやローズ様や、リジン様
だってその世界には存在していて。なのに、ティルー殿はいないの？
「色々あって……。そうならないよう、頑張っではいるんですけ
ど」

ティルー殿の説明は曖昧であやふやで、中心の一番大事な部分は
はぐらかされたもの。

色々って何？

そう聞けるほど、私達の関係は近くない。

「そう、ですか。残念ですね」

だからそう言った。声に私の微かな微かな動揺は伝わっていない。
「ですからリドニアさん。ちゃんと、ヒルドマン侯爵邸にきてリク
ト様に仕えてくださいね」

はい、と私は小さく頷いた。

ティルー殿はお嬢様と二言三言話して、すぐに帰った。予定を聞
いていたようだったけど、とりあえず今回の騒動が終わるまでは訪
問を控える、という約束を交わしていた。

勝手に約束なんて、と思ったけど、今日はどうしても小言を言う気になれなかった。

ティル―殿の見送りは私だけ。珍しい訪問者でもなし、お嬢様はお茶会の続きをなさっている。

彼は何もなかったかのような表情をしていて、私もそれにつられてしまう。ティル―殿がなぜ、未来私がヒルドマン侯爵の屋敷に行ったらいないのか。

聞きたいけれど、今その話題を戻すのはあまりにも不自然だった。

「では、また来ますね」

「ええ……ぜひお来ください」

「リクト様とは関係なくても？」

「は？」

ティル―殿のことを考えていてティル―殿の話聞いていなかった。けれどそれを言いたくなくて。

「ええ、ぜひ」

私は笑顔で頷いた。

馬車でヒルドマン侯爵邸に戻るティル―殿を見送り、私は屋敷に戻る。ルドルフ執事がちょうど庭に出ようとしているところだった。彼は私と目が合うと、疲れたように笑った。

「リドニア……少し、良いですか？」

ルドルフ執事の隣に立ち、庭園の花を見る。もちろん、共に観賞をしようというわけじゃない。ロア、ひいては今後のミュール家の話でしょう。

私が辞めたいというよりも、何十倍の影響力を持つ弟。妬みがないということはないわ。だって男社会だからといって、女の価値がないというのはあんまりだと思う。

「リドニアは今回の騒動、どう考えますか」

私の発言によってロアの今後が変わるということは絶対じゃない。私の発言に影響力なんてないから。

けれど彼は迷っている。迷っているからこそ、ルドルフ執事は私

に意見を仰いだのでしょうか。

「私は全面的に反対です、ルドルフ執事。貴方も同じ考えだと信じていますが」

仕事において、私達は平等。そういう決まりを両親は作った。私はルドルフ執事の娘ではなく、大人として見られる。不用意なことを言えば首が飛ぶ。

私の答えはミュール家の義務。ミュール家ならば、こう答えなくてはいけない。

……それに、実際私はこう思ってる。

セルア様に同情なんかしてる場合じゃないのよ。同情なんて軽い感情で、ロアを失えない。

「リドニア。お前はいざという時、ルーシャンお嬢様から離れる覚悟がありますか？」

「……ヒルドマン侯爵邸に行かない、という意味ですか。お嬢様が嫁いだ後、ここに残れと？」

「いざという時です」

示されたとしても話は、この状況に対してとてもリアルに聞こえる。今の私の答えが全てに対する答えのような。

「……それは、私に女執事になれということですか」

「質問に答えなさい、リドニア」

少なくとも、ツールとの婚儀は話に出ていないのかしら。でも確かに、その話を進めるなら応急処置を終えてからのほうが好都合なのかもしれない。

「私、は」

そのような……覚悟を持つ必要性を、感じません。私の主はメフイス伯爵家である前にお嬢様です。

それに私は、とうの昔にリクト様に対して忠誠を誓う覚悟はできております。

お嬢様の婚儀と同時に、私の主はリクト様になる。私はミュール家として、ヒルドマン侯爵家に仕えることを決めている。

私の答えに、ルドルフ執事は頷いた。その目に、私への感情はない。非難も賞賛も。

けれど私のこの忠誠は、時と状況によって曲げられるような柔軟さは持ち合わせていないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4946p/>

お嬢様と侍女の憂鬱

2011年8月5日04時26分発行